

帝国大学農学部の形成と展開に関する研究：九州帝国大学を中心に

藤岡, 健太郎
九州大学大学文書館：准教授

<https://hdl.handle.net/2324/2230707>

出版情報：2019-03-31
バージョン：
権利関係：

平成 27～30 年度科学研究費助成事業
(学術研究助成基金助成金)
基盤研究 (C) 課題番号 : 15K04237
研究成果報告書

帝国大学農学部の形成と展開に関する研究
—九州帝国大学を中心に—

2019 (平成 31) 年 3 月

研究代表者 藤岡健太郎

(九州大学大学文書館准教授)

研究組織

研究代表者 藤岡健太郎（九州大学大学文書館准教授）
研究分担者 新谷 恭明（西南女学院大学保健福祉学部教授）
折田 悦郎（九州大学大学文書館教授）
永島 広紀（九州大学韓国研究センター教授）
陳 昊（九州大学大学院人間環境学研究院学術協力研究員）
井上美香子（福岡女学院大学人文学部講師）
研究協力者 伊東かおり 大賀祥治 小倉徳彦 桂木勝彦 金川久美子
都留慎司 長崎春奈 韓相一 松尾大輝

交付決定額

2015年度：1820千円（直接経費：1400千円，間接経費：420千円）
2016年度：900千円（直接経費：700千円，間接経費：210千円）
2017年度：1300千円（直接経費：1000千円，間接経費：300千円）
2018年度：650千円（直接経費：500千円，間接経費：150千円）

研究成果

1) 研究発表

藤岡健太郎「帝国大学の朝鮮演習林—九州帝国大学南鮮演習林を中心に—」（「韓・日学術林研究交流 Workshop」、2016年3月10日、ソウル大学）

永島広紀「朝鮮総督府試験場・水原高等農林学校と九州帝国大学農学部」（「韓・日学術林研究交流 Workshop」、2016年3月10日、ソウル大学）

藤岡健太郎「各大学・機関に残る旧外地演習林関係資料の概況」（ワークショップ「旧外地演習林研究の地平」、2018年3月5日、九州大学）

藤岡健太郎「大学史アーカイブズと大学演習林」（国際シンポジウム2019「アジアから見た、《大学演習林》—その来し方と行く末—」、2019年2月9日、九州大学）

2) 研究論文

藤岡健太郎「帝国大学農学部の形成と展開—学科・講座・附属施設の設置に着目して—」（『帝国大学農学部の形成と展開に関する研究—九州帝国大学を中心に—』平成27～30年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）（基盤研究（C）課題番号：15K04237）研究成果報告書、2019年3月）

藤岡健太郎「帝国大学農学部の教官人事」(『帝国大学農学部の形成と展開に関する研究—九州帝国大学を中心に—』平成 27～30 年度科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)(基盤研究(C) 課題番号: 15K04237) 研究成果報告書、2019 年 3 月)

藤岡健太郎「演習林と帝国大学」(『帝国大学農学部の形成と展開に関する研究—九州帝国大学を中心に—』平成 27～30 年度科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)(基盤研究(C) 課題番号: 15K04237) 研究成果報告書、2019 年 3 月)

目 次

帝国大学農学部の形成と展開	
—学科・講座・附属施設の設置に着目して—	藤岡健太郎 (5)
帝国大学農学部の教官人事	藤岡健太郎 (37)
演習林と帝国大学	藤岡健太郎 (47)
2016年韓国における演習林史ワークショップ・旧演習林調査報告	(69)
帝国大学農学部教官人事一覧	(75)

帝国大学農学部の形成と展開

—学科・講座・附属施設の設置に着目して—

藤岡健太郎

はじめに

人間が農耕を開始して以降、農は人間生活の根本を支えるものとなり、社会を成り立たせる基本的な要素となった。人は農業生産を増やすためにさまざまな工夫を行い、それはやがて農学という学問分野を生んだ。農のあり方はそれぞれの社会を成り立たせている風土によって異なるものであるが故に、農学はそれぞれの社会で独自の発展を遂げ、現在に至っている。

日本でも古来、農学は独自の発展を遂げていたが、明治以降、西洋の近代農学が導入された。いわゆる御雇外国人が日本にやってきて農業指導をし、農学者を育てると同時に、日本人が欧米諸国に留学して農学を修め、それを持ち帰って日本の農業・農学の発展に尽くしていった。

ではその発展の過程はどのようなものであったのか。このことについては枚挙に遑がないほどの膨大な研究の蓄積があり、筆者がいまさらその研究の中心に参入するまでもないことである。この研究では、日本の農業・農学の発展を担う重要な要素のひとつである帝国大学農学部について、その形成と展開の過程を、農業史・農学史・農業教育史ではなく大学史の観点から明らかにすることを目的とする。

そのため着目したいのは農学部の学科・講座・附属施設の設置である。学部はもちろん、その内部組織である学科・講座・附属施設についても、文部省に要求して設置のための予算を獲得せねばならない。そのため、いつ、どの学科・講座・附属施設が設置されたかをみることにより、各農学部がどのような展開を遂げたか、大学史的に明らかにすることができると思われる。

そこで本稿では、各帝国大学における学科・講座・附属施設の設置を跡づけることで、帝国大学農学部の形成と展開の過程を明らかにする。

なお、「農学部」の名称は 1919 年の大学令以降に使用されるものであるが、本稿ではそれ以前の農科大学の時代も含め、全体を表す場合は「農学部」を使用し、それ以外についてはそのときに使用されている名称で表すこととする。

1 東京帝国大学農科大学の設立

(1) 駒場農学校から東京農林学校へ

日本最初の大学農学部は、1890年に設立された東京帝国大学（東大）農科大学である。これは農商務省の所管する東京農林学校を改組すると同時に文部省に移管したものであり、その系譜は東京山林学校と駒場農学校へ、さらに農事修学場へと遡ることができる。

農事修学場は1874年、内務省勸業寮内藤新宿試験場に設置され、1876年に外国人教師5名を雇い入れ、最初の生徒106名が入学した。翌1877年末には駒場野に移転し、農学校として正式に開設された。農学校には当初、予科・農学本科・獣医科・農芸化学科・試業科の5科が置かれた。1881年、内務省勸農局は廃止され、その事務は新設の農商務省が受け継ぐこととなり、農学校も農商務省の所管となった。

1882年、農学校は駒場農学校と改称し、3年制の農学・農芸化学・獣医学の3専門科が置かれ、その予備教育を行う2年制の予備学科があわせて置かれた。3専門科の卒業生はそれぞれ農学士・農芸化学士・獣医学士の学位が授与されることとなった。

一方、同じく1882年、農商務省は東京山林学校を設立した。駒場農学校が農務局の所管であったのに対し、東京山林学校は山林局の所管であった。東京山林学校は山林学科のみで予備学科は置かれなかった。修業年限は当初は駒場農学校と同じく3年間だったが、1884年に5年間に延長された。なお、駒場農学校は翌1885年に予備学科を1年延長している。

1886年、駒場農学校と東京山林学校は廃止され、両校を継承して東京農林学校が設立された。所管は引き続き農商務省であった。農学部・林学部・獣医学部が置かれたが、農学部と獣医学部は駒場農学校を、林学部は東京山林学校を引き継いだものであった。修業年限は農学部・林学部が2年、獣医学部が3年であった。また、3年制の予備科と、各学部附設の2年制の速成科が置かれた。この構成と修業年限は1887年、各学部を本科と予科に分け、別に簡易科（農科・獣医科・林科・水産科の4科）を置き、いずれも3年制とするという改正がなされている。卒業生については、当初卒業証書が授与されるのみで、駒場農学校とは異なり学士を称することはできなかったが、1889年に本科卒業生については1886年入学生から農学士、獣医学士、林学士をそれぞれ称することができるようになった¹。

(2) 帝国大学農科大学の設立と講座制の発足

1877年、日本最初の大学として東京大学が創立された。東京大学は、東京開成学校を継承した法学部・理学部・文学部と、東京医学校を継承した医学部の4学部からなっていた。東京大学は1886年、帝国大学令により帝国大学となり、既設の法学部・医学部・文学部・理学部をそれぞれ法科大学・医科大学・文科大学・理科大学とし、1871年に工部省が設立した工部寮を起源とする工部大学校を合併して工科大学とした。

1890年、東京農林学校は文部省に移管され、帝国大学に合併されて、農科大学となった。

農科大学には農学科・林学科・獣医学科が置かれ、農学科は第一部と第二部に分けられ、第二部は農芸化学を中心とするものとされた。この第二部は 1893 年に独立して農芸化学科となった。

1893 年、帝国大学令改正により各文科大学に講座を置くこととなり、同年勅令第 93 号により講座の種類およびその数が定められた。帝国大学農科大学には、農学科を担当する講座として農学第一、農学第二、植物学、動物学・昆虫学・養蚕学第一、動物学・昆虫学・養蚕学第二、園芸学第一、農林物理学・気象学、農政学・経済学第一の 8 講座が置かれた。林学科を担当する講座としては林学第一、林学第二、林学第三の 3 講座が、獣医学科担当講座として畜産学第一、家畜解剖学、家畜生理学、家畜内科学・家畜外科学第一、家畜内科学・家畜外科学第二、家畜内科学・家畜外科学第三の 6 講座がそれぞれ設置された。この年設置された農芸化学科の担当として農芸化学・化学第一、農芸化学・化学第二、地質学・土壌学の 3 講座が置かれた。こうして旧制大学を特徴づける講座制は、農科大学では 20 講座の設置の設置により発足した²。

附属施設等については、東京農林学校の農場と家畜病院が農科大学に引き継がれた。また、駒場農学校の試業科に起源をもつ東京農林学校の簡易科を農科大学乙科とした。1894 年には初の大学演習林として千葉演習林を設置している。

2 東北帝国大学農科大学・北海道帝国大学農科大学の設立

(1) 札幌農学校

1869 年、開拓使が設置され、これを中心として北海道開拓が進められることとなった。開拓使は北海道開拓の技術者養成のため 1871 年仮学校を東京に設置した。授業は翌年から開始され、初年度 69 名が全国から入学した。しかし仮学校は運営がうまくいかず、1873 年 3 月にいったん閉校となってしまふ。規則の改正等を行って 4 月に再開されるが、生徒・教員については大幅な絞り込みが行われた。1875 年、仮学校は札幌に移転し、校名は「札幌学校」となった。翌 1876 年には専門科が設置され、札幌農学校が開校した。

札幌農学校は、開拓使官吏の養成を目的としたもので、修業年限は本科（専門科）4 年、予備教育を行う予科が 3 年であった。教師は日本人のほか、クラーク (William Smith Clark) をはじめとする外国人教師がおり、外国人教師による授業はすべて英語で行われた。札幌農学校には農場である「校園」が附設され、実習が行われた。卒業生には駒場農学校等と同様に、農学士の学位が与えられた。

1882 年に開拓使は廃止され、札幌農学校は農商務省に移管された。さらに 1886 年に北海道庁が設置されると、札幌農学校はその所管となった。翌 1887 年、札幌農学校は組織の再編を行い、本科を農学科と工学科に分け、予科を廃止して 4 年制の予備科を設け（1889

年名称は予科に戻された)、簡易農業教育機関として2年制の農芸伝習科を新設した。これらのうち工学科は、土木工学を教授するものであった。1889年には屯田兵士官の養成を目的として兵学科も置かれている。

1895年、札幌農学校は文部省に移管された。その際、工学科と予科、そしてすでに生徒がいなくなっていた兵学科が廃止された。このように文部省移管にあたって縮小された札幌農学校であったが、1897年に土木工学科が設置されると、拡張に転じることとなる。翌1898年には予備教育機関である予修科が、1899年には森林科(1905年に林学科と改称)が、1907年には水産学科が設置された。

一方で、財政的な困難にも直面した。1889年、政府は会計法を制定し、官庁が資産を有することを禁止した。このため札幌農学校では、農園経営からの収益により維持資金の増加を図ることができなくなった。そこで札幌同窓会に農園を払い下げて同窓会農園とし、同窓会が農学校の維持資金の増加を図るようにした。財政問題は、文部省移管後に官立学校及図書館会計法の適用を受けることで解決することとなった。すなわち、農学校の土地建物は札幌農学校維持資金に編入され、札幌同窓会所有の農園も農学校に寄付されて維持資金に編入されたのである。さらに北海道庁より土地の寄付を受け、札幌同窓会の農園とあわせて第一～第八農場を設置した。また、北海道庁からの寄付を得て、1901年に第一基本林を、1902年に第二基本林を、それぞれ財産林として設置した。これらはのちに演習林となる³。

こうして札幌農学校は、駒場農林学校・東京農林学校とは異なる独自の発展を遂げていった。そして1907年には、日本で2番目の農科大学となるのである。

(2) 東北帝国大学農科大学

1907年、日本で3番目の大学として、東北帝国大学(東北大)が創立された。東北大は創立時は理科大学と農科大学からなり、理科大学は仙台に、農科大学は札幌に置かれた。札幌農学校と関係者、北海道庁等の間では1890年代後半から北海道帝国大学設置運動が始まっており、それは札幌農学校を大学に昇格させようとするものであった。しかし帝国大学は総合大学でなければならないとされていたため、札幌農学校単独での昇格は困難であった。そこで東北帝国大学設置運動と結びつき、その一分科大学として札幌農学校を農科大学に昇格させる、という運動となっていった。その結果、東北帝国大学農科大学が、札幌農学校を継承して設立されたのである。

東北大農科大学は本科、予科、付設学科から構成された。本科には農学、農芸化学、林学、畜産学の4学科が置かれた。ただし、初年度から授業を行ったのは農学科と農芸化学科のみで、林学科・畜産学科の授業開始は1910年からであった。農科大学設立と同時に農学科を担当する講座として農学第一、農学第二、農芸物理学、植物学第一、動物学昆虫学養蚕学第一、動物学昆虫学養蚕学第二、動物学昆虫学養蚕学第三、園芸学、農政学殖民学の9講座が置かれた。農芸化学科については農芸化学第一、農芸化学第二の2講座が設置された。林

学科は設立初年度は講座が置かれず、畜産学科については畜産学第一講座が置かれたのみであった。翌 1908 年、農学科を担当する植物学第二、農芸化学科の農芸化学第三の両講座が設置された。1909 年にはそれまで担当する講座がなかった林学科の最初の講座として林学第一講座が置かれた。第 1 期生が卒業学年を迎えるこの年までに設置されたのは 15 講座で、東大が初年度だけで設置した 20 講座に比べると少なかった。

これは林学科・畜産学科の授業開始が 1910 年からであったことによっている。そのため 1910 年以降も講座の新設は続けられた。この年、農芸化学科を担当する農産製造学、林学科の林学第二、畜産学科の畜産学第二と獣医学第一の各講座が増設された。1911 年、林学科の林学第三と林学第四、獣医学科の獣医学第二の各講座が置かれた。1912 年には林学科を担当する林政学及森林管理学講座が設置された。1913 年規則改正が行われ、農学科 3 部に、畜産学科は 2 部に分けられた。それまでに設置されていた講座の担当学科は表 1 のように割り振られた。

表 1 部制導入後の東北大農科大学農学科・畜産学科の担当講座

農 学 科		
第一部	第二部	第三部
農学第一 農芸物理学 動物学昆虫学養蚕学第三 園芸学	農学第二 農政学殖民学	植物学第一 植物学第二 動物学昆虫学養蚕学第一 動物学昆虫学養蚕学第二
畜産学科		
第一部	第二部	
畜産学第一 畜産学第二	獣医学第一 獣医学第二	

1915 年、農学科第一部を担当する農学第三、同第二部の経済学財政学、農芸化学科の応用菌学の各講座が設置された。1917 年には東北大農科大学時代の最後の新設講座として、農学科第一部を担当する農学第四講座が置かれた。こうして北海道帝国大学創立前までに講座数は 27 となった。

予科は 3 年制で、札幌農学校予修科生を編入して発足した。高等学校に相当する機関であり、内地帝国大学ではこののちも唯一の予科となった。また付設学科として、農学実科・土木工学科・林学科・水産学科が置かれた。付設学科は専門学校相当の教育機関で、修業年限は 3 年であった。なお、1910 年本科林学科の授業開始に伴い、付設学科の林学科は農学実科に名称変更している。

附属施設等は、農場・演習林等を札幌農学校から受け継ぎ、第一基本林は雨竜演習林、第二基本林は天塩演習林（1914年より天塩第一演習林）に改称した。さらに1912年にトイカンベツ演習林（1914年より天塩第二演習林）と余市果樹園を、1913年には外地演習林として朝鮮演習林と樺太演習林を、1916年に台湾演習林を、それぞれ設置した。このほか、1908年に水産学科の実習・研究施設として忍路臨海実験所を、1910年に獣医学実験室を使用して家畜病院を設置した⁴。

こうして東北大農科大学は、札幌農学校の教育・研究体制や農場・演習林等の資産を受け継いで設立された。そしてその歴史の上に立って、そこからさらなる展開を遂げることとなる。

(3) 北海道帝国大学農科大学の設立

1918年、農科大学は東北大から独立し、医科大学を新たに設立して北海道帝国大学（北大）を創立した。翌1919年より分科大学は学部に変更され、農科大学は農学部となった。

北大創立時に農科大学で新たに設置された学科・講座はない。農学部となった1919年、農学科の3部はそれぞれ学科として独立し、第一部が農学科に、第二部が農業経済学科に、第三部が農業生物学科になった。

北大創立により大きく変わったのは付設学科の位置づけである。北大創立前の時点で農科大学には予科と、農学実科・土木工学科・林学実科・水産学科の4付設学科があったが、このうち予科は、北海道帝国大学に直属する大学予科となった。土木工学科は附属土木専門部、水産学科は附属水産専門部として、それぞれ農科大学の付設学科から、予科と同様に大学に直属する専門部（専門学校相当の大学附属学校）になった。水産専門部は1935年に北大から独立して函館高等水産学校となり、戦後は再び北大に戻って、水産学部の母体となっている。

(4) 東大農科大学・農学部の拡充

ここで1890年代から1910年代にかけての東大農科大学・農学部の状況を見たいので、東北大農科大学・北大農学部と若干の比較をしてみよう。

東大では1893年の農科大学設立後しばらく学科・講座の新增設はなかったが、1900年に林学科担当の林学第四、農芸化学科担当の農産製造学の2講座が設置されて以降、講座が増加していった。1902年に林学科担当の森林利用学講座、1905年に獣医学科担当の家畜衛生学・家畜薬物学講座、1906年は農芸化学科担当の農芸化学・化学第三と農学科担当の植物病理学の2講座が設置されている。さらに水産学科新設を目指して、1907年に水産学第一、水産学第二、水産学第三、水産海洋学の4講座が設置された。水産学科は1910年に設置され、これは日本の大学における水産学教育・研究の嚆矢となった。この間の1908年

表2 学部制発足時の東大・北大農学部の学科・講座数

東 大		北 大	
学科	講座数	学科	講座数
農学科	12 (農学第一、農学第二、植物学、植物病理学、動物学・昆虫学・養蚕学第一、動物学・昆虫学・養蚕学第二、動物学・昆虫学・養蚕学第三、園芸学第一、農林物理学・気象学、農政学・経済学第一、農政学・経済学第二、農業工学第一)	農学科	6 (農学第一、農学第三、農学第四、農芸物理学、動物学昆虫学養蚕学第三、園芸学)
		農業経済学科	3 (農学第二、農政学殖民学、経済学財政学)
		農業生物学科	4 (植物学第一、植物学第二、動物学昆虫学養蚕学第一、動物学昆虫学養蚕学第二)
農芸化学科	5 (農芸化学・化学第一、農芸化学・化学第二、農芸化学・化学第三、地質学・土壌学、農産製造学)	農芸化学科	4 (農芸化学第一、農芸化学第二、農芸化学第三、応用菌学)
林学科	5 (林学第一、林学第二、林学第三、林学第四、森林利用学)	林学科	5 (林学第一、林学第二、林学第三、林学第四、林政学及森林管理学)
獣医学科	8 (畜産学第一、畜産学第二、家畜解剖学、家畜生理学、家畜内科学・家畜外科学第一、家畜内科学・家畜外科学第二、家畜内科学・家畜外科学第三、家畜衛生学・家畜薬物学)	畜産学科	4 (畜産学第一、畜産学第二、獣医学第一、獣医学第二)
水産学科	4 (水産学第一、水産学第二、水産学第三、水産海洋学)		

には農学科を担当する農政学経済学第二講座が増設され、1911年には農学科担当の農業工学講座、1912年には獣医学科担当の畜産学第二講座、1916年には農学科担当の動物学・昆虫学・養蚕学第三講座が設置された。

また、附属施設についても拡充等が行われている。1898年、乙科を廃止して実科を置いた。翌1899年には農業補習学校教員を養成する農業教員養成所を設置した。修業年限は当

初は1年であったが、1909年からは2年に、さらに1919年からは3年になっている。農場については東京農林学校から引き継いでいたが、1906年に官制で附属農場長が置かれ、組織上に農場が位置づけられた。演習林については1899年に2番目の演習林として北海道演習林を設置し、さらに1902年には台湾・府中・代々木の3演習林を設置した。こののちしばらく設置がなかったが、1912年に朝鮮の江原道、全羅南道の両演習林を設置すると、1914年に樺太、1916年に秩父の各演習林を設置していき、演習林の面積は合わせて15万haを超えるまでになった。この時期は東大演習林の大拡張が行われた時期であった。

農科大学が農学部となった時点で東大と北大の学科とそれぞれの担当講座数を比較すると表2のとおりである。この表からは次のようなことが明らかとなる。一見すると、農学科は東大の方が講座数が多いようであるが、東大農学科を担当する講座は、北大の場合は農学科・農業経済学科・農業生物学科にまたがっており、それを考慮すれば講座数はほぼ同じである。農芸化学科・林学科の講座数も両者に大きな差はない。この3（北大は5）学科については、大学としては東大が先発で北大が後発であったものの、規模の差はなかったと言える。一方、差があるのは東大の獣医学科と北大の畜産学科である。現在北大の獣医学が学部として独立していることからすれば意外の感もあるが、この時点では東大の獣医学科8に対し北大の畜産学科は4と、講座数に関しては大きな差がついている。水産学科は北大にはまだ設置されていない。このように、この時点では農学科（および農業経済学科・農業生物学科）と農業経済学科・林学科については東大・北大の規模はほぼ同じであるが、獣医学科（畜産学科）と水産学科については東大の方が北大よりも規模的には優位であったと言える。

以上みてきたように、東大と北大は前身校から大学となり、農科大学から農学部となった時期までにそれぞれの発展を示してきた。1920年代になると、この2大学に加え、九州帝国大学（九大）・京都帝国大学（京大）にも農学部が設立される。次にこの両大学の農学部の設立についてみてみよう。

3 九州帝国大学・京都帝国大学農学部の設立

(1) 演習林の設置

九大・京大の農学部に関して特異な点は、農学部が設立される以前に、演習林を設置している点である。京大の場合は1909年に台湾演習林を設置したのち、12年に朝鮮、15年に樺太の両演習林を設置した。九大は1912年に朝鮮演習林を設置したのを皮切りに、13年に台湾、14年に樺太の両演習林を設置している。

農学部がまだ設立されていないにもかかわらず演習林が設置されたのは、第一に将来的に農学部を設立したいという大学としての意思があったからであった。また、これを財産林

として、そこからの利益を大学の収入としたい、という意図もあった。そのため両大学ともに、農学部設立前に演習林を獲得したのである。

しかし、演習林用地の獲得はできても、実際にそこに演習林を設置する能力は、農学部が設立されておらず林学の専門家が学内にいないが故に、両大学とも不可能であった。そのため、すでに農学部（農科大学）林学科がある他大学や、現地の官庁に設置のための作業を依頼するほかなかった。例えば九大樺太演習林の場合、文部省と拓殖局との間で演習林用地の譲与が決定されたのち、九大から測量技術者を派遣し樺太庁立ち会いの上区域を確定し、同庁より実地の引き継ぎを受けるよう1912年12月、文部省から九大に指示がなされている。しかし九大には林学者がいなかったため、1913年7月、東大農科大学に依頼し、教授右田半四郎・同助手三浦常雄・同雇地引平吉を嘱託として樺太に派遣した。3名は樺太庁と演習林予定地区につき協議したうえで、右田は1週間ほど実地視察して引き揚げ、三浦・地引の両名が約1か月かけて現地を測量した。その結果を右田がまとめて報告書・地図等を11月に九大に提出している。その後の手続きは不明だが、おそらくこの調査結果に基づいて必要な書類を作成して樺太庁に所管換を申請したものと思われる。1914年3月27日付で樺太庁より20,500町の所管換了承の通知があったが、九大は、遠隔地のため樺太庁の立会実測を行っての実地引き渡しが困難であるので書面での引き渡しを要望した。それが容れられて書面引き渡しが行われ、4月10日付で演習林領収書を樺太庁に交付、樺太演習林の設置となった。こうして樺太演習林は、九大からだれも現地に赴かないまま、設置されることとなったのである⁵。

このように、九大・京大はまず演習林を設置した上で、農学部設立を要求していくこととなる。

(2) 九州帝国大学農学部の設立

九大の創立は1911年で、最初に演習林を設置したのはその翌年のことであった。したがって九大は創立当初から農学部設立の意思をもっていたわけであるが、それを本格的に表明した最初は、第2代総長真野文二である。真野は1915年1月20日の『福岡日日新聞』で、農科大学は「農学の研究上北寒地、中央地、及び暖地方の三区域に設」けるのが便利であり、また農学は医学・工学とも密接な関係があるため、この3科を併せ持つのが総合大学として最も必要である、と主張した。これを受けて福岡県では官民挙げての農科大学設立運動が開始された。一方、同じ九州の農業県である熊本・鹿児島・佐賀3県でも農科大学を誘致する動きが起きた。中でも鹿児島県には鹿児島高等農林学校が、盛岡に次ぐ2番目の農林学校として1908年に創立されており、これを大学に昇格させるということを主張して福岡県と激しく争った。最終的には大学としての総合性が優先され、福岡県への設置が決定している。

東大・北大がそれぞれ東京農林学校・札幌農学校という前身校があったため、その人員や

設備を引き継いで発足できたのに対し、九大の場合は前身校がなく、演習林を除けばゼロからのスタートということになった。農科大学の設立が決定すると、本田幸介（朝鮮総督府勸業模範場技師）・古在由直（農事試験場長兼東京帝国大学農科大学教授）・河合鉢太郎（東京帝国大学農科大学教授）が創立委員に任命され、設立準備を開始する。農科大学は工科大学の隣接地に設置されることとなり、1919年4月1日付で九州帝国大学農学部が設立された。初代学部長には本田幸介が就任した。

学科・講座は1920年から設置が開始され、農学科と、農学第一、農学第二、動物学第一、動物学第二、植物学の5講座のみがまず設置された。1921年には植物病理学、生物化学、林学、畜産学第一、経済学・農政学第一の5講座が増設された。1922年に農芸化学・林学の2学科が新設され、農学科担当講座として農学第三、農業工学、園芸学、養蚕学の3講座を増設した。農芸化学科については農芸化学第一、農芸化学第二、農産製造学の3講座を新設し生物化学講座を農学科から担当換えとした。また林学科には農学科から林学講座を担当換えして林学第一講座とし、林学第二、林学第三、林学第四の3講座を新設した。さらに1923年、農学科担当講座として畜産学第二、経済学・農政学第二、気象学・統計学の3講座を、農芸化学科担当には農芸化学第三講座を、林学科担当に林学第五講座を増設し、3学科25講座をもって一応の完成をみた。

こうして1923年までに九大農学部の学科・講座体制は整えられたが、学生は1921年から入学が開始された。初年度の入学者（正科生）はわずか3名で、少数精鋭となった。そのうちの1人、趙伯頤は本田幸介が校長を務めていた水原農林専門学校の出身である。九大農学部では趙のような高等学校卒業生以外の「傍系」学生がこののちも多数入学し、朝鮮など外地出身者も多かった。また、授業開始にあわせて同年農場が設置され、また林学科の設置にあわせて1922年、演習林が大学本部から農学部附属施設として移管された⁶。

九大農学部の場合、学科・講座数が少ないといったところがあるが、設置された講座を見てみると、東大農学部によく似ていることがわかる。東大農科大学教授および卒業生が創立委員を務め、制度設計が行われたこともあり、東大をモデルとした構成がとられていると言えよう。

(3) 京都帝国大学農学部の設立

京大では、九大創立よりも早く1909年に台湾演習林を設置し、農学部設立の希望をもっていたが、その実現は長らくかなわなかった。3番目の農学部として九大農学部が設立されたのと同じ1919年、ようやく京大農学部の設立が帝国議会で決定され、京大では荒木虎三郎総長を委員長とする農学部創設委員会が設置された。その委員は総長・事務官・各学部長と4名の教授のほか、東大農科大学から鈴木梅太郎・古在由直・河合鉢太郎らが委嘱された。九大が学外の専門家に設立準備を委ねたのに対し、京大はできるだけ学内の教官を中心に設立準備を行おうとしたものと言えるだろう。この委員らによって準備が進められ、1923

年京大農学部は設立された。初代学部長には、東大出身で財団法人大原奨農会農業研究所化学部長であった大杉繁が就任した。学生は設立翌年の1924年から入学を開始した。

設立時点では学科は置かれず、まず林学第一、林学第二、農林化学第一、農林化学第二、農林生物学第一の5講座が設置された。翌1924年、農作園芸学、林学、農林化学、農林生物学、農林工学、農林経済学の6学科を設置した。農作園芸学科担当講座は農作園芸学第一、農作園芸学第二の2講座が新設された。林学科は既設の林学第一、林学第二の2講座を担当させ、新たに林学第三講座を設置した。農林化学科は既設の農林化学第一、農林化学第二に加え、農林化学第三、農林化学第四の2講座を新設した。農林生物学科は既設の農林生物学第一と、新設の農林生物学第二、農林生物学第三の2講座が担当した。農林工学科の担当講座は農林工学第一、農林工学第二の2講座が新設された。農林経済学科は設置当初は農林経済学1講座のみで担当していた。1925年にはさらなる講座の新設と、講座名称の大幅な変更が行われた。農作園芸学科は育種学講座を新設、農作園芸学第一を作物学に、農作園芸学第二を園芸学第一に名称変更した。農林化学科は農芸化学第三、林産化学の2講座を新設し、既設4講座はすべて名称を変更し、農林化学第一は農芸化学第一、農林化学第二は農芸化学第二、農林化学第三は農産製造学、農林化学第四は栄養化学となった。農林生物学科は新設講座はなく、こちらにも既設全講座の名称変更が行われ、農林生物学第一は植物病理学、農林生物学第二は昆虫学、農林生物学第三は実験遺伝学となった。農林工学科は林業工学第一と農業機械学の2講座が新設され、既設の農林工学第一は農業工学第一に、農林工学第二は農業工学第二に、講座名称を変更した。1講座であった農林経済学科は農政学、林政学、農史の3講座が新設され、農林経済学講座は農業経営学講座に名称変更が行われた。さらに1926年には、農作園芸学科が農学科に名称変更され、同学科担当講座として園芸学第二、林学科に造園学、農林化学科に発酵生理及び醸造学、農林生物学科に応用植物学、農林工学科に林業工学第二、農林経済学科に農業計算学の計6講座が、それぞれ新設された。こうして6学科29講座をもって、一応の完成をみた⁷。

演習林については台湾演習林ののち朝鮮・樺太の2つの外地演習林を設置していたが、学生実習等に使用する内地演習林については、農学部設立に先立つ1921年に芦生演習林を設置している。組織としての演習林は1924年に農学部附属となった。農場は九大と同様に授業開始にあわせて1924年に設置された。また、同じく1924年には農林経済調査室が設置された。

九大が東大の影響を受けたとみられるのに対し、京大は東大とも北大とも異なる農学部を作ろうとしていたと見受けられる。特に、当初は農学科ではなく農作園芸学科、農業生物学科や農芸化学科ではなく農林生物学科や農林化学科など、独特の学科・講座名称にそれが表れていると言えるだろう。また、他大学にはある畜産学・獣医学分野の講座が全くなかった一方で、他大学にはまだなかった農林工学科をいち早く設置したり、農史講座など他大学にはない講座を設置するなどしている点も、他大学との違いを見せたいという意思が読み

表3 1926年の4大学

東大		北大	
学科	講座数	学科	講座数
農学科	10 (農学第一、植物学、植物病理学、動物学・昆虫学・養蚕学第一、動物学・昆虫学・養蚕学第二、動物学・昆虫学・養蚕学第三、園芸学第一、農林物理学・気象学、農業工学第一、農業工学第二)	農学科	6 (農学第一、農学第三、農学第四、農芸物理学、動物学昆虫学養蚕学第三、園芸学)
		農業生物学科	5 (植物学第一、植物学第二、植物学第三、動物学昆虫学養蚕学第一、動物学昆虫学養蚕学第二)
農業経済学科	4 (農学第二、農政学・経済学第一、農政学・経済学第二、農政学・経済学第三)	農業経済学科	5 (農学第二、農政学、殖民法学、経済学財政学、農林法律学)
農芸化学科	7 (農芸化学・化学第一、農芸化学・化学第二、農芸化学・化学第三、農芸化学・化学第四、農芸化学・化学第五、地質学・土壤学、農産製造学)	農芸化学科	5 (農芸化学第一、農芸化学第二、農芸化学第三、応用菌学、農産製造学)
林学科	6 (林学第一、林学第二、林学第三、林学第四、森林利用学、森林化学)	林学科	6 (林学第一、林学第二、林学第三、林学第四、林政学及森林管理学、森林工学)
獣医学科	8 (畜産学第一、畜産学第二、家畜解剖学、家畜生理学、家畜内科学・家畜外科学第一、家畜内科学・家畜外科学第二、家畜内科学・家畜外科学第三、家畜衛生学・家畜薬物学)	畜産学科	8 (畜産学第一、畜産学第二、畜産学第三、獣医学第一、獣医学第二、皮革製造学、家畜衛生学、比較病理学)
水産学科	4 (水産学第一、水産学第二、水産学第三、水産海洋学、水産化学)		

農学部の学科・講座数

九 大		京 大	
学科	講座数	学科	講座数
農学科	15 (農学第一、農学第二、農学第三、動物学第一、動物学第二、植物学、植物病理学、畜産学第一、畜産学第二、経済学・農政学第一、経済学・農政学第二、農業工学、園芸学、養蚕学、気象学・統計学)	農学科	4 (作物学、園芸学第一、園芸学第二、育種学)
		農林生物学科	4 (植物病理学、昆虫学、実験遺伝学、応用植物学)
		農林経済学科	5 (農業経営学、農政学、林政学、農史、農業計算学)
農芸化学科	5 (農芸化学第一、農芸化学第二、農芸化学第三、生物化学、農産製造学)	農林化学科	7 (農芸化学第一、農芸化学第二、農芸化学第三、農産製造学、栄養化学、林産化学、発酵生理及び醸造学)
林学科	5 (林学第一、林学第二、林学第三、林学第四、林学第五)	林学科	4 (林学第一、林学第二、林学第三、造園学)
		農林工学科	5 (農業工学第一、農業工学第二、林業工学第一、林業工学第二、農業機械学)

取れる。こうして京大農学部は、既存 3 大学とは異なる農学部のあり方を形成したのである。

(4) 九大・京大農学部設立期の東大・北大農学部

ここで、1920 年から、京大農学部が一応の完成をみた 1926 年までの東大・北大農学部の講座等の設置状況を見ておこう。

まず東大では、1921 年に農芸化学科担当講座として生物化学講座が新設された。翌 1922 年には農学科担当として農政学・経済学第三、林学科担当として森林化学の両講座が設置された。1923 年に農学科担当として農学第三講座、農芸化学科担当として農芸化学・化学第四、農芸化学・化学第五の両講座が、水産学科担当として水産化学講座が、1925 年に農学科担当として農業工学第二講座が、それぞれ設置された。また、同じく 1925 年には農業経済学科が新設され、農学科から農学第一、農政学・経済学第一、農政学・経済学第二、農政学・経済学第三講座が担当換えとなった。附属施設では 1922 年に愛知演習林が、1925 年に富士演習林、箱根演習林、二宮果樹園が設置された一方で、代々木演習林は大学の敷地拡張に伴う土地交換により廃止された。

北大では、1920 年に農業生物学科を担当する植物学第三、畜産学科担当の皮革製造学と家畜衛生学の 3 学科が設置された。1921 年には林学科担当の森林工学講座が、1922 年には畜産学科担当の畜産学第三、比較病理学の両講座が設置されている。さらに 1924 年には農業経済学科担当講座の農政学殖民学講座を農政学講座と殖民学講座に分離し、農林法律学講座を新設した。この間に農業経済学科は 2 講座、畜産学科は 3 講座増やしており、両学科の拡張に力を入れていたと言えるであろう。一方、附属施設は和歌山演習林が設置されたのみであった。

次に 1926 年時点での 4 大学の学科・講座数を表 3 で見てみよう。前項でも指摘したように、京大の独自性は際立っていると言えるだろう。九大の農学科は講座数が全大学農学部の学科の中で最も多く、九大農学部の講座数の 6 割を占めているが、これは他大学であれば農業生物学科や農業経済学科、畜産学科等を担当している講座が、九大ではそのような学科なく、農学科に集約されているためとみるべきだろう。九大は正系入学者だけでは学生を確保できず、傍系を含めても定員に満たない場合もあり、学科の増加は容易ではなかったものと考えられる。北大は畜産学科の講座数が東大獣医学科の講座数に追いついており、畜産学・獣医学分野で東大と双璧をなす体制が構築された。水産学科は依然として東大以外には設置されず、水産学は大学レベルでは東大の独占状態にあった。学科数は東大・北大・京大がいずれも 6 で、九大はその半分の 3 にとどまり、3 大学との間で差がついてしまっている。

4 4 農学部体制成立後の展開

京大農学部の設定によって、内地帝国大学の農学部は 4 学部体制がしばらく続くこととなる⁸。ここからは時期を区切って、4 大学を横断的に見ていくことにする⁹。

(1) 1920 年代後半から日中開戦期まで

1920 年代後半から 1930 年代前半にかけての日本は財政難の時代であり、大学の拡張は容易ではなかった。拡張はおろか、演習林に関しては整理縮小が議論されていたほどである。そのため、学科・講座・附属施設の新設等は京大農学部の一応の完成以降、1937 年の日中戦争勃発のころまでは、非常に少なくなっている。

学科の新設は 1935 年の東大農業土木学科のみである。これは 1925 年に発足した農学科農業土木専修の昇格で、農学科を担当していた農業工学第一、農業工学第二の 2 講座の担当換えが行われた。学科新設にあたっての講座増設は行われていない。農業工学系の学科としては京大農林工学科に続く 2 つ目の学科であった。講座の新設は 1929 年の東大農学科園芸学第二講座、1936 年の北大農学科園芸学第二講座、1937 年の九大林学科林学第六講座と京大農学科畜産学講座の 4 つだけである。京大畜産学講座は、京大農学部初の畜産学分野の講座であった。

附属施設については東大で大きな変動があった。新設のものとしては、1929 年に演習林田無試験地が、1935 年に多摩農場が設置された。また、1936 年に水産実験所が愛知県に設置された。一方で、東大の施設ではなくなるものも多かった。まず 1935 年、実科が廃止され、これを継承改組して東京高等農林学校が創立された。このとき府中演習林が東京高等農林学校に移管されている。同年には箱根演習林も廃止された。続いて 1937 年、農業教員養成所が廃止され、これを継承改組して東京農業教育専門学校が創立された。東大以外の附属施設では、京大に 1929 年摂津農場が設置され、1937 年大島暖帯植物試験地が設置された。

(2) 戦時期の農学部拡張

1937 年に日中戦争が勃発すると、日本では総動員体制の構築が進められ、科学振興政策がとられていく。大学においては、理工系学部を中心に、学科・講座の増設が行われていった。

農学部においても、この時期は拡張期であった。学科については、それまで東大にしかなかった水産学科が、北大・九大にも設置された。北大には 1940 年に設置され、担当講座として水産生物学第一、水産化学第一の 2 講座が新設された。さらに翌 1941 年には水産化学第二、1942 年には水産生物学第一の両講座が設置された。九大の水産学科は 1941 年に設置された。担当講座として同年に水産学第一と水産化学第一、翌 1942 年に水産学第二と水産化学第二の計 4 講座が設置された。また九大には 1942 年に農業工学科を新設した。講座

は、農学科から農業工学と、設置前の 1941 年に新設されていた農業機械学の 2 講座の担当換えが行われた。

講座の新設は東大で多く行われた。1941 年に、林学科にパルプ学・木材化学が、水産学科に水産学第四が、農芸化学科に畜産製造学が、それぞれ担当講座として設置された。1944 年には農芸化学科に醗酵生産学、林学科に木材材料学第一と木材材料学第二が、各担当科目として新設された。これらはいずれも生産力増強や食糧増産との関係で設置されたものであった。また、北大には 1944 年畜産学科担当の家畜解剖学講座、九大には 1945 年に農芸化学科担当の農芸化学第四講座が新設された。なお、講座新設ではないが、九大では農学科担当の畜産学第一と畜産学第二の講座名入れ替えが 1940 年に行われている。

附属施設については、東大で日本の南方進出に合わせて、熱帯林に関する附属施設が設置されていった。1940 年、日本軍の占領下にあった中国海南島に熱帯林業研究所が設置された。1943 年には伊豆半島に、熱帯・亜熱帯の特用樹木を研究する樹芸研究所が設置された。また 1942 年、南方占領地における農業指導員養成のため熱帯農業員養成所が設置された。九大では 1939 年に宮崎演習林が、1944 年に水産実験所が設置されている。京大では 1942 年に演習林徳山試験地が設置された。敗戦直前の 1945 年には北大の農学実科・林学実科が廃止され、大学直属の附属農林専門部に継承改組された。

(3) 戦後の農学部

1945 年 8 月、第 2 次世界大戦は日本の降伏により幕を閉じた。日本はアメリカを中心とする連合軍に占領され、さまざまな戦後改革が行われていく。教育に関しては、6・3・3・4 制が導入されるなどの学制改革が行われ、1949 年 5 月 31 日には新制大学が発足する。それに先立つ 1947 年、各帝国大学は大学名から「帝国」が外され、4 大学は東京大学・北海道大学・九州大学・京都大学となった。

農学部について言えば、敗戦による変化として最も大きなことは、外地演習林の喪失であろう。敗戦により 4 大学は、樺太・朝鮮・台湾のすべての演習林を失うこととなった。特に経済的利益の大きかった樺太演習林を失ったことは、農学部のみならず大学財政にとっても打撃であったと思われる。とりわけ九大と京大は、東大・北大のように大きな利益を上げていた北海道の演習林をもっていなかったため、その打撃はより大きなものであったであろう。九大・京大はともに 1949 年に北海道演習林を設置しているが、いずれも旧樺太演習林や東大・北大の北海道の各演習林に比べると規模ははるかに小さく、財政的には喪失分を補えるものではなかった。また、気候帯は樺太演習林と北海道の各演習林が亜寒帯、朝鮮の各演習林と北海道以外の内地演習林は温帯と、同じ気候帯に属しているため代替できたかもしれないが、亜熱帯の台湾演習林の代替地を内地に求めることはできなかったため、亜熱帯林に関する教育・研究は困難に陥った（沖縄・奄美は亜熱帯だが、アメリカの施政権下にあった）。

演習林の喪失は痛手であったが、戦後も農学部への拡充は行われている。新制大学発足までに新学科が設置されたのが 1946 年の九大畜産学科・農政経済学科、1947 年の京大水産学科、1949 年の北大農業物理学科であった。九大の両学科はいずれも講座の新設はなく、いずれも農学科からの担当換えによるものであった。畜産学科の担当は動物学第一、畜産学第一、畜産学第二の 3 講座であった。また農政経済学科の担当は農学第三、経済学・農政学第一、経済学・農政学第二の 3 講座で構成された。学科の担当換えに関しては、1947 年に気象学・統計学講座が農学科から農業工学科に移っている。なお九大では 1949 年に農芸化学科担当として蚕糸化学講座が新設された。京大水産学科は 4 大学の中で最も遅い水産学科設置ではあったが、水産学第一、水産学第二、水産学第三、水産学第四の 4 講座を新設して発足した。このとき同時に農林化学科担当講座として農薬化学講座を設置している。また北大農業物理学科は、1947 年設置の農業機械講座と、1949 年設置の農業物理学第二講座、農芸物理学講座を改称した農業物理学第一講座の 3 講座を担当講座として設置された、農業工学系の学科である。なお北大ではこのほか、1946 年に農業経済学科担当講座で改称が行われ、農政学が農業経済学第一、農業経営学が農業経済学第二、殖民学が農業経済学第三、経済学財政学が農業経済学第四、農林法律学が農業経済学第五となっている。1947 年には畜産学科の部制が廃止され、皮革製造学が 1946 年に畜産製造学第二へ、1947 年に畜産学第二が畜産学第一、畜産学第三が畜産学第二、畜産学第一が畜産製造学第一へ、それぞれ改称された。このナンバー講座への改称は、文部省の意向によるものであったという¹⁰。東大では 1946 年に獣医学科を廃止して農学科担当の畜産学分野の講座とを併せて畜産学科への改組を行った。また農業土木学科は 1946 年に農業工学第三、1947 年に農業機械学の両講座を設置し、1948 年には農業工学科に改称している。

表 4 は新制大学発足直前時の 4 大学農学部の学科一覧である。横に並んでいるのが同系統の学科であることを示しているが、表 3 と比べると、学科に関しては、共通性が高まっていることがわかるであろう。農学部の学科は、戦時期から戦後にかけて、このように各大学ともおおむね共通する

構成をとるようになっていったのであった。

表 4 各大学農学部の学科一覧 (1949 年 5 月 30 日現在)

東大	北大	九大	京大
農学科	農学科	農学科	農学科
	農業生物学科		農林生物学科
農業経済学科	農業経済学科	農政経済学科	農林経済学科
農芸化学科	農芸化学科	農芸化学科	農林化学科
林学科	林学科	林学科	林学科
畜産学科	畜産学科	畜産学科	
水産学科	水産学科	水産学科	水産学科
農業工学科	農業物理学科	農業工学科	農林工学科

おわりに

本稿では、学科・講座・附属施設の設置状況を見ることで、農科大学・農学部がどのように形成され展開していったのかを見てきた。4 帝国大学の農学部は前身校をもつ東大・北大が先行し、九大・京大が後追いする、というかたちで形成・展開されていった。本稿で明らかとなったのは、1 つには、その展開過程は時代状況に応じて変化していた、ということである。1920 年代後半から日中戦争開戦期までは各大学とも学科等の新設が少なかったのに対し、戦時期に突入すると拡張が行われる、といったところにそのことがよく表れていた。2 つ目として、当初は大学ごとに異なったあり方を示していたが、少なくとも学科構成については戦時・戦後期に共通性が強くなっているということである。

以上のことは、学科・講座・附属施設の設置状況という形式的な面から見た場合の結論である。これは各学科における教育内容や、講座における研究内容を検討すると、また違った結論が導き出される可能性もある。これについては今後の課題としたい。

¹ 以上、東京大学百年史編集委員会編『東京大学百年史』通史一（東京大学、1984 年）第 2 編第 2 章第 3 節および同編『東京大学百年史』部局史二（同、1987 年）第 7 編第 1 章第 1 節を参照。なお、ここで挙げた各学校は制度変遷が激しいが、そのすべてについて記述することはしていない。

² 明治 26 年勅令第 93 号（『官報』第 3060 号、1893 年 9 月 8 日）。なお、設置時点で 1 講座のみでのちに第二講座以下が設けられる場合も、設置時点から「第一」を付けて記載することとする（第二講座の設置が新制大学発足以降の場合を除く）。以下同様。

³ 以上、北海道大学編『北大百年史』通説（北海道大学、1982 年）第 1～3 章を参照。

⁴ 以上、前掲『北大百年史』通説第 4 章を参照。

⁵ 以上、『樺太演習林ニ関スル書類（一）』（九州大学大学文書館所蔵）による。

⁶ 以上、九州大学百年史編集委員会編『九州大学百年史』第 1 巻通史編 I（九州大学、2017 年）、第 3 編第 2 章を参照。

⁷ 以上、京都大学百年史編集委員会編『京都大学百年史』総説編（京都大学教育研究振興財団、1998 年）第 1 編第 4 章第 1 項および同編『京都大学百年史』資料編 3（同、2001 年）第 4 編 2 を参照。

⁸ なお、1925 年に私立の東京農業大学が創立、1928 年に台湾総督府所管の台北帝国大学に理農学部が設立（1943 年に理学部・農学部に分離）されるが、ここでは割愛する。

⁹ 以下、学科・講座・附属施設設置等の事実関係については付表の出典資料によっており、逐一出典を示さないこととする。

¹⁰ 北海道大学編『北大百年史』部局史（北海道大学、1980 年）、p.902。

	東 京			北 海 道		
	学科	講座	附属施設等	学科	講座	附属施設等
1890	農学 林学 獣医学		(農場) (家畜病院)			
1891						
1892						
1893	農芸化学	農学第一 農学第二 農芸化学・化学第一 農芸化学・化学第二 林学第一 林学第二 林学第三 植物学 動物学・昆虫学・養蚕 学第一 動物学・昆虫学・養蚕 学第二 園芸学第一 畜産学第一 地質学・土壤学 農林物理学・気象学 農政学・経済学第一 家畜解剖学 家畜生理学 家畜内科学・家畜外科 学第一 家畜内科学・家畜外科 学第二 家畜内科学・家畜外科 学第三	乙科			
1894			千葉演習林			
1895						第一農場 第二農場 第三農場 第四農場 第五農場 第六農場 第七農場
1896						第八農場
1897						
1898			実科 (←乙科)			
1899			農業教員養成所 北海道演習林			森林科 農芸科
1900		林学第四 農産製造学				植物園 博物館

	東 京			北 海 道		
	学科	講座	附属施設等	学科	講座	附属施設等
1901						第一基本林
1902		森林利用学	台湾演習林 府中演習林 代々木演習林			第二基本林
1903						
1904						苫小牧演習林
1905		家畜衛生学・家畜薬物学				林学科 (←森林科)
1906		農芸化学・化学第三 植物病理学	農場			
1907		水産学第一 水産学第二 水産学第三 水産海洋学		農学 農芸化学 林学 畜産学	農学第一 農学第二 農芸化学第一 農芸化学第二 農芸物理学 植物学第一 動物学昆虫学養蚕学第一 動物学昆虫学養蚕学第二 動物学昆虫学養蚕学第三 園芸学 畜産学第一 農政学殖民学	大学予科 土木工学科 林学科 水産学科 農学実科 (←農芸科) 雨竜演習林 (←第一基本林) 天塩演習林 (←第二基本林)
1908		農政学・経済学第二			農芸化学第三 植物学第二	忍路臨海実験所
1909					林学第一	
1910	水産学				農産製造学 畜産学第二 獣医学第一	林学実科 (←林学科)
1911		農業工学第一			林学第三 林学第四 獣医学第二	
1912		畜産学第二	朝鮮江原道演習林 朝鮮全羅南道演習林		林政学及森林管理学	トイカンベツ演習林 余市果樹園 家畜病院
1913						朝鮮演習林 樺太演習林
1914			樺太演習林			天塩第一演習林 (←天塩演習林) 天塩第二演習林 (←トイカンベツ演習林)
1915					農学第三 応用菌学 経済学財政学	

九 州			京 都		
学科	講座	附属施設等	学科	講座	附属施設等
					台湾演習林
		南鮮演習林			朝鮮演習林
		台湾演習林			
		樺太演習林			
					樺太演習林

	東 京			北 海 道		
	学科	講座	附属施設等	学科	講座	附属施設等
1916		動物学・昆虫学・養蚕学 第三	秩父演習林			台湾演習林
1917					農学第四	
1918						土木工学科・水産学 科（廃止）
1919				農業経済学 農業生物学		
1920					植物学第三 皮革製造学 家畜衛生学	
1921		生物化学			森林工学	
1922		農政学・経済学第三 農芸化学・化学第四 農芸化学・化学第五 森林化学	愛知演習林		畜産学第三 比較病理学	
1923		農学第三 水産化学				
1924					農政学 殖民学 農林法律学	

九 州			京 都		
学科	講座	附属施設等	学科	講座	附属施設等
農学	農学第一 農学第二 動物学第一 動物学第二 植物学				
	植物病理学 生物化学 林学 畜産学第一 経済学・農政学第一	農場			芦生演習林
農芸化学 林学	農学第三 農業工学 園芸学 養蚕学 農芸化学第一 農芸化学第二 農産製造学 林学第一 (←林学) 林学第二 林学第三 林学第四	早良演習林 糟屋演習林			
	畜産学第二 経済学・農政学第二 気象学・統計学 農芸化学第三 林学第五			林学第一 林学第二 農林化学第一 農林化学第二 農林生物学第一	
			農作園芸学 林学 農林化学 農林生物学 農林工学 農林経済学	農作園芸学第一 農作園芸学第二 林学第三 農林化学第三 農林化学第四 農林生物学第二 農林生物学第三 農林工学第一 農林工学第二 農林経済学	農場 農林経済調査室 演習林本部試験地

	東 京			北 海 道		
	学科	講座	附属施設等	学科	講座	附属施設等
1925	農業経済学	農業工学第二	富士演習林 箱根演習林 二宮果樹園			和歌山演習林
1926			代々木演習林 (廃止)			
1927						
1928						
1929		園芸学第二	田無試験地			
1930						
1931						
1932						
1933						
1934						

九 州			京 都		
学科	講座	附属施設等	学科	講座	附属施設等
				育種学 林業工学第一 農芸化学第三 林産化学 農業機械学第一 農政学 林政学 農史 作物学 (←農作園芸学第一) 園芸学第一 (←農作園芸学第二) 農芸化学第一 (←農林化学第一) 農芸化学第二 (←農林化学第二) 農産製造学 (←農林化学第三) 栄養化学 (←農林化学第四) 植物病理学 (←農林生物学第一) 昆虫学 (←農林生物学第二) 実験遺伝学 (←農林生物学第三) 農業工学第一 (←農林工学第一) 農業工学第二 (←農林工学第二) 農業経営学 (←農林経済学)	
		北鮮演習林	農学 (←農作園芸学)	園芸学第二 林業工学第二 造園学 発酵生理及び醸造学 応用植物学 農業計算学	和歌山演習林 上賀茂試験地
					摂津農場

	東 京			北 海 道		
	学科	講座	附属施設等	学科	講座	附属施設等
1935	農業土木学		実科（廃止→東京高等農林学校） 府中演習林（東京高等農林学校へ移管） 多摩農場 箱根演習林（廃止）			
1936			水産実験所		園芸学第二	
1937			経済農場 農業教員養成所 （廃止→東京農業教育専門学校）			
1938						
1939						
1940			熱帯林業研究所	水産学	水産生物学第一 水産化学第一	
1941		パルプ学・木材化学 水産学第四 畜産製造学			水産化学第二	
1942			熱帯農業員養成所		水産生物学第二	
1943			樹芸研究所			
1944		醗酵生産学 木材材料学第一 木材材料学第二			家畜解剖学	
1945			樺太演習林・朝鮮 江原道演習林・朝鮮 全羅南道演習林・台湾演習林 （廃止）			農学実科・林学実科 （廃止） 樺太演習林・朝鮮演習林・台湾演習林（廃止）
1946	獣医学科 （廃止） 畜産学	農業工学第三			農業経済学第一 （←農政学） 農業経済学第二 （←農業経営学） 農業経済学第三 （←殖民学） 農業経済学第四 （←経済学財政学） 農業経済学第五 （←農林法律学） 畜産製造学第二 （←皮革製造学）	

九 州			京 都		
学科	講座	附属施設等	学科	講座	附属施設等
	林学第六			畜産学	大島暖帯植物試験地
		宮崎演習林			
	畜産学第二 (← 畜産学第一) 畜産学第一 (← 畜産学第二)				
水産学	農業機械学 水産学第一 水産化学第一				
農業工学	水産学第二 水産化学第二				徳山試験地
		水産実験所			
	農芸化学第四	樺太演習林・北 鮮演習林・南鮮 演習林・台湾演 習林 (廃止)			樺太演習林・朝鮮演 習林・台湾演習林 (廃止)
畜産学 農政経済学					

	東 京			北 海 道		
	学科	講座	附属施設等	学科	講座	附属施設等
1947		農業機械学			農業機械学 畜産学第一 (←畜 産学第二) 畜産学第二 (←畜 産学第三) 畜産製造学第一 (←畜産学第一)	
1948	農業工学 (←農業 土木学)					
1949				農業物理学	農業物理学第二 農業物理学第一 (←農芸物理学)	

九 州			京 都		
学科	講座	附属施設等	学科	講座	附属施設等
			水産学	農薬化学 水産学第一 水産学第二 水産学第三 水産学第四	
	蚕糸化学				北海道演習林

帝国大学農学部の教官人事

藤岡健太郎

はじめに

帝国大学農学部の教官人事にはどのような特徴があるのだろうか。人事情報は個人情報とみなされることが多いため、史料へのアクセスが容易ではなく、そのため教官人事について大学横断的に研究したものはほとんどないのが現状であると思われる。

本課題研究では、教官人事に関する情報の収集を重要な課題と位置付けて、網羅的な情報収集に取り組んだ。やはり個人情報の壁に阻まれて、完全な収集はできないままに終わったが、できる限り収集した情報を集積したのが、本報告書に収録した「帝国大学農学部教官人事一覧」である。本稿では、このデータに基づいて、帝国大学農学部の教官人事について、若干の分析を試みたい。

分析の基となる教官人事のデータにはまだ不明な部分もある状況ではあるが、現段階で判明する限りで、帝国大学農学部の教官人事にはどのような特徴があるのか、その素描を行うこととする。具体的には、出身大学に関する分析と、教官の異動に関する分析を行い、大学ごとの特徴を抽出する。

1 出身大学等

(1) 自校出身者と他大学出身者

まず、出身大学等について見てみよう。表 1 は各大学農学部の教官の出身大学等について、自校と自校以外の人数と比率を示したものである。これを見ると、当然のことながら、先発の東大は自校出身者がほとんどで、次いで北大の自校出身者の割合が高いことがわかる。後発の 2 大学はともに自校出身者は半分以下である。

それにしても東大の「純血主義」は徹底していることがわかる。前身校を含め、ほぼ全員が東大出身者で、東大以外はエーベルヴァルデ官立山林学校（ドイツ）出身の松野礪しかいない。これも当時まだ日本の教育体制が未整備だったからこそそのことであり、あくまでも例外にすぎないと言える。兼任を含めても、札幌農学校出身の新渡戸稲造が唯一の例である。日本初の農学部であるとはいえ、非常に極端である。

表 1 出身大学等別内訳

	東大	北大	九大	京大
自校	203	118	34	47
自校以外	1	26	73	50
計	204	148	107	97
自校占有率	99.5%	81.9%	31.8%	48.5%

註：出身大学等が不明、または当該大学農学部が兼任のみの教官は除いた（以下同様）。

東大には大学南校、駒場農学校、東京農林学校、東京大学、帝国大学を含む。北大には札幌農学校を含む。

では、他の 3 大学は、自校以外のどの大学から教官を採用していたのであろうか。図 1 は、自校以外の出身者について、その大学別の割合を示したものである。これを見ると、いずれも圧倒的に東大が多い。北大も九大・京大にいたるが、東大と比べるとはるかに少ない。九大・京大出身者で他大学に採用された者は、兼任を除くと皆無である。なお、「その他」の割合が比較的高い京大であるが、その半数は戦後水産学科を設置するときに農林省水産講習所出身者を採用したものである。

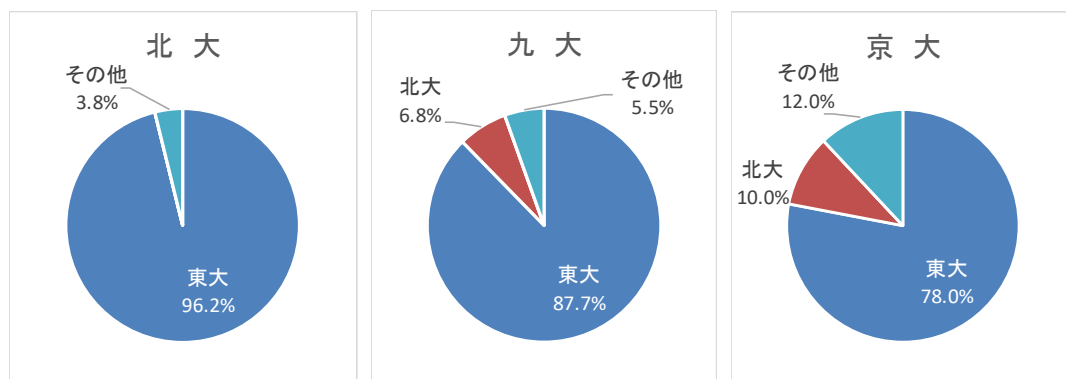


図 1 自校以外出身者の大学別割合

以上から、帝国大学農学部の教官は、東大出身者が圧倒的に多く、次いで北大、九大・京大出身者は自校でしか採用されていないということが判明する。

(2) 自校出身者の採用と寡占の開始

それでは、各大学で、最初の自校の農科大学または農学部出身者はいつ助教授に採用されているのだろうか。表 2 は最初の採用者について、その時期と授業開始からの年数を示したものである。東大の右田半四郎は林学科 1 期生で、1894 年に卒業、農商務省林務官補

を務めた後、東大助教授に採用された。東大農科大学の卒業生としては河合鉢太郎が右田の1年前に採用されているが、東京農林学校の課程を修めて農科大学で卒業しているので、ここでは除外している。北大第1号の田所哲太郎は東北帝国大学農科大学農芸化学科最初の学生で、1910年に卒業したのちすぐに助手に採用、翌年助教授に採用されている。北大では伊藤誠哉が1909年に採用されているが、札幌農学校からの編入であるため除外した。京大の上田弘一郎は京大農学部第1期生で、1927年林学科卒業、助手を経て1930年に助教授に採用された。東大・京大の場合は既設他学部出身者で右田・上田よりも早く農学部に採用された者もいるが、自校農学部出身者としては彼らが最初である。以上の3大学は授業開始から4~6年という早い時期に自校卒業者を助教授として採用している。特に後発の京大は、早い時期から自校卒業者の教官採用を積極的に行う意図をもっていたと思われる。

この3大学に対して、自校出身者の採用が大きく遅れたのが九大である。九大は授業開始から実に15年を経た1936年、ようやく自校出身者の森川均一を採用した。森川は学科担当ではなく演習林担当であった。学科担当の助教授の採用は、さらに2年後の永松土巳（農学科作物学担当）が最初である。このように九大だけが自校出身者の採用が遅れた理由は定かではない。設立時から東大の影響を強く受けていたことから、教官採用についても東大が優先されたということかもしれないが、実際にどのような採用方針があったかはわからない。

なお、東大以外の3大学については、最初の自校出身者が助教授に採用されて以降は、助教授に採用されるのは大半が自校出身者となっていく。最初の1人が契機となって、助教授採用に関しては急激に自校出身者の寡占が進んでいくのである。

表2 自校出身最初の助教授採用者

大学	氏名	助教授採用年	授業開始からの年数
東大	右田半四郎	1895年	5年
北大	田所哲太郎	1911年	4年
九大	森川均一	1936年	15年
京大	上田弘一郎	1930年	6年

2 異動の状況

ここでは、農学部の人事異動について見てみよう。なお、これについては特に民間との間の異動の状況がつかみにくく、実際にはここで示すよりも多くの民間から／民間への異

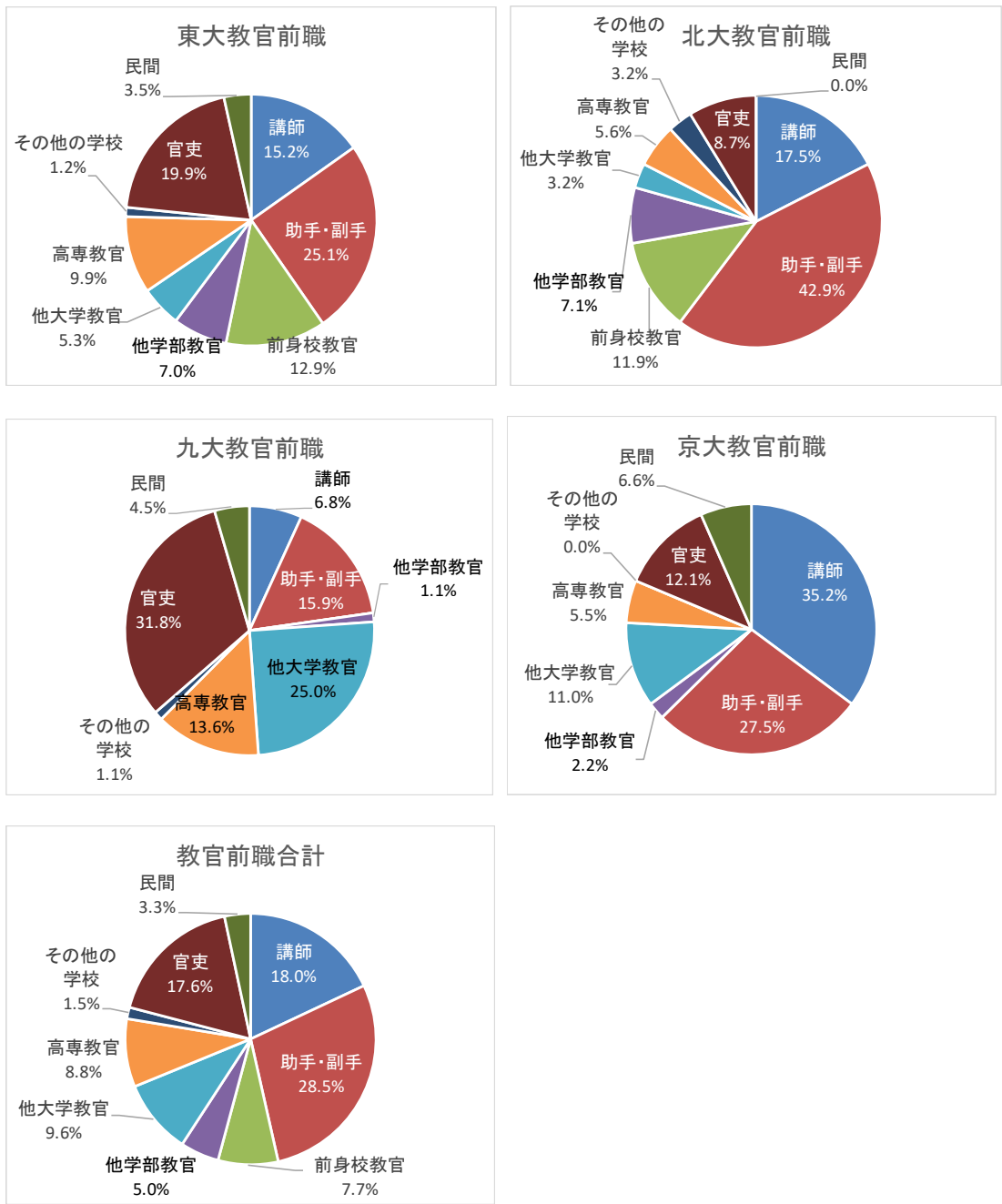


図2 教官の前職

註：他学部には予科、付属学科、附属専門部等を含む。他大学には札幌農学校を含む。
高専教官には他大学の附属専門部を含む。

動があった可能性を指摘しておきたい。

(1) 教官の前職

図 2 から、全大学の合計の値で助教授に採用される直前の職について見てみると、最も多いのは助手・副手（ほとんどが助手）で、全体の 4 分の 1 以上を占めている。次いで講師と官吏が 2 割弱ずつでほぼ並ぶ。なお、官吏は農林関係の技師が多い。他大学や高専の教官からの異動は 1 割弱ずつで、民間は上記の点を考慮せねばならないが、ごくわずかである。

全体的には以上のように言えるが、東大は全体の傾向に近いものの、他の 3 大学はそれぞれ異なる傾向が見て取れる。北大は、講師・助手・副手だった者が全体の 6 割を占めており、前身校と北大の他学部等の教官であったものを合わせると、4 分の 3 以上が「身内」であった。北大農学部の教授・助教授になるためには北大で何らかの職を得ておかねばならなかったと言えよう。前節で東大を「純血主義」と表現したが、北大も東大ほどではないにしてもその傾向があると言える。東大の場合はいったん農学部の外に出た出身者が助教授・教授として戻ってくることが比較的多いと言える。また、講師・助手・副手の割合については京大が最も高いが、京大の場合は他大学出身者の割合が北大よりも高く、北大ほど「純血主義」の度合いは高くないと言えらう。

東大とも、北大・京大とも全く異なる傾向を見せているのが九大である。九大の場合、講師・助手・副手の割合が合わせて 20% 余りにすぎず、最も多いのは官吏、次いで他大学教官、3 番目によく助手・講師で、4 番目は高専教官となっている。講師・助手・副手の割合が極めて低いのは、前節でみた自校出身者の採用が農学部設立から大幅に遅れて始まったことによっている。それまでは東大を卒業して他大学や高等学校・専門学校の教官を務めていた者が採用されていたため他大学や高専の教官の割合が非常に高いのである。また、官吏出身者が 3 割以上を占めるのが九大の際立った特徴であるが、これも東大出身者が多い。初代学部長の本田幸介が、東大出身で前職が朝鮮総督府勸業模範場技師であったことは象徴的である。九大の場合、東大卒で官吏をしていた、現代風に言えば「実務家」の教官が多く採用されていたと言えよう。「実務家」を多く採用する傾向は、新規採用者のうち九大出身者が大半を占めるようになって、大きくは変わらなかったと言える。

(2) 他大学等への／他大学等からの異動

次に、教官の大学等との間の異動がどのように行われていたのかを見てみよう。ここでは、助教授以上の教官が他大学等へ、または他大学から異動する場合について検討する。

まず表 3-1 から東大への転入について見てみよう。歴史が長いということもあって、他大学等からの転入教官は多い。目につくのは、高等農林学校（高農）・農林専門学校（農専）からの転入者が多いことである。中でも東大の実科を基とする東京高等農林学校（農林専

表 3-1 東大への転入教官

氏名	転入日	転入時職名	転入元
須藤義衛門	1891. 7. 22	助教授	札幌農学校教授
岩住良治	1902. 3. 31	助教授	盛岡高等農林学校教授
稲垣乙丙	1906. 6. 25	教 授	盛岡高等農林学校教授
原十太	1911. 11. 28	教 授	東北帝国大学農科大学助教授
末松直次	1925. 2. 28	助教授	東京高等農林学校教授
田中貞次	1926. 4. 21	教 授	九州帝国大学農学部教授
川瀬惣次郎	1926. 8. 10	教 授	上田蚕糸専門学校教授
竹内良三郎	1927. 3. 26	助教授	第五高等学校教授
藤岡光長	1927. 12. 28	教 授	九州帝国大学農学部教授
山県宇之吉	1928. 5. 5	助教授	宇都宮高等農林学校教授
佐々木喬	1929. 6. 21	教 授	京都帝国大学農学部教授
丹羽鼎三	1929. 7. 8	助教授	三重高等農林学校教授
鈴木文助	1934. 12. 19	教 授	京都帝国農学部大学教授
伊藤武夫	1939. 4. 26	教 授	三重高等農林学校教授
朝井勇宣	1939. 8. 23	助教授	盛岡高等農林学校教授
佐々木清綱	1941. 6. 4	教 授	九州帝国大学農学部教授
芝本武夫	1941. 6. 12	助教授	東京高等農林学校教授
磯辺秀俊	1942. 1. 27	教 授	宇都宮高等農林学校教授
長戸一雄	1944. 1. 27	助教授	東京農業教育専門学校教授
浜崎信太郎	1944. 6. 17	助教授	鳥取農林専門学校教授
中塚友一郎	1944. 10. 18	助教授	東京農林専門学校教授
松原卓二	1945. 9. 20	助教授	岐阜農林専門学校教授
大越伸	1946. 12. 6	助教授	東京農林専門学校教授
西田司一	1947. 8. 30	助教授	宇都宮農林専門学校教授
山崎不二夫	1948. 4. 15	助教授	東京農林専門学校教授
庄司英信	1948. 6. 30	教 授	九州大学農学部助教授

門学校)からの転入者が多く、分離後も人的なつながりがあったことがうかがえる。また、他大学では戦後期を除いて例がない、他大学教授から東大教授になっている者が5名いることである(九大3、京大2)。農学における日本の最高峰という認識があったからこそ、東大にのみ可能なことであったのであろう。一方、表3-2で東大からの転出教官を見てみると、戦前戦中期はほとんどが助教授での転出で、戦後の教授での転出は定年後のものとも

られる例が多い。転出先は他大学教授が多く、高農・農専は少ないと言える。中には佐々木喬のように、助教授からいったん他大学（京大）に教授として出て、再び東大に教授として戻ってきた者もいる。

表 3-2 東大からの転出教官

氏名	転出日	転出時職名	転出先
守屋物四郎	1896. 4. 1	助教授	東京工業学校教授
鈴木重礼	1908. 10. 13	助教授	東北帝国大学農科大学教授
八鍬儀七郎	1911. 10. 31	助教授	盛岡高等農林学校教授
湯川又夫	1922. 8. 9	助教授	九州帝国大学農学部教授
沼田大学	1924. 4. 22	助教授	京都帝国大学農学部助教授
佐々木喬	1925. 1. 27	助教授	京都帝国大学農学部教授
堀田正逸	1925. 6. 16	助教授	九州帝国大学農学部教授
高島規孝	1925. 8. 16	助教授	岐阜高等農林学校教授
渡辺庸一郎	1932. 5. 23	助教授	京都帝国大学農学部助教授
望月峯	1935. 3. 31	助教授	東京高等農林学校教授
水野武夫	1937. 3. 31	助教授	東京農業教育専門学校教授
島村虎猪	1943. 3. 31	教授	日本獣医畜産大学教授
三浦伊八郎	1946. 4. 2	教授	日本大学農学部教授
福田次郎	1947. 6. 25	助教授	京都大学農学部教授
藤原彰夫	1947. 8. 9	助教授	東北大学農学部教授
小柳達男	1947. 12. 10	助教授	岩手大学農学部教授
増井清	1948. 3. 31	教授	名古屋大学農学部教授
後藤格次	1949. 3. 31	教授	北里大学教授
佐々木喬	1949. 3. 31	教授	鳥取大学学長

次に北大について表 3-3、表 3-4 を見てみると、転入者が少なく、転出者の方が多いことがわかる。これは他の 3 大学には見られないことである。前項でみたとおり、北大は「純血主義」的などころがあり、他大学等からの採用は少なかった。北大の特徴を見出すとすると、他大学ではほとんど見られない、台湾との転出入が多いことが挙げられる。北大からは、特に製糖業に従事する技術者需要の増加に応じて渡台するものが増え、台北帝国大学理農学部の教官になる者も多かったことが明らかにされている²。こうした関係から、教官の転出入も多かったのである。

続いて九大は、表 3-5 に見るように、東大に次いで転入者が多い。そのおよそ半数は、

表 3-3 北大への転入教官

氏名	転入日	転入時職名	転入元
柴田桂太	1908.9.8	教 授	東京帝国大学理科大学助教授
小倉鉦太郎	1909.6.16	助教授	東京帝国大学農科大学助教授
大野直枝	1910.11.10	教 授	広島高等師範学校教授
鈴木重禮	1911.6.30	教 授	東京帝国大学農科大学助教授
宮脇富	1918.11.5	助教授	カンザス州立大学農科大学助教授
福士貞吉	1929.4.20	助教授	鳥取高等農業学校教授
手島寅雄	1929.9.26	助教授	鳥取高等農業学校教授
川口栄作	1933.4.20	助教授	九州帝国大学農学部助教授
八谷正義	1938.5.4	教 授	台北帝国大学附属農林専門部教授
時田郁	1940.5.17	助教授	函館高等水産学校教授
高畑倉彦	1946.12.27	教 授	台北帝国大学理農学部教授

表 3-4 北大からの転出教官

氏名	転出日	転出時職名	転出先
柴田桂太	1910.4.11	教 授	東京帝国大学理科大学助教授
郡場寛	1920.8.20	教 授	京都帝国大学理学部教授
田中義麿	1921.6.24	助教授	九州帝国大学農学部助教授
蓮見道太郎	1924.5.7	助教授	九州帝国大学農学部助教授
近藤金助	1924.7.28	助教授	京都帝国大学農学部教授
森岡勇	1925.6.15	助教授	浜松高等工業学校教授
奥田彥	1925.11.25	助教授	岐阜高等農林学校教授
工藤祐舜	1926.2.19	助教授	台湾総督府高等農林学校教授
三宅捷	1926.2.24	助教授	台湾総督府高等農林学校教授
足立仁	1926.5.3	助教授	台湾総督府高等農林学校教授
清水誠	1926.9.30	助教授	東京高等工業学校教授
岡村精次	1927.8.13	助教授	岐阜高等農林学校教授
山根甚信	1931.5.7	助教授	台北帝国大学理農学部教授
林禎二郎	1934.1.20	助教授	九州帝国大学農学部助教授
田添元	1936.11.12	助教授	台北帝国大学附属農林専門部教授
高畑倉彦	1938.4.30	助教授	奉天農業大学教授
島倉亨次郎	1941.5.2	助教授	帯広高等獣医学校教授
加藤静夫	1941.12.17	助教授	北京大学理学院副教授
中島九郎	1948.3.31	教 授	札幌文科専門学院教授

表 3-5 九大への転入教官

氏名	転入日	転入時職名	転入元
大島広	1920.10.11	助教授	第五高等学校教授
中田覚五郎	1921. 1.10	助教授	水原農林専門学校教授
堀田正逸	1921. 6.17	教 授	東京帝国大学助教授
奥田譲	1921. 6.24	助教授	東京帝国大学農科大学助教授
田中義麿	1921. 6.24	助教授	北海道帝国大学農科大学助教授
久保健麿	1921. 9. 9	助教授	東京帝国大学農科大学助教授
丹下正治	1922. 4.25	助教授	盛岡高等農林学校教授
小山準二	1922. 6.26	助教授	第六高等学校教授
鈴木清太郎	1922. 6.30	助教授	松山高等学校教授
植村恒三郎	1922. 7.15	教 授	盛岡高等農林学校教授
湯川又夫	1922. 8.10	教 授	東京帝国大学農科大学助教授
小島均	1923. 3.20	助教授	福岡高等学校教授
蓮見道太郎	1924. 5. 7	助教授	北海道帝国大学助教授
木村修三	1926. 3. 1	教 授	宇都宮高等農林学校教授
川村一水	1932.10.21	教 授	宇都宮高等農林学校教授
林禎二郎	1934. 1.20	助教授	北海道帝国大学助教授
橋本重郎	1942. 5. 2	教 授	宮崎高等農林学校教授
塩谷勉	1942.12. 7	教 授	宇都宮高等農林学校教授
青峰重範	1946. 4. 1	助教授	東北帝国大学助教授
加藤嘉太郎	1946.10. 5	助教授	東京帝国大学農学部助教授
大島康義	1947. 2.27	教 授	台北帝国大学教授
平岩馨邦	1947. 9.20	教 授	広島文理科大学教授
岩片磯雄	1947.12.20	教 授	宇都宮農林専門学校教授
岩田久敬	1948. 6.30	教 授	京都繊維専門学校教授

1922年までに集中している。この時期は九大農学部の設定期にあたる。前身校のある東大・北大と異なり、九大には前身校がなかった。東大・北大は農科大学設立にあたって前身校の教官の多くを引き続き採用することができたが、九大は新たに教官を確保せねばならなかったのである。その際、他大学の助教授や高等学校・専門学校の教授を採用することは、九大にとっては「即戦力」を得られることになるし、採用される側は自身のキャリア・アップが期待できる。こうしたところから他大学等から多くの教官が転入してくることとなった。以上のような状況であったため、表 3-6 に表れているように、九大から他大学等への転出者は、転入者に比べて非常に少なかったと言える。また前述のように、戦前戦中期に 3

表 3-6 九大からの転出教官

氏名	転出日	転出時職名	転出先
田中貞次	1926. 4.20	教 授	東京帝国大学農学部教授
藤岡光長	1927.12.27	教 授	東京帝国大学教授
川口栄作	1933. 4.19	助教授	北海道帝国大学助教授
小坂博	1935. 7. 9	助教授	盛岡高等農林学校教授
佐々木清綱	1941. 6. 3	教 授	東京帝国大学農学部教授
永見健一	1943. 8.31	助教授	東京農業大学教授
松平近義	1947. 9.19	助教授	東北帝国大学助教授
三村一	1947.10.10	助教授	宮崎農林専門学校教授
橋本重郎	1947.11.14	教 授	東北大学農学部教授
庄司英信	1948. 6.30	助教授	東京大学農学部教授

名もの教授が東大へと転出している。

最後に京大について見てみると、転入者（表 3-7）・転出者（表 3-8）ともに少ない。転入者は、九大の場合と同様に設立期の 1926 年までが半数を占めるが、九大の半数にすぎない。九大が他大学等の教官を設立期に積極的に採用していたのに対して、京大の場合は東大卒業者を中心として、まず助手や講師として採用してから助教授に昇任させるという採用の仕方をしてきた。こうした方法をとった理由は不明であるが、このために見かけ上は京大内部からの昇任、ということになっているわけである。

表 3-7 京大への転入教官

氏名	転入日	転入時職名	転入元
沼田大学	1924. 4. 23	助教授	東京帝国大学農学部助教授
並河功	1924. 7. 15	教 授	北海道帝国大学予科教授
近藤金助	1924. 7. 28	教 授	北海道帝国大学農学部助教授
佐々木喬	1925. 1. 28	教 授	東京帝国大学農学部助教授
菊池秋雄	1926. 7. 17	教 授	鳥取高校農林学校教授
渡辺庸一郎	1932. 5. 24	助教授	東京帝国大学農学部助教授
井上吉之	1935. 3. 30	助教授	京都高等蚕糸学校教授
藤村吉之助	1941. 3. 31	助教授	京都府立女子専門学校教授
福田次郎	1947. 6. 26	助教授	東京大学農学部助教授
川上太左英	1947. 7. 14	助教授	水産講習所助教授
松原喜代松	1947. 7. 14	教 授	水産講習所教授

表 3-8 京大からの転出教官

氏名	転出日	転出時職名	転出先
富樫浩吾	1926. 3. 10	助教授	盛岡高等農林学校教授
佐々木喬	1929. 6. 20	教 授	東京帝国大学農学部教授
鈴木文助	1934. 12. 18	教 授	東京帝国大学農学部教授
安部卓爾	1944. 3. 31	助教授	京都高等農林学校教授
黒正巖	1949. 2. 10	教 授	岡山大学教授

おわりに

以上、帝国大学農学部の教官人事について、若干の分析を試みた。元のデータが不十分で必ずしも網羅的でもないため、分析も不完全なものとの謗りは免れまい。ただ、人事に関するデータで、このような分析が可能であることいくつかの事例は示せたものと思う。人事はその大学がどのような教育・研究を行っていたのかを明らかにするうえで根本となる情報である。まずは人事情報の意義がより理解され、それへのアクセスがより容易になることが必要である。より詳細な人事情報の収集が可能になれば、農学部に限らず、大学（史）に関する研究はより幅が広がり、奥深いものになっていくはずである。

¹ 個人情報保護法では保護の対象は存命中のものに限られる。したがって現在では帝国大学教官であった者で存命中の者はほとんどいないはずであるので、個人情報の壁はもはやないはずである。しかし実際には、各文書館の定める特定歴史公文書等の利用審査基準では、死亡した個人も保護の対象としているため、個人情報を含む文書の利用を拒まれることがある。筆者もまた大学文書館で業務にあたっている者であるが、個人情報の扱いがセンシティブにすぎると思われることが多い。帝国大学教官は公人であり、特に教官としての履歴にかかわることは、公開の対象とすべきだと考えている。京都大学大学文書館ではホームページ上で1949年以前の在職者の履歴を公開している（「京都大学 歴代総長・教授・助教授履歴検索システム」）が、こうしたことは今後積極的に行われるべきことであろう。

² 山本美穂子「台湾に渡った北大農学部卒業生たち」（『北海道大学大学文書館年報』6、2011年）。

演習林と帝国大学

藤岡健太郎

はじめに

戦前期の内地帝国大学のうち、東京・北海道・九州・京都の4大学には農科大学・農学部があり、それぞれ内地・外地に多くの演習林を有していた。一覧にすれば表1のとおりである。

では、演習林はそれをもつ大学にとって歴史的にどのような意義があり、どのような役割を果たしてきたのだろうか。筆者はその意義・役割は非常に大きなものがあると考えているが、これまでそのことについて歴史的に考察した研究というのは非常に少なかったと言える¹。

演習林の意義・役割の第一は、当然のことながら教育・研究である。筆者は林学の専門家ではないので、その内容に深く立ち入って評価することはできない。しかし、演習林に関する研究論文の数や、実習の回数などを見るだけでもその重要性は認識できる²。

では、教育・研究以外の意義・役割は何であろうか。その1つは大学財政への寄与である。後述するように、演習林は大学に大きな収入をもたらす存在であった。もう1つは、大学と地域社会をつなぐ存在であったということである。各大学はその大学の(本部)所在地以外にもいくつかの附属施設等を有していたが、その中で最も数が多く、規模も大きかったのが演習林であった。特に外地に関しては、各帝国大学にとって演習林が唯一の接点であった。本稿では以上2つの観点から、大学(史)にとっての演習林の意義・役割の一端を明らかにしたい。

なお、1945年の敗戦により、各大学は外地に所在していた広大な演習林をすべて失った。本稿ではそれ以前の、各大学が外地演習林を所有していた時期を対象として検討することとする。

1 演習林の設置

(1) 演習林の濫觴

検討に入る前に、まず演習林の設置過程について簡単にまとめておくこととする。

帝国大学演習林のうち、最も早く設置されたのは東京帝国大学(東大)の千葉演習林で、

表1 帝国大学演習林一覽

大学名	演習林名	設置年	所在地	面積(町)
北海道	雨竜	1901	北海道雨竜郡深川村	27,245
	天塩第一	1902	北海道中川郡常盤村	19,653
	苫小牧	1904	北海道勇払郡苫小牧村	2,274
	天塩第二	1912	北海道天塩郡幌延村	22,733
	朝鮮	1913	全羅北道茂朱郡・長水郡	16,544
	樺太	1913	久春内郡三浜村	19,900
	台湾	1916	台中州能高郡埔里街	6,846
	和歌山	1925	和歌山県東牟婁郡七川村	434
東京	千葉	1894	千葉県君津郡亀山村・松立村、安房郡天津町	2,193
	北海道	1899	北海道空知郡富良野町・山部村	26,765
	台湾	1902	台中州下竹山郡・新高郡	57,420
	府中	1902	東京府北多摩郡府中町	16
	朝鮮江原道	1912	江原道高城郡水洞面	26,605
	朝鮮全羅南道	1912	全羅南道光陽郡玉龍面、求礼郡	20,922
	樺太	1914	栄浜郡栄浜村	20,735
	秩父	1916	埼玉県秩父郡大瀧村	6,104
	愛知	1922	愛知県東春日井郡品野村・水野村・赤津村、丹羽郡城東村	1,354
富士	1925	山梨県南都留郡中野村	12	
京都	台湾	1909	高雄州屏東郡	60,000
	朝鮮	1912	全羅北道南原郡朱川面、慶尚南道咸陽郡席卜面・馬川面・休川面、山清郡今西面・知水面	17,088
	樺太	1915	敷香郡泊岸村・敷香村	19,998
	芦生	1921	京都府北桑田郡知井村	2,209
	和歌山	1926	和歌山県有田郡八幡村	53
九州	南鮮	1912	慶尚南道山清郡・河東郡	17,029
	台湾	1913	台北州文山郡石碇庄	2,011
	樺太	1914	敷香郡敷香村	20,505
	早良	1922	福岡県早良郡姪浜村	53
	糟屋	1922	福岡県糟屋郡篠栗村	370
	北鮮	1926	咸鏡北道茂山郡	4,646
	宮崎	1939	宮崎県西臼杵郡椎葉村	2,943

出典：「演習林整理ニ関スル調」（『昭和財政史資料』第3号第30冊、国立公文書館所蔵）

九大宮崎演習林は『九州帝国大学一覽 昭和十五年』

註：所在地・面積は1931年7月10日現在（九大宮崎演習林は設置時）。

面積は小数点以下切り捨て。

1894年のことであった。この地は千葉県の所管する清澄山で、1892年、学生実地指導旅行のためこの地を訪れた本多静六が、その「林相状態最モ林学ノ実習研究ニ適当セルヲ認メ演習林設置ノ議ヲ起シ」た結果、官有林を演習林としたものである³。次いで1899年、北海道庁より移管を受けて、北海道演習林を設置した⁴。1902年には、府中・代々木にごく小規模な演習林を設置している（府中演習林はのちに東京高等農林学校へ移管、代々木演習林は土地交換により廃止）。さらに1916年には秩父演習林を設置した。大学に比較的近い場所に千葉演習林に続いて秩父演習林を設けた理由は、「中部山岳林の代表的林相を示し」ていること、原生林が広範囲に存在していること、であった⁵。

東大に続いて演習林を設置したのはのちに北海道帝国大学（北大）となる札幌農学校であった。札幌農学校には1899年に森林科が設置されており、「林学の教育・試験研究林としての、また札幌農学校の基本財産としての性格を併せもつ広大な演習林が、大土地所有の再編に中心をおいた当時の拓殖政策と結びついて」第一基本林として1901年に設定され、これがのちに雨竜演習林となった。次いで1902年第二基本林（のちに天塩第一演習林）が設定され、1904年には「維持資金」としてのちの苫小牧演習林が設定された。さらに東北帝国大学農科大学となったのちの1912年、トイカンベツ演習林（のちに天塩第二演習林）が設置された⁶。

こうして東京帝国大学農科大学と札幌農学校に演習林が設置されていき、日本における演習林の濫觴となったのである。

(2) 台湾演習林

前述のように19世紀末から20世紀初めにかけて、内地での演習林設置が進められていった。これに続き、1895年に新たに日本領土になった台湾にも、演習林が設置されていった。

その嚆矢となったのは、1902年に設置された東大台湾演習林である。東大台湾演習林は1900年、樺山資紀文部大臣が児玉源太郎台湾総督に対して台中県の55,000町歩余を演習林用地として所管換えを要請すると同時に、農科大学助教授右田半四郎に該地域の踏査を行わせ、折衝を行った結果、1902年にその譲渡が決定し、設置されたものであった⁷。

次いで台湾に演習林を設置したのは1909年の京都帝国大学（京大）であった。京大には当時まだ農科大学は設置されていなかったが、台湾総督府より基本財産林として高雄州の蕃地の交付を受け、設置された⁸。このように農科大学が設置されていないにもかかわらず演習林が設置されたのは、これを大学の「財産」として、そこから収入を得ることを目的としていたからである。こうしたことは当時の日本においては、各級の多くの学校で行われており、得られた収入はその学校の様々な費用に充当されていた。また、将来的に農科大学を設置したい、という希望があつてのことでもあった。

このことは九州帝国大学（九大）の台湾演習林についても言える。九大は「幾多学術上の研究資料に豊富なる台湾に演習林を設置するは将来農学部開設の暁に極めて有利なるを予

想し」、農学部設置前の 1913 年に台湾演習林を設置した。その面積は台湾演習林中最小の約 2,000 町に過ぎず、東大・京大演習林の 4% 足らずである。台湾総督府からは 3 か所の候補地を提示されたが、その中から「当時台湾の産業政策或は理蕃政策上より最も支障の尠かりし」場所を選んだという⁹。「理蕃政策」とは原住民（「生蕃」）に対する統治政策である。後述するように、先行の 2 大学、とりわけ京大は原住民対策に苦心していた。推測であるが、九大演習林が東大・京大演習林に比べ狭小な演習林に留まっているのは、その状況を見て、面積よりも管理・施業のしやすさを選択したということなのかもしれないことを指摘しておきたい。

1916 年には、北大（当時は東北帝国大学農科大学）も台湾演習林を設置した。北大は既に多くの演習林を設置していたが、亜熱帯地域には演習林はもっていなかった。他大学が亜寒帯（樺太・北海道）、温帯（北海道以外の内地・朝鮮）、亜熱帯（台湾）の 3 気候帯に演習林を設置しており、北大もまた他の 3 大学と同等の体制を築きたかったということなのであろう。これにより各大学が 3 気候帯すべてに演習林をもつ、という体制が確立することとなった。

(3) 朝鮮の各演習林

朝鮮の各演習林については、東大・京大・九大が 1911 年、「学生に対し、林学上の研究並に斯学教授上の便益の為に、森林経営に対する全般の施設を行ふこと条件にて国有林野の譲与を申請した」。総督府では要存置林野の処分は行わない方針であったため対応に苦慮したが、演習林を公益事業と見なすこととして、演習林経営が「最新の学術と進歩したる施業法を示」し、「将来朝鮮林野復旧上、模範と」なると判断し、3 大学の申し出に同意した。ただし所有権を移転しなくても演習林の目的は達しうることを確認し、従来为学校林と同様に貸与というかたちをとることとした¹⁰。この結果 1912 年、智異山南側東部が九大に、南側西部が東大に、北側が京大に、それぞれ 2 万町歩余ずつ、80 年間貸与された。東大は同時に智異山系の南側の白雲山系と、江原道にも演習林を貸与されている。また北大は、翌 1913 年に智異山系より北の全羅北道北東部に 23,000 町歩余を同じく 80 年間貸与された。

その後、朝鮮の各演習林では苗圃地等の購入が行われているものの、貸与された林地は次第に縮小されていくこととなる。まず 1915 年、韓国併合から間もない時期に詳細な調査が行われないうまま設置されて演習林の境界が不明確であったため、各大学職員立ち会いのもと総督府調査員による査定を行った結果、いずれも面積は減少した。次いで 1918 年、朝鮮林野調査令施行により官民有の区別を明確にする調査が行われ、縁故林野（国有林に編入されていたが、縁故が認められて所有者に返還などされるもの）等が除外された。さらに 1923 年には地方費模範林予定地の総督府への返還が行われた。こうしたことで、各大学の朝鮮演習林の面積は、当初より 30～40% も縮小されることとなった¹¹。

なお、この後 1926 年には九大が中国との国境、豆満江沿いの地域に総督府から 80 年間

の無償貸与を受け、北鮮演習林を設置した。これに伴い朝鮮演習林を南鮮演習林と改称している。

(4) 樺太演習林

樺太での大学演習林設置の発端は、当時樺太庁林務課長であった中牟田五郎によると、1912年に北海道帝国大学林学部長から2万町歩の割譲交渉が行われたことであった。同年夏には東京帝国大学農科大学の林学部長からも同様の交渉を求めてきたという¹²。もっとも『樺太林業史』によると、1911年頃、東京帝国大学演習林長より樺太国有林中に大学演習林設定の交渉が行われたが、当時樺太庁の国有林経営方針が確立していなかったため、そのときは実現しなかった、ということである¹³。いずれにせよ、樺太においては、明治の末年から大学演習林設置の動きが起きていた。

この時期、樺太に演習林を設置しようという動きは、さらに京大と九大でも起きていた。最終的には4帝国大学が樺太演習林を設置することになるのであるが、樺太庁側は演習林設置については決して好意的ではなかった。再び中牟田によると、演習林用地を譲与することは最終的には樺太庁長官の判断によったのであるが、譲与の内命を下すにあたって、「仕方がないから、大学演習林にやることにする、併し樺太庁の主要として居る部分は除いて呉れ、面積は一大学二万町歩を超えない様に」との条件が付いたという。その結果、「当時の民間企業家が不便として払受けを好まなかつた所」が演習林用地として設定されることとなった¹⁴。

各大学に演習林を譲与することに対しては、当時強く反対する者も多かったようで、「演習林とは名のみであつて、伐木利用して収入を挙げ、教授連の洋行費を産み出すのが裏面の目的である。学生の演習とか学術的研究などは思ひも寄らぬことである杯と、酷評した」という(同上)。こうした演習林に対する批判的な(あるいは揶揄的な)視線は、この後も長く向け続けられることとなる。

ともかくも、1913年から1915年にかけて、2万町歩前後の面積をもつ演習林が、樺太の各地に設置された。のちにみるように、樺太演習林はいずれの大学においても大きな利益をもたらす存在となり、演習林のみならず大学財政全体にも大きな貢献をしていくことになるのである。

(5) 内地演習林の拡大

1920年代に入ると、各大学ともに内地演習林の所在地域を広げていく。東大は1922年、愛知演習林を設置した。同林は砂防工事を主眼とするもので、他の演習林とは設置目的の異なる、やや特殊な演習林であった¹⁵。さらに1925年には富士・箱根の、きわめて小規模な演習林を設置している(箱根演習林はのちに返還)。また、北大では1925年、内地の温帯林としては初となる和歌山演習林を設置した。

1919年に農学部が設置された九大では、それまで内地に演習林がなかったが、1921年に福岡県早良郡に早良演習林を、糟屋郡に糟屋演習林を設置した。九大農学部では同年に第1期生が入学し、翌年には林学科が設置された。研究・教育に使いやすい大学の近くに演習林を設置することが必須となり、福岡市近郊の両地域に設置したのであった。

4大学の中では最も遅い1924年に農学部が設置された京大では、1921年に芦生演習林を設置した。これは農学部設置に備えて、大学に近い場所を確保したものとみられる。また、1926年には和歌山演習林を設置した。京大演習林では、同じ温帯に属する演習林を内地に2か所設けた理由を、芦生はスギ、和歌山はヒノキの産地であるからと説明している¹⁶。

以上のように多くの演習林が戦前期に設置された。それらのうち外地の各演習林は、第2次世界大戦の日本の敗北により各国政府に接収されることになるが、内地演習林は、演習林の名称を失ったところもあるものの、現在まで大学の所有する森林として続いている。

2 演習林と大学財政

(1) 演習林と大学財政

帝国大学において、演習林収入は重要な財源であった。図1は大学の歳入のうち、各大学とも最多を占める政府支出金受入を除き、独自財源である病院収入、演習林・農場収入、学生納付金（授業料・入学金等の合計）の推移を示したものである。これを見ると、北大を除き、病院収入が最も多く、20%前後を占めている。演習林・農場収入は、学生納付金に匹敵する額となっており、帝国大学の財政における重要性は高かったと言えるであろう。特に北大の場合は、演習林・農場収入が病院収入を上回っており、重要な財源となっていた。

このように演習林収入は、帝国大学の重要な財源であったのであるが、一方でその維持・経営には多額の費用がかかっていたことは言うまでもない。しかしながら、演習林全体として見れば、図2にみるように、設置初期等の一時期を除き、収入が支出を上回る黒字の状態が続いており、大学財政を圧迫することはなかった。しかしながら、個別の演習林の収支を見ても、その状態はそれぞれ大きく異なっている。

図3は、1926年から30年までの各演習林の収支を示したものである。ここから、大まかな傾向としては、樺太・北海道という亜寒帯に属する各演習林は、一部を除き収入が支出を大きく上回り、その他の地域の各演習林は、逆に支出が収入を大きく上回る、ということが読み取れる。そして、亜寒帯の演習林の収入により、演習林全体の収支が黒字になっている、ということがわかる。つまり、演習林財政は亜寒帯林によって支えられていた。さらに言えば、亜寒帯林の存在によって、演習林は帝国大学の財政に貢献することができていたわけである。

それでは、亜寒帯演習林とその他の演習林の間の差異はなぜ生じているのだろうか。以下、

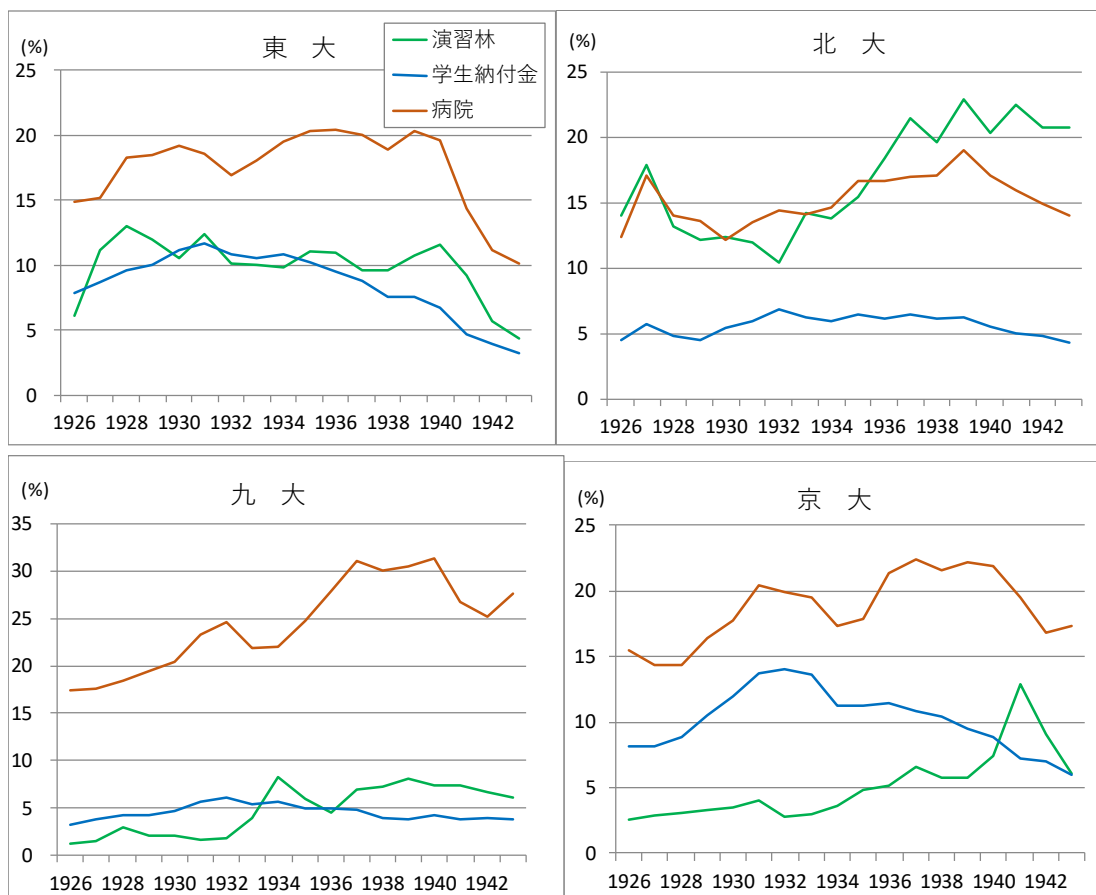


図1 帝国大学歳入構成比

出典：「帝国大学歳入歳出決定決算書」各年度版。

備考：最も大きな割合を占めるのは政府支出金受入であるが、省略した。

東大は農場収入を含まない。

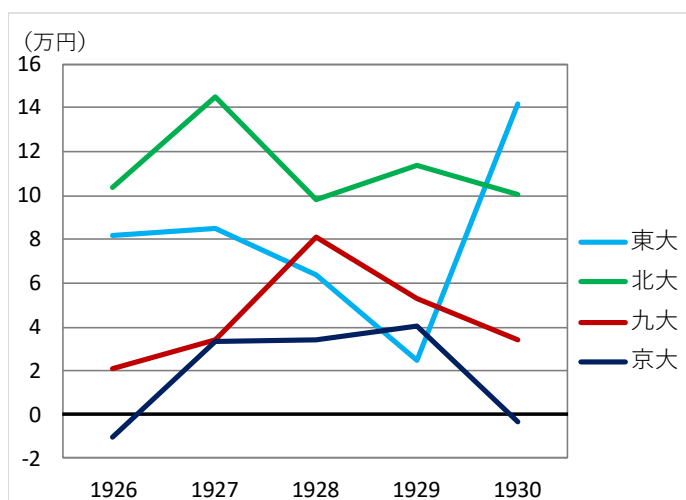


図2 演習林収支差

出典：前掲「演習林整理ニ関スル調」。

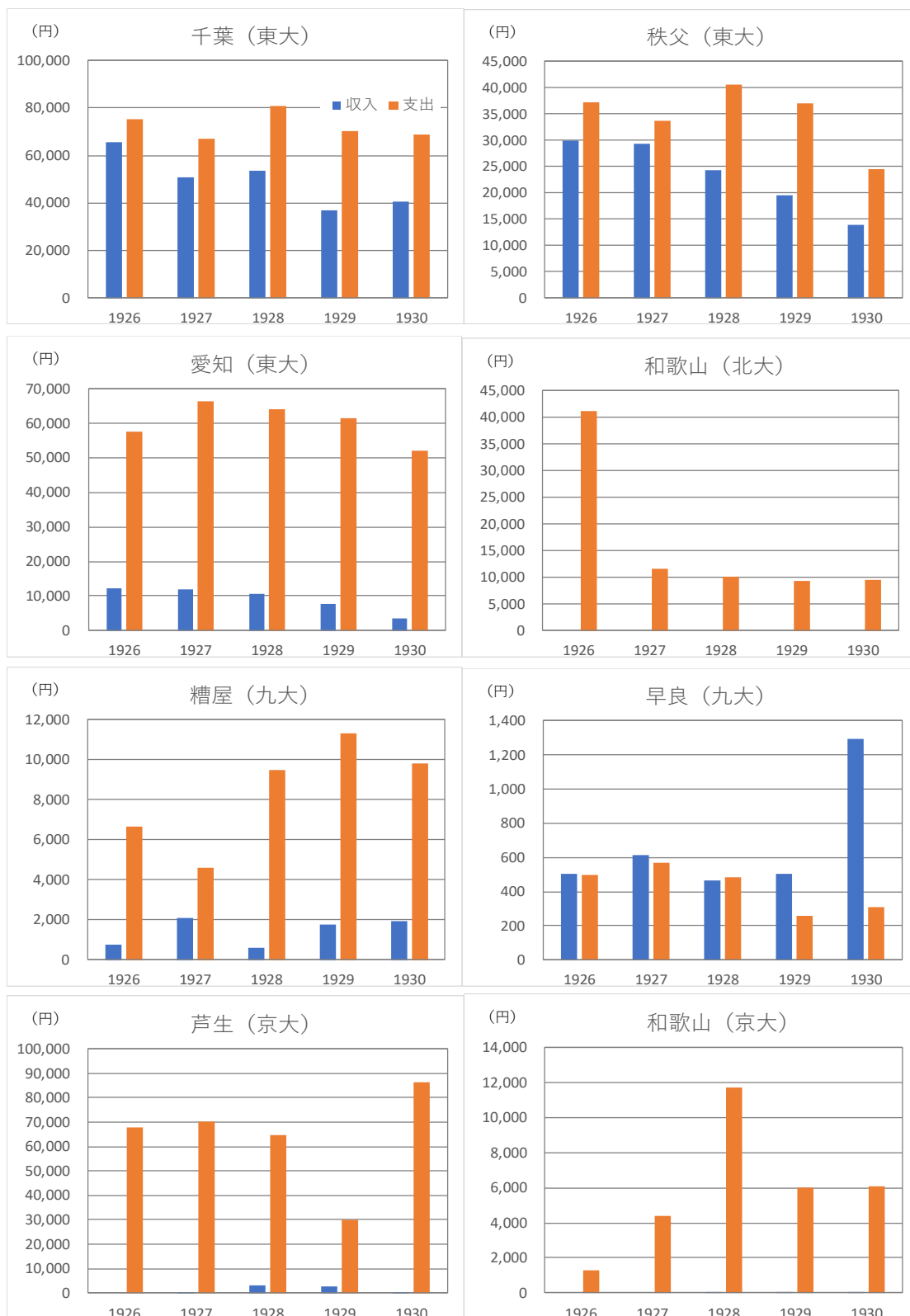


図 3-1 内地各演習林収支 (1926~1930 年)

出典：前掲「演習林整理ニ関スル調」(以下図 3 はいずれも同じ)。

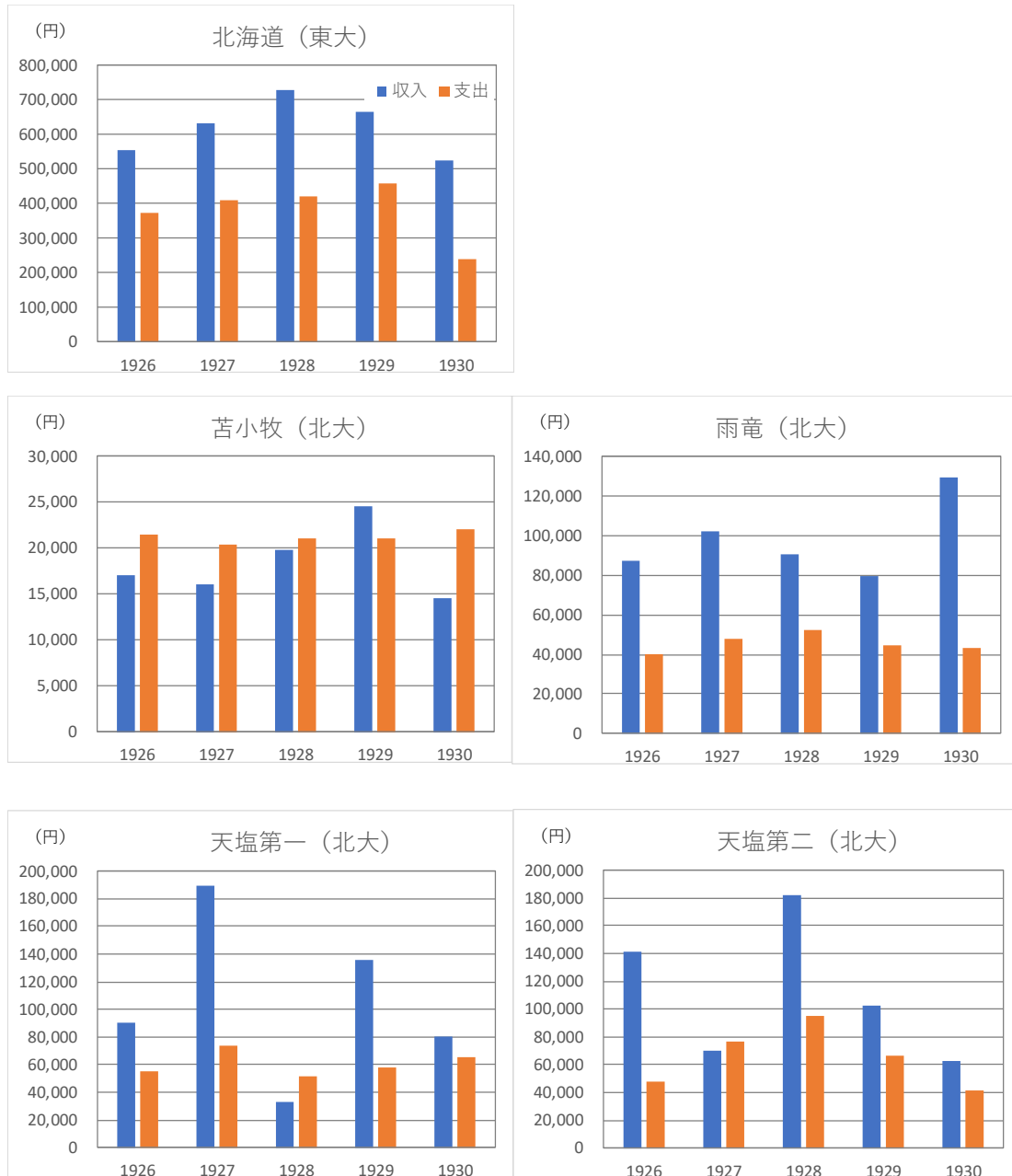


図 3-2 北海道各演習林収支 (1926~1930 年)

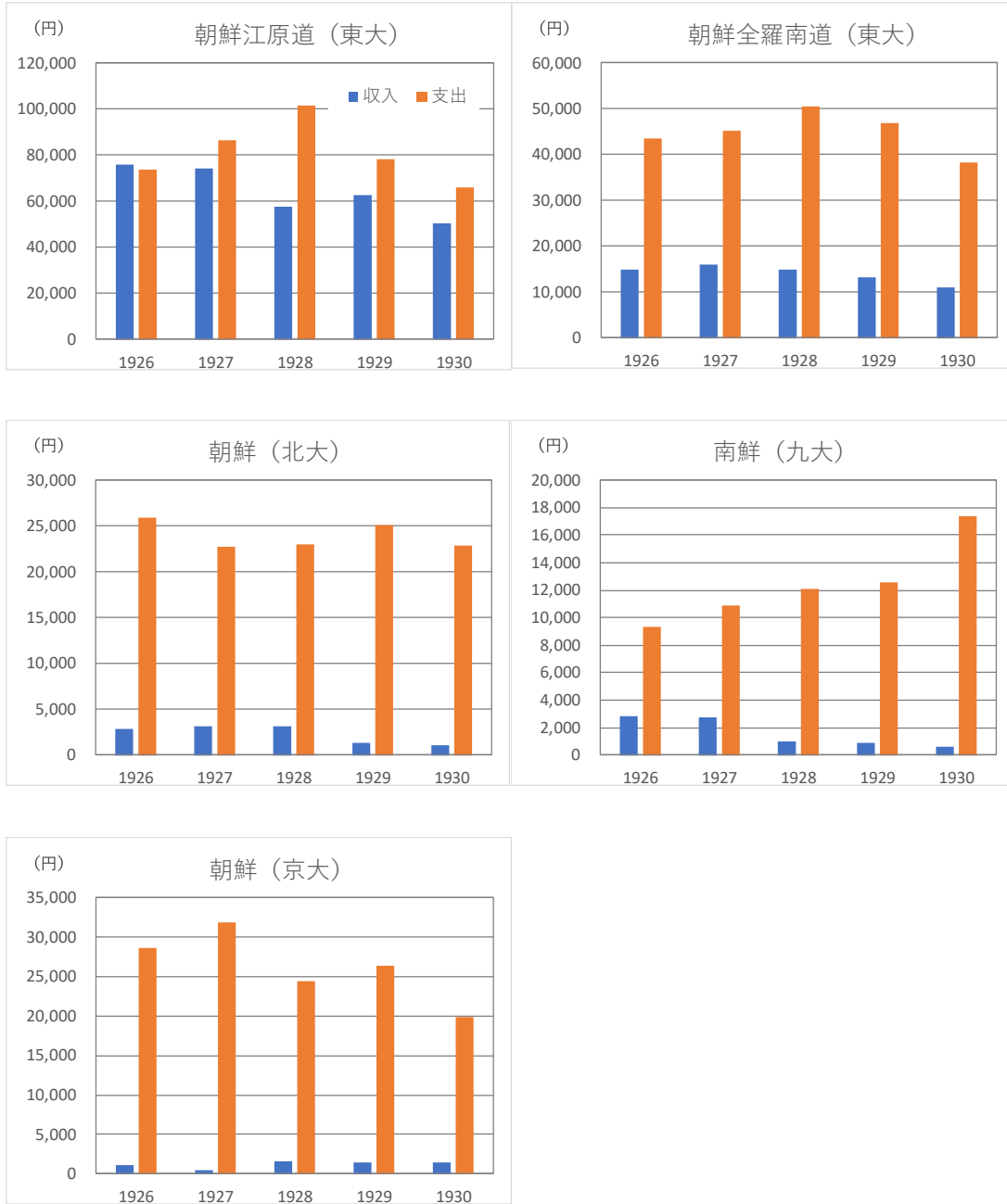


图 3-3 朝鮮各演習林収支 (1926~1930 年)

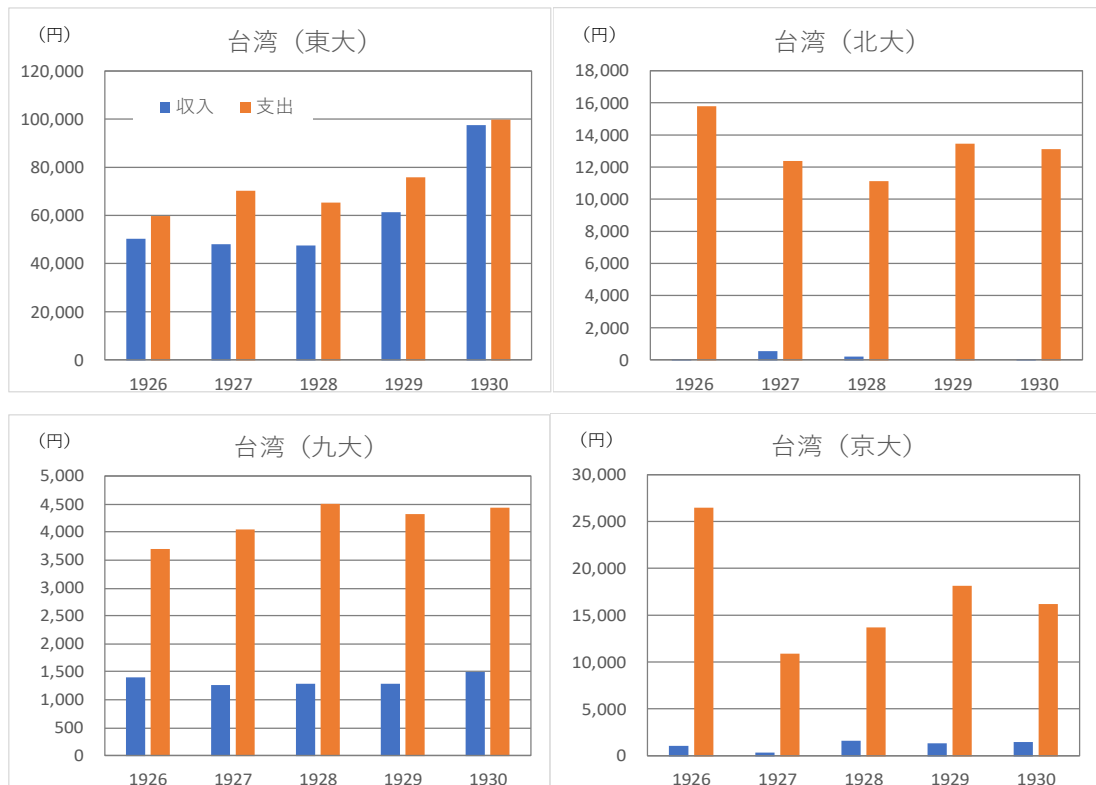


图 3-4 台湾各演習林收支 (1926~1930 年)

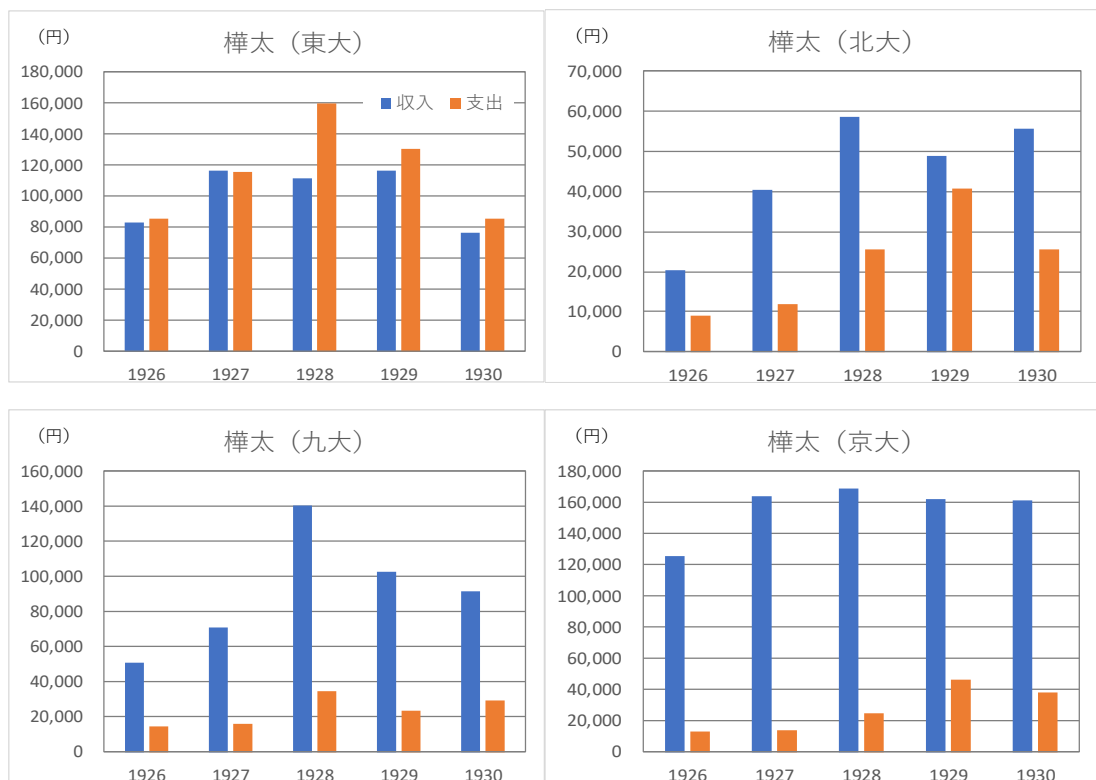


图 3-5 樺太各演習林收支 (1926~1930 年)

地域ごとにそれぞれの財政的特徴と、それを生んだ要因を見ていくこととする。

(1) 内地の各演習林

内地演習林は、財政的には概ね支出超過の傾向にあり、大学への財政的貢献はなかったとみてよいだろう。したがって内地演習林の存在意義は、財政以外の面、すなわち研究・教育の面にあったと言える。

演習林の本来の目的は研究・教育にあるわけであるから、このことは当然ではある。例えば、前述したように東大愛知演習林は、砂防工事を主眼としており、まさに研究のための演習林であった。各大学から最も近い場所にある演習林は、それぞれ学生の実習利用が最も多く、教育のための演習林という性格が強い。北海道の演習林のうちでも北大苫小牧演習林は、ほかの道内の各演習林とは異なり、支出超過の傾向があるため、内地演習林に近い性格をもっていると言える。すなわち、北大から最も近い演習林として、研究・教育のための演習林という性格が強いものであった。そのため、支出超過であってもこれらの演習林は大学として必要なものであった。

とはいえ、内地演習林は財政的に無意味だったわけではない。特に東大の千葉・秩父両演習林は、支出超過とはいえ収入もそれなりに多い。北大苫小牧演習林も同様である。これらは内地演習林の中では比較的面積も大きいため、収入を上げることが可能であったものとみられる。

(2) 北海道の各演習林

北海道に演習林をもっていたのは東大・北大のみである。前項でみた北大苫小牧演習林を除き、いずれも収入が支出を大きく上回り、大学に大きな利益をもたらしていた。とりわけ東大北海道演習林は、帝国大学の全演習林中最大の財政規模を誇り、図 3 の期間中についてみると、東大の全演習林収入のおよそ 3 分の 2、すべての帝大演習林の収入に対しても 4 割前後を占めるほどであった。

北海道はもともと人口が非常に少なく、農耕も困難であったため、広大な原生林が存在していた。地形的にも演習林が設定された地域は比較的なだらかな丘陵地が多く、土砂災害も少なかった。こうした条件に恵まれたことで、支出を抑え、収入を多くするという経営が可能だったわけである。

一方で、人口が少ないため演習林周辺地域の住民を雇用して施業にあたらせる、ということとはできなかった。そのため、例えば東大演習林では、「施業上必要なる労働力は勢ひ遠隔の地より募集せざる」を得なかった。1906 年から林内殖民の実験を開始、1915 年からは第 1 期開墾計画を実施して、約 5,000 町を開墾した。殖民者は 1943 年までに戸数 1,000、人口 6,600 に達した。1940 年には林内 3 部落のうち 2 部落が、分村独立するまでになっている¹⁷。こうして殖民を行うことにより演習林の施業を可能にし、莫大な収入を上げることに

成功したのである。林内殖民は、東大ほど大規模ではないが、北大の道内演習林でも行われている。

このように、亜寒帯林に属する北海道の各演習林は、次にみる樺太演習林と同様、その自然条件などから大きな利益を大学にもたらず、財政的意義の大きなものであった。もちろん研究・教育活動も北海道の各演習林では行われているが、財政的貢献度が高かったのが北海道の各演習林の大きな特徴であった。

(3) 樺太演習林

樺太演習林は、表2にあるように、他の植民地に比べて人口が非常に少なく、人口密度はきわめて低い地域に設置された。もともと先住民の人口も少なく、かつ農耕が困難な気候であったため、手つかずの原生林が広大に存在し、豊富な森林資源に恵まれていた地域であった。北海道の各演習林と同様の条件下にあったのが樺太演習林であった。

表2 植民地の人口密度等（1925年）

	人口（人）	面積 (km ²)	人口密度 (1 km ² あたり)
台湾	4,147,462	35,969	115
樺太	189,036	36,162	5
朝鮮	19,015,526	220,710	86

出典：内務大臣官房文書館編纂『日本帝国国勢一斑』
第四十五回（内務大臣官房文書課、1927年）

このような条件に恵まれていたため、植林の費用は少なくて済んだ。また、施業地の大半がなだらかな丘陵地にあり、土砂災害も少なかった。そのため土木費支出も少なかったものとみられる。これらは後述する朝鮮の各演習林に比べると、支出を抑える重要な要因であった。以上のように、他の演習林に比べて、規模の割に支出を抑制できる大きな要因があったことが、大幅な収入超過につながったと考えられる。

また、豊富な森林資源に恵まれたことは、多額の収入をもたらすこととなった。京大は1920年に樺太木材株式会社と、九大は1926年に王子製紙と、それぞれ払い下げ契約を結び、東大は1927年から王子製紙への払い下げを開始した¹⁸。大口の払い下げ先を確保することができるようになったわけである。

実際に樺太演習林がどれぐらいの収入を得ていたのか、九大演習林の場合についてみると、表3のようになる。九大の場合、王子製紙との間に、1926～1935年度は20万～30万石を、1936年度以降は10万～20万石を、毎年度払い下げる年期契約を結んでいた。これらは王子製紙社長名義での払い下げであり、これに加えて王子製紙敷香出張所長名義

で被害木・薪炭材等の払い下げも行っていた。このほか、一時契約による用材の払い下げが地元業者に対して行われることもあり、また地域住民向けに薪炭材の払い下げも行われている。このように、九大演習林では、大規模な施業が行われており、それに対応する人員も必要であった。王子製紙と契約した 1926 年に助手の配置を開始し、1931 年には九大の全演習林中最初の専任助教授を樺太演習林に配置した。さらに 1937 年からは助手を 2 人に増やしている。

表 3 九大樺太演習林の主産物払い下げ

年度	王子製紙へ払い下げ		その他用材		その他薪炭材	
	材積 (m ³)	金額 (円)	材積 (m ³)	金額 (円)	材積 (m ³)	金額 (円)
1925			197.85	685.61		
1926	23,616.14	50,915.13	93.50	201.12		
1927	28,041.48	70,531.93	47.05	106.89		
1928	55,804.59	140,348.99	59.06	137.93		
1929	57,922.57	102,521.24	17.99	67.02		
1930	57,202.86	91,811.72	33.11	58.18	152.13	59.02
1931	42,767.00	60,255.22	111.53	273.90	115.91	47.54
1932	43,408.99	61,383.14	127.38	174.46	299.65	105.99
1933	56,120.11	167,395.63	362.19	778.19	132.26	49.93
1934	79,977.14	386,718.18	381.06	667.30	10,541.83	3,127.80
1935	60,477.13	260,356.27	578.88	445.20	1,460.84	316.88
1936	42,401.42	176,471.69	2,841.39	8,150.18	3,656.60	2,202.40
1937	52,805.95	288,533.76	338.12	651.04	1,063.93	685.98
1938						
1939	46,048.35	366,126.61	3,652.41	17,062.40	2,550.90	1,364.10
1940	46,682.44	383,101.33	386.29	1,389.47	139.55	25.07
1941	51,926.43	359,099.23	592.05	2,861.51	884.59	587.62
1942	40,052.97	285,375.61	159.96	276.85	966.62	554.21
1943	31,389.76	223,757.30	404.48	1,910.13	3,410.92	933.61

※1938 年度は内訳不明。

出典：『演習林主産物処分簿』、『学事年報』各年度版

この九大の例に代表されるように、樺太演習林は各大学にとって財政的に非常に重要な存在であった。特に、北海道に演習林をもたない九大・京大にとっては、収入が支出を上回

るのはほぼ樺太演習林のみであった。教官が配置されていることからわかるように研究上あるいは教育面での意義も大きかったが、北海道の各演習林と同様、あるいはそれ以上に樺太演習林は財政的に大きな貢献があったのである。

(4) 朝鮮の各演習林

朝鮮の各演習林は、東大の江原道演習林を除き、恒常的に支出が収入を上回り、大幅な赤字経営が続いていた。この状況は、日本の敗戦までほとんど変化していないとみられる。このような状況になっているのは、朝鮮演習林は周辺人口が多く、演習林設置以前から演習林区域内で火田が行われていたため、はげ山になっているところが多く、まず植林をして森を育てる必要があったことが理由の1つである。もう1つの理由は、各演習林の大半が急峻な山地であり、水害による土砂崩れがしばしば起こるなどしたため、大規模な土木工事をする必要があったからである。このように植林や土木工事が必要で、それに対して多額の支出をせねばならなかった。一方ですぐに売却できるような木は少ないため、収入は少なかった。こうした状況は容易には改善することができず、そのため朝鮮演習林の収支は常に支出超過だったわけである。

このように見てくると、朝鮮演習林は経営的には赤字で大学財政には貢献していなかった。一方で、教育・研究への貢献度も他の演習林に比べて高いとは言えなかった。例えば九大の場合、樺太演習林に関する論文・調査報告数は7本、学生実習の回数は10回であるのに対し、南鮮演習林はそれぞれ2本と5回に過ぎない¹⁹。とすると、ここで当然1つの疑問が生じる。それは、なぜ朝鮮演習林が必要だったのか、という疑問である。

その理由として考えられるのは、朝鮮は日本の本州などと同じ気候帯(温帯)に属し、植生も似ている、ということである。日本内地の演習林は、亜寒帯に属する北海道を除くと最大でも6,000町ほどである。それに対し、朝鮮であれば、はるかに広大な演習林をもつことができる、というのが1つの理由であると考えられる。

もう1つの理由は、林学研究を通じた朝鮮統治への貢献である。帝国大学は国家への貢献をその研究・教育の目的としており、その一環として演習林が朝鮮統治に貢献することは、いわば当然の勤めであった。特に地域社会との関係で、森林保護思想の普及、火田民への生業付与、といったことを、各演習林は行っており、実際の地域住民(朝鮮人)の受け止め方はともかくとして、統治に貢献すべく活動していたのである(具体的内容については後述)。

こうした理由により、たとえ赤字で教育・研究上の役割が小さくても、朝鮮演習林は必要だったのである。

(5) 台湾演習林

以上の各演習林は、概ね地域ごとに共通する特徴をもっていたが、台湾演習林に関しては、大学ごとにその特徴が異なっており、地域的な共通性が見出しがたい。その要因としては、

第1に面積の差（前述のとおり、東大・京大は広く、九大・北大は狭い）、第2に所在地の条件の違い（特に原住民との関係）が挙げられる。

台湾演習林はいずれも支出超過の傾向があるが、東大演習林に関しては収支の差がかなり小さかったと言える。これは面積が広大でもともと森林資源に恵まれていたことがあるが、総督府との連携で理蕃政策が一定の成果を収めたことで施業可能になったことが大きな要因であろう。それに対して京大演習林の場合は、後述するように原住民対策がきわめて困難で、十分な施業を行えなかったため、ほとんど収入を得ることができなかった。同じ広大な面積を得ていながら、財政面で大きな差が東大と京大の間に生じているのは、こうした要因があったとみられる。

九大と北大は東大・京大に比べて面積ははるかに小さく、もともと収入を上げる条件は東大・京大よりも劣っていたと言える。これは全大学に共通することであるが、台湾の特産品である樟脳の原料である樟は、台湾総督府の所有であるため、林内にあってもそれを大学演習林が処分することはできなかった。このことはとりわけ小規模演習林にとっては不利な条件であったと思われる。九大・北大ともに大幅な支出超過であるが、亜熱帯林を内地にえることは困難であったため、財政的には負担が大きくても台湾演習林は維持しなければならなかったのである。

以上みてきたように、亜寒帯林に属する樺太・北海道の各演習林は、自然条件などに恵まれ、また広大な林地を有することができたため、大学に大きな利益をもたらし、財政的な貢献をしていた。一方、その他の地域の演習林は、概ね赤字基調で財政的には貢献することがなかったが、研究・教育的意義や、地域社会との関係から必要なものであった。このように帝国大学の演習林は、それぞれの条件・背景によって規定される特徴をもち、それらに応じた役割を果たしていたのである。

3 演習林と地域社会

演習林と地域社会

(1) 演習林・大学と地域社会

現在でもそうであるように、大学の周囲には多くの学生や教職員が居住し、「大学町」が形成された。帝大生は当時における飛び抜けたエリートであったため、町の人々との関係性は必ずしも良好なものばかりではなかったが、そこで生活することにより、地域社会との一定の関係を築くことになった。また大学自体も、地域住民を雇用することなどにより、経済的な面で地域社会に貢献していた²⁰。

大学が地域社会と関係をもつ場合は、大学本部の所在地ばかりではない。本部から離れた場所にも、農場や臨海実験所・水産実験所等の附属施設があり、演習林もまたそのひとつであった。これらは大学本体に比べればはるかに小規模ではあったものの、地域住民を雇用するなど、地域社会と一定の関係を築いていた。特に外地演習林は、大学にとっては唯一の常設的な外地社会との接点であった。すなわち外地演習林は、大学と外地とを結ぶ窓口の役割を果たしていたと言える。そこで以下では、各外地演習林がそれぞれの地域社会とどのような関係を結んでいたのかを検討する。

(2) 台湾演習林と地域社会

台湾演習林はいずれも「蕃地」、すなわち原住民の居住地を多く含んでいた。日本は 1895 年に台湾統治を開始したものの、「蕃地」の統治は容易ではなく、台湾統治開始から 35 年も経った 1930 年に「霧社事件」が起こっていることからわかるように、しばしば原住民の反発・抵抗を招いていた。台湾演習林はそのような統治困難な場所に設置されたのである。

とりわけ京大演習林は全部が蕃地に属していたため、以下のように原住民対策に苦心し、施業が困難な状態であった。

本演習林ハ全部蕃地ニ属シシカモ台湾全土ニ於テ最獐猛ヲ極ムル生蕃ノ根拠地ニシテ今尚馘首ノ行ハルル状況ニアル。昭和 2 年迄ハ総督府ハ本演習林内ニ於テ台湾ノ他ノ地方ニ於テハ殆其跡ヲ絶ツニ至リタル完全ナル警備線ヲ設置シ婉々数里ニ亘リ山ヲ越エ谷ヲ亘レル大道路ヲ作り之ニ沿ヒ 200 乃至 300m 毎ニ家屋ヲ設ケ巡查及補助員ヲ配置シ道路外側ニハ鉄条網ヲ張り強力ナル電流ヲ通ジ触ルルモノ悉ク即死スル様ニシテ巡查ハ武装シテ常ニ道路上ヲ往来シ以テ生蕃ノ襲来ニ備ヘテ居タ、此警備線内ニ存スル演習林ノ面積ハ全面積ノ約 10%デアリ線外区域ハ約 90%ニ当タル、警備線内ノミハ地方官憲ノ許可証ヲ携帯スレバ兎モ角出入シ得タノデアアルガ往々ニシテ線ヲ越エテ襲撃シ来レル蕃人ノ馘首沙汰ガアツタ、況ンヤ線外ハ軍用飛行機上ヨリ瞰下スル以外ニ絶対ニ視察ノ方法ガ無カツタノデアアルガ幸ニシテ警備線ハ逐次進出シ（警備ノ方式ニモ多少ノ変化アリ）為ニ最近ニ於テハ吾人ノ出入シ得ル区域多少ノ増加ヲ見タルモ尚演習林ノ約 80%ニ対シテハ生蕃以外ノ人類ハ出入スルコトガ出来ヌ。演習林ノ職員ハ総督府ノ警備ノ下ニ僅カニ線内区域ニ於テノミ施業ヲ継続シ時々蕃情ヲ察シ武装シテ線外ノ偵察ニ赴クコトガアルノミデアアル²¹。

台湾総督府では原住民統治政策（「理蕃政策」）の一環として、原住民の居住地を設定し、そこに移住させるとともに授産事業を行った。これは東大演習林内でも実施され、京大演習林内でも行われたようである。このように、1900 年代に設置され、面積の大きかった東大・京大の両演習林は、原住民との関係が課題となっていた。

原住民との関係ともかかわって、もうひとつの台湾演習林にとっての課題は、人口稀薄な地域に設置されたことであった。演習林は、その保護や施業のための人員を要するが、それ

を内地から多数連れていくことは困難であり、現地住民を採用する必要があった。採用の対象とされるのは「未開人」とされた原住民ではなく、台湾に居住する漢民族である。しかしながら演習林設定地は多くが「蕃地」であるため漢民族の居住者は極めて少なかった。そこで九大演習林の場合は、人口移入策として林内に水田や茶畑を整備し、それらの耕作にあたらせながら演習林の作業に従事させる、という方策をとっている。その結果図 4 にみるように、九大演習林の主産物・副産物収入では茶葉が大きな割合を占めることとなった。

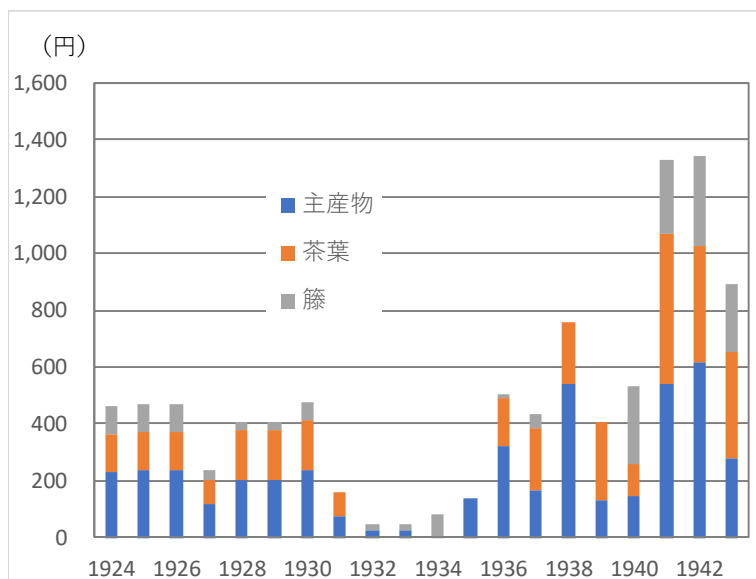


図 4 九大台湾演習林主産物・副産物収入推移

出典：『九州帝国大学農学部附属台湾演習林概要』（台湾演習林事務所、1938年）。

(3) 朝鮮演習林と地域社会

朝鮮演習林は台湾や樺太に比べると人口の多い地域に設置された。朝鮮では併合前から広く火田が行われており、それは演習林となる地域でも同様であった。演習林にとって、火田は当然禁止すべきものであったが、住民の生活手段を奪うことになる。そのため、演習林設置後はただちに禁止はせず、漸次縮小の方針をとっている。例えば九大の南鮮演習林の場合、1925年には444,403㎡の火田があり、そこで462戸が生計を立てていたが、1933年には431,900㎡、438戸と、若干縮小している²²。

九大南鮮演習林では火田を防ぎ、森林保護思想を広めるため、設置前から演習林内の森林を利用して住民に森林保護組合をつくらせた。これは演習林からとれる薪などの副産物を譲与する代わりに、火災や盗伐の予防などの保護活動を行わせるものであった。1933年の組合員数は2,358人で、南鮮演習林では、十分な効果を挙げている、としている²³。

また、火田での耕作の代わりとして、住民に生業を付与することも行われた。その1つは

木工組合である。これは地域住民に組合をつくらせ、木工器具製作の改良を図り、製品を販売することで収入を得させようとするものであった。しかし実際には改良は進まず、失敗に終わったようである²⁴。

もう 1 つは木炭の生産である。もともと朝鮮では木炭はほとんど使用されていなかったようであるが、日本人が入ってくるようになると、彼らが木炭を持ち込んだ。南鮮演習林では地域住民のつくった商会に木炭の生産を行わせた。1918 年には住民 11 人を日本に送って製炭技術を学ばせるがうまくいかなかった。その後日本人技術者を呼んで指導させた結果やや品質が改良された²⁵。

以上のように、火田対策や生業付与を行ったほか、演習林内での管理作業などにあたる人員を地域住民から雇用するなどもしている。こうして演習林では、森林を保護するように地域社会を変化させようとしていたのである。

(4) 樺太演習林と地域社会

演習林が設置される前の樺太では、内地から来た「利権屋」によって濫伐が行われ、経済的損失を与えていた。そのため同じく内地から来た「よそ者」である大学演習林も、同じようなものとみなされてしまっていた。そのこともあって、樺太庁が演習林用地の譲与を渋ったのは、前にみたとおりである。

しかし樺太演習林では、前述のとおり王子製紙と契約し現地工場にパルプの用材を提供するなどすることにより、樺太の地域経済に貢献することとなったのである。用材の伐採作業のほか、間接的には工場従業員の雇用も生み出すこととなった。また現地住民のために薪炭剤の販売も行っている。こうして樺太演習林は、「利権屋」と同一視される状況を解消していき、現地社会に貢献するのみならず、大学に大きな利益をもたらしていったのである。

一方で、演習林側は、朝鮮の場合とは異なる態度を樺太庁に見せている。朝鮮では前にみたように、2 度にわたって林地の一部を総督府に返還していた。それに対して樺太では、例えば九大の場合、樺太庁から林地の移管要請や、演習林経営の革新を要求されるなどしているが、いずれも拒否している²⁶。総督府に対しては弱く、樺太庁に対しては強く出る、という態度の違いは、ひとつには両官庁の力関係の大きな差によるものかもしれない。だが根本的には、朝鮮の演習林が総督府からの貸与（借地）であるのに対し、樺太の演習林は樺太庁から譲与（移管）されたもの（大学の財産）である、という違いによるものであろう。

おわりに

以上みてきたように、戦前期の演習林は、大学財政に大きな貢献をするとともに、地域社会と大学をつなぐ存在でもあった。また、本稿ではふれなかったが、研究の面では、演習林から得られる資料を使って多くの研究がなされていたし、教育の面でも、学生の実習が頻繁

に行われていたのである。このように、戦前期の演習林は農学部にとってはもちろん、大学全体にとっても非常に重要な存在であったのである。

こうした演習林の存在意義は戦後大きく変化する。まず、敗戦によって外地の演習林はすべて喪失することとなった。とりわけ大きな収入をもたらしていた樺太演習林の喪失は、財政面からは非常な痛手であったものと思われる。その後さらに安い輸入材の流入により国産材が売れなくなると、演習林の財政的価値は失われてしまうこととなる。

研究・教育の面でも、内地とは異なる気候帯に所在していた外地演習林の喪失は、大きな痛手であった。しかし後に海外旅行が自由化され、航空運賃が安くなっていくと、研究者も学生も、それぞれの課題に最適な場所を選んで研究・実習が行えるようになり、外地演習林を保有する必要性はなくなっていると言える。これは残された内地演習林も同様であり、近年の大学財政逼迫の折柄、農学部附属演習林ではなく、全学的なセンターに移行した(旧)演習林も急増している。なかにはもはや農学部との関係が完全に切れてしまっているところもあるようである。

このような状況からすると、いずれ演習林という形態はなくなってしまい、その歴史的意義も忘れ去られる恐れがあろう。本稿が演習林の歴史的意義を再認識する材料となれば幸いである。

¹ 帝国大学演習林に関する研究は、各大学の年史、各演習林の周年記念誌等を除くと、多いとは言えない。これまでの研究としては、島恭彦「帝国大学特別会計と演習林」(『経済論叢』94-5、1964年11月)、小鹿勝利「戦前期における国有財産整理事業と大学演習林」(『北海道大学農学部演習林研究報告』37-3、1980年11月)、奥山洋一郎「戦前期における東京大学演習林をめぐる縮小論議－国有財産整理事業における東大の対応－」(『東京大学農学部演習林報告』102、1999年12月)があるが、いずれも国有財産整理事業との関連に着目したものである。

² 例えば、九州帝国大学の演習林を対象とした論文等の本数、実習の回数(1935～44年度)は以下のとおりである。

演習林名	糟屋	早良	宮崎	南鮮	北鮮	台湾	樺太	その他	総数
論文・調査報告数	3	2	0	2	3	1	7	5	22
学生実習回数	55	0	3	5	0	0	10	—	73

出典：「論文・調査報告数」は『九州帝国大学農学部演習林報告』掲載数(糟屋・早良両演習林に関わるものが1本あるため、各項目の合計と総数は一致しない)。

「学生実習回数」は「学生実習等一覧表」(九州大学演習林百年史編集委員会編『九州大学演習林百年史』、九州大学農学部附属演習林、2013年、所収)。

-
- 3 『東京帝国大学農科大学千葉県下演習林概要』（東京帝国大学農学部演習林、1918年）、pp.2-3。
- 4 『演習林概要』（東京帝国大学農学部附属演習林、1943年）、pp.33-34。
- 5 前掲『演習林概要』、p.135。
- 6 以上、北海道大学編『北大百年史』部局史（北海道大学、1980年）、pp.971-972。
- 7 前掲『演習林概要』、p.62。
- 8 『京都帝国大学農学部附属演習林概要』（京都帝国大学農学部附属演習林、1928年）、p.221。
- 9 『九州帝国大学農学部附属台湾演習林概要』（台湾演習林事務所、1938年）、p.2。なお、他の2か所の候補地は不明。
- 10 後藤房治「朝鮮林業」（大日本山林会編『明治林業逸史』、大日本山林会、1931年）、pp.514-515。
- 11 以上、前掲『京都帝国大学農学部附属演習林概要』、『東京帝国大学農学部附属朝鮮全羅南道演習林史』（東京帝国大学農学部附属朝鮮全羅南道演習林、1932年）、『九州帝国大学農学部附属南鮮演習林要覧』（九州帝国大学農学部附属演習林、1933年）による。
- 12 中牟田五郎「樺太の森林経営」（前掲『明治林業逸史』）、p.492。
- 13 樺太林業史編纂会編『樺太林業史』（農林出版、1960年）、p.87。
- 14 前掲中牟田、p.493。
- 15 前掲『演習林概要』、p.151。
- 16 前掲『京都帝国大学農学部附属演習林概要』、p.2。
- 17 前掲『演習林概要』、pp.53-54。
- 18 王子製紙山林事業史編集委員会編『王子製紙山林事業史』（王子製紙山林事業史編集委員会、1976年）、pp.175-177。なお、樺太木材株式会社は三菱商事によって設立されたが、1926年に王子製紙に事業譲渡されている。
- 19 註2の表を参照。
- 20 「大学町」のありようについては拙稿「近代の箱崎と博多湾—大学町の形成—」（『九州史学』第180号、2018年9月）を参照。
- 21 前掲前掲『京都帝国大学農学部附属演習林概要』、p.221。
- 22 『九州帝国大学農学部附属朝鮮演習林要覧』（九州帝国大学農学部、1925年）、p.14、前掲『九州帝国大学農学部附属南鮮演習林要覧』、p.32。
- 23 前掲『九州帝国大学農学部附属南鮮演習林要覧』、pp.18-19。
- 24 前掲『九州帝国大学農学部附属南鮮演習林要覧』、p.46。
- 25 前掲『九州帝国大学農学部附属南鮮演習林要覧』、pp.50-51。
- 26 この点について詳しくは、拙稿「九州帝国大学の外地演習林」（前掲『九州大学演習林百年史』所収）を参照。

2016年韓国における演習林史ワークショップ・旧演習林調査報告

藤岡健太郎

2016年3月9日から11日まで、科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究(C)課題番号 15K04237「帝国大学農学部形成と展開に関する研究—九州帝国大学農学部を中心に—」により、韓国において演習林史に関するワークショップの開催および九州帝国大学・東京帝国大学・京都帝国大学の旧演習林調査を行った。参加者は以下のとおりである（所属は当時）。

研究代表者 藤岡健太郎（九州大学百年史編集室）
研究分担者 新谷恭明（九州大学基幹教育院）
研究分担者 折田悦郎（九州大学大学文書館）
研究分担者 永島広紀（佐賀大学文化教育学部）
研究分担者 井上美香子（九州大学百年史編集室）
研究協力者 大賀祥治（九州大学大学院農学研究院）
研究協力者 桂木勝彦（九州大学大学文書館）
研究協力者 韓相一（九州大学大学院人文科学府）

1) 旧九州帝国大学南鮮演習林事務所所在地調査

3月9日、これまで不明であった旧九州帝国大学南鮮演習林事務所の所在地を調査した。所在地については、慶尚南道河東郡河東面邑内洞（現在の同郡河東邑邑内里）であることまでは判明していたが、地番等を示す資料が確認できていないため、詳細が不明であった。

手がかりを得るために邑事務所を訪ねたところ、邑長の金相助氏にお願いいただくことが



南鮮演習林事務所所在地（推定）の現況

できた。金氏は河東郡で39年間公務員として勤めておられ、地域の事情にたいへん詳しいとのことであった。金氏によると、以前山林関係の事務所があったところが現在智異山トレッキングコースの管理事務所になっているとのこと、そこにご案内いただいた。残念ながら古い木造の建物は2003年に取り壊され、新しいものに建て替わっていたが、金氏に演習林事務所の写真を見ていただいたところ、以前の建物

とよく似ているとのことであった。他に遺物等もなく、確証を得るには至らなかったが、ここが南鮮演習林事務所の所在地であった可能性は高いと思われる。

2) ソウル大学校との演習林史に関するワークショップ・学術林調査

3月10日、ソウル大学校農業生命科学大学南部学術林秋山試験場において、演習林史に関するワークショップを開催した。

9時30分開会し、ソウル大学校李宇新教授・九州大学新谷恭明教授の挨拶ののち、ソウル大学校南部学術林についての説明が行われた。

続いて報告に移った。報告者と題目は以下のとおりである。

藤岡健太郎「帝国大学の朝鮮演習林—九州帝国大学南鮮演習林を中心に—」

永島広紀「朝鮮総督府試験場・水原高等農林学校と九州帝国大学農学部」

任相浚「ソウル大学校南部学術林秋山山林水門観測施設概要」

パク・ピルソン「試験造林地・試植地生育状況分析研究事業」

各報告の要旨は以下のようなものである。藤岡報告は、朝鮮にあった帝国大学の演習林について、その設置状況と大学にとっての意義、地域社会との関係について考察した。永島報



藤岡報告



永島報告



任報告



パク報告

告は、朝鮮総督府試験場・水原高等農林学校と九州帝国大学農学部の間を、場長・教授、学生という人的つながりの面から示した。任報告は、東大演習林時代に設置された水門観測施設が近年再建され、これを利用した観測が行われていることを紹介した。パク報告は、現在ソウル大学校等が中心となって行われている、韓国全土における試験造林地の調査の状況について報告した。

各報告の終了ののち質疑が行われた。その中で、パク報告にあった造林地調査に関して、ソウル大学校側は日本統治時代の造林状況を示す資料を捜しているとのことで、これについては各大学の演習林・農学部や文書館に問い合わせれば資料が残されているかもしれないこと、九大としても資料収集に協力したい旨を表明した。

ワークショップ終了後、試験場建物付近の学術林内の視察を行った。東大時代からの試験造林地やソウル大学校学術林になってからの試験造林地、任報告で紹介された水文観測施設等を視察した。昼食ののちソウル大学校南部学術林事務所に向かい、標本室や、現在光陽市の文化財に指定されている東大時代の宿舎建物を見学して、この日の日程を終了した。



学術林内の視察



復元された東大演習林時代の水文観測施設



質疑の様子



ワークショップ後の記念撮影



東大時代の宿舎



標本室

3) 慶南科学技術大学校学術林調査

9時30分慶南科学技術大学校生命科学資源大学を訪問、学部長をはじめ同校教員に挨拶ののち、同校の「晋農館」(校史館)を見学した。前身の晋州農業学校の講堂であった建物で、日本統治時代のものを含む、多くの品が展示されていたことが印象的であった。

その後同校学術林に移動し、まず学術林事務所でキム・チュンシク教授より学術林の概要について説明を受けた。標高は約400~1200mで、平均気温13°C、平均降水量1708mm、地質は主に花崗岩と変成岩からなり、主な樹種はカラマツとヒノキである。同校の学術林は旧京大朝鮮演習林の第1~4林班に当たる地域で、1969年から同校の演習林として国から国有林を貸与されているという。貸与期間は5年または10年で、経営計画を提出して貸与を受け、満期になると計画どおりの経営が行われたか審査されるとのことであった。なお、以前は旧九大演習林の一部も慶南科技大の学術林であったが、現在は慶尚大学校の学術林となっているとのことであった。

事務所での説明後、まず京大演習林時代に造られた堰(砂防施設)に案内していただいた。現存する京大時代の遺物はこれが唯一のものだという。ついで林道を登って、谷の保全事業が行われている場所と、それに隣接する造林地を視察した。最後に2015年に国費で建造した砂防ダムを見学した。

キム教授によれば、戦後この地域の山林は無主地の状態になっていて、朝鮮戦争以降1970年代に至るまで木炭製造のため木材の切り出しが行われており、そのため日本時代の木はなく、大きな木もほとんどない。また、現在学術林は国有林・国立公園内であるため国家統制が厳しいこと、大学の予算が少ないこと、常駐職員が1人しかいないことが問題点であるとのことであった。



慶南科学技術大学校生命科学資源大学訪問



「晋農館」の見学



「晋農館」前での記念撮影



キム教授による説明



京大演習林時代につくられた砂防施設



林内の造林地

帝国大学農学部教官人事一覧

【凡例】

- 1 本表は、帝国大学の各農科大学・農学部の助教授・教授の人事情報を一覧にしたものである。
- 2 助教授・教授の項目はその職における在任期間を示す。「(兼)」を付したものは他の職との兼務であることを示す。
- 3 出身大学等の項目で大学院に在籍したことがわかる者については卒業大学の後に「→大学院」を付した。
- 4 前職・後職の項目は、各大学への着任・離任の直前・直後の職で、それぞれ原則として1年以内のものを掲載した。
- 5 留学の項目は文部省留学生として派遣されたものについて記載した。
- 6 講座の項目は、教授で専担講座があるものを記載した。講座を移動している場合は「→」で示した。
- 7 助教授・教授・留学の項目の「―」は該当がないことを、「?」は不明であることを表す。その他の項目の「―」は不明であることを表す。

【出典】

- ・『官報』各号。
- ・各帝国大学『一覧』各号。
- ・東京大学百年史編集委員会編『東京大学百年史』資料三（東京大学、1986年）第六部一覧・図表。
- ・九州大学百年史編集委員会編『九州大学百年史』第11巻資料編IV（九州大学、2017年）第一部VII。
- ・京都大学百年史編集委員会編『京都大学百年史』資料編3（同、2001年）第4編4。
- ・「京都大学 歴代総長・教授・助教授履歴検索システム」(<https://kensaku.ku1.archives.kyoto-u.ac.jp/rireki/>)。
- ・辻直人『近代日本海外留学の目的変容―文部省留学生の派遣実態について』（東信堂、2010年）

東京帝国大学

氏名	助教授	教授	卒業大学	前職	後職	留学	講座
青木誠四郎	1926.2.5 - 1937.3.31	—	東京帝国大学文学部→大学院	—	東京農業教育専門学校教授	—	
秋葉満寿次	1935.3.15 - 1940.8.13	1940.8.14 - 1955.6.14	東京帝国大学農学部農学科	農商務省	—	—	農業工学第二
朝井勇宣	1939.8.23 - 1944.5.9	1944.5.10 - 1953.7.31	東京帝国大学農学部農芸化学科	盛岡高等農林学校教授	応用微生物学研究所教授	—	発酵生産学
浅見与七	1923.8.20 - 1932.12.23	1932.12.24 - 1954.3.31	東京帝国大学農科大学農学科	侯爵鍋島家農園研究員	—	米英独 (1929-1931)	園芸学第一
明日山秀文	1943.8.10 - 1944.12.25	1944.12.26 - 1969.3.31	東京帝国大学農学部農芸化学科	東京帝国大学農学部講師	—	—	植物病理学
麻生慶次郎	1901.10.23 - 1912.4.11	1912.4.12 - 1936.3.31	東京帝国大学農科大学農芸化学科→大学院	—	日本大学農学部長	独仏米 (1909-1912)	農芸化学化学第一
雨宮育作	1920.3.30 - 1929.2.5	1929.2.6 - 1948.3.30	東京帝国大学農科大学水産学科	東京帝国大学農科大学水産学科助手	名古屋大学農学部教授	—	水産学第一
荒木光太郎	1919.11.10 - 1927.3.25	1927.3.26 - 1935.6.6	東京帝国大学法科大学→大学院	—	東京帝国大学経済学部教授	—	農政学経済学第一
新崎盛敏	1948.11.25 - 1964.3.31	—	東京帝国大学農学部水産学科	東京大学農学部助手	東京大学農学部教授	—	
有馬啓	1947.3.8-1958.10.15	—	東京帝国大学農学部農芸化学科	—	東京帝国大学農学部教授	—	
有馬頼寧	1920.11.8 - 1924.3.20	—	東京帝国大学農科大学農学科	東京帝国大学農学部農学実科講師	—	—	
有賀久雄	1945.3.10 - 1949.11.29	—	東京帝国大学農学部農学科	—	東京大学農学部教授	—	
安藤広太郎	—	1923.11.10 - 1932.3.31 (兼)	帝国大学農科大学農学科	農林省農業試験場長	農林省農業試験場長	—	農学第三
飯沼康雄	1942.12.30 - 1942.12.30	—	東京帝国大学農学部農学科	東京帝国大学農学部助手	—	—	
池田伴親	1906.2.14 - 1907.3.15	—	東京帝国大学農科大学農学科→大学院	東京帝国大学農科大学講師	—	—	
池野成一郎	1891.9.25 - 1909.3.8	1909.3.9 - 1927.3.31	帝国大学理科大学植物学科	—	—	独蘭英仏 (1907-1909)	植物学
石川千代松	—	1890.8.7 - 1924.4.2	東京大学理学部生物学科	東京大学助教授	—	—	動物学昆虫学養蚕学第一
石川昌	1933.3.17 - 1936.4.10	1936.4.11 - 1954.3.31	東京帝国大学農科大学水産学科	—	—	—	水産学第二
石森直人	? - 1937.3.31	—	東京帝国大学農科大学農学科	東京帝国大学農学部講師	東京農業教育専門学校教授	米仏独 (1921-1923)	
磯辺秀俊	—	1942.1.27 - 1962.3.31	東京帝国大学農学部第二部	宇都宮高等農林学校教授	日本大学教授	—	農学第一
磯山広居	1891.9.28 - 1894.7.6	—	東京農林学校林学科	—	—	—	

氏名	助教授	教授	卒業大学	前職	後職	留学	講座
板垣四郎	1921. 11. 14 - 1936. 12. 11	1936. 12. 12 - 1947. 3. 31	東京帝国大学農科大学獣医学科	東京帝国大学農学部助手	麻生獣医科大学学長	—	家畜内科学家畜外科学第一
伊東孝一	1929. 6. 11 - 1935. 6. 26	1935. 6. 27 - 1949. 3. 31	東京帝国大学農科大学水産学科	—	—	独仏米 (1932-1934)	水産海洋学
伊藤武夫	—	1939. 4. 26 - 1947. 9. 29	東京帝国大学農科大学林学科	三重高等農林学校教授	新潟県立農林専門学校校長	米仏瑞西 (1921-1923)	林学第四
稲垣乙丙	—	1906. 6. 25 - 1925. 3. 31	帝国大学農科大学農学科→大学院	盛岡高等農林学校教授	—	独 (1900-1903)	農林物理学気象学
猪熊泰三	1936. 8. 13 - 1943. 5. 26	1943. 5. 27 - 1965. 3. 31	東京帝国大学農学部林学科	東京帝国大学農学部助手	—	—	植物学
今井吉平	1891. 6. 13 - 1903. 10. 29	1909. 3. 17 - 1913. 12. 2	東京農林学校獣医科	陸軍省馬政局馬政官 (教授前職)	盛岡高等農林学校教授 (助教授後職)	独 (1900-1903)	家畜生理学→畜産学第二
岩住良治	1902. 3. 31 - 1907. 4. 8	1911. 11. 28 - 1935. 3. 30	東京帝国大学農科大学農学科	盛岡高等農林学校教授	—	英独 (1903-1906)	畜産学第一
上野英三郎	1902. 3. 31 - 1909. 2. 28 1910. 5. 26 - 1911. 11. 27	1911. 11. 28 - 1925. 5. 23	帝国大学農科大学農学科	東京帝国大学農科大学講師	—	独仏 (1906-1910)	農業工学
江口武夫	1936. 12. 2 - 1945. 7. 16	1945. 7. 17 - 1945. 7. 17	東京帝国大学農学部農学科	—	—	—	
江本修	1918. 6. 15 - 1934. 4. 17	1934. 4. 18 - 1945. 9. 29	東京帝国大学農科大学獣医学科	東京帝国大学農科大学講師	—	—	家畜内科学家畜外科学第三
大久保義夫	1943. 6. 30 - 1950. 5. 21	—	東京帝国大学農学部獣医学科	農林省獣疫調査所技師	—	—	
大越伸	1946. 12. 6 - 1951. 5. 31	—	東京帝国大学農学部獣医学科	東京農林専門学校教授	—	—	
大島泰雄	1936. 11. 21 - 1950. 6. 29	—	東京帝国大学農学部水産学科→大学院	東京帝国大学農学部助手	東京大学教授	—	
岡田真一郎	1890. 6. 20 - 1896. 4. 20	—	東京農林学校農学科	東京農林学校教授	—	—	
岡部利雄	1943. 5. 14 - 1948. 1. 30	1948. 1. 31 - 1966. 3. 31	東京帝国大学農学部獣医学科	—	—	—	畜産学第二
荻原貞夫	1942. 3. 5 - 1948. 1. 30	—	東京帝国大学農学部林学科・コロンビア大学	—	—	—	
奥田讓	1912. 8. 17 - 1921. 6. 23	—	東京帝国大学農学部農芸化学科	東京帝国大学農科大学講師	九州帝国大学農学部教授	米英瑞西瑞典 (1919-1921)	
小倉鉦太郎	1898. 9. 14 - 1909. 6. 15	—	帝国大学農科大学獣医学科	東京帝国大学農科大学助手	東北帝国大学農科大学助教授	独仏 (1909-1911)	
尾崎準一	1947. 2. 14 - 1955. 3. 15 (兼)	—	東京帝国大学農科大学農芸化学科	農林省食糧研究所長	—	—	
越智勇一	1948. 12. 11 - 1963. 3. 31	—	東京帝国大学農学部獣医学科	家畜衛生研究所長	麻生獣医科大学学長	—	
加唐勝三	1937. 8. 4 - 1942. 10. 22	—	東京帝国大学農学部農学科	—	北京大学農学院	—	
春日井新一郎	1923. 5. 14 - 1939. 6. 27	1939. 6. 28 - 1952. 3. 31	東京帝国大学農科大学農芸化学科	農商務省農事試験場	—	独英米 (1937-1939)	農芸化学化学第一
勝島仙之助	1890. 6. 20 - 1891. 8. 15	1891. 8. 16 - 1921. 10. 8	駒場農学校獣医学科	東京農林学校教授	—	—	家畜内科学家畜外科学第一
加藤誠平	1944. 6. 16 - 1966. 3. 31	—	東京帝国大学農学部林学科→大学院	東京帝国大学農学部講師	東京大学農学部教授	—	

氏名	助教授	教授	卒業大学	前職	後職	留学	講座
加藤嘉太郎	1938. 5. 21 - 1946. 10. 4	—	東京帝国大学農学部獣医学科	東京帝国大学農学部助手	九州帝国大学農学部教授	—	
金沢林助	1948. 12. 27 - 1950. 2. 20	—	東京帝国大学農学部林学科	東京大学農学部助手	—	—	
鐙木外岐雄	1924. 5. 22 - 1926. 7. 7	1926. 7. 8 - 1951. 3. 31	東京帝国大学理科大学動物学科	東京帝国大学農学部助手	宇都宮大学学長	独伊伊瑞西米 (1919-1921)	動物学昆虫学養蚕学第一
神谷慶治	1939. 2. 8 - 1948. 7. 30	1948. 7. 31 - 1966. 3. 31	東京帝国大学農学部農業経済学科	東京帝国大学農学部講師	東京農業大学教授	—	農政学・経済学第二
河合鋪太郎	1894. 9. 5 - 1903. 5. 18	1903. 5. 18 - 1926. 3. 31	帝国大学農科大学林学科	東京帝国大学農科大学乙科講師	—	独奥 (1899-1903)	森林利用学
川島明八	1907. 10. 26 - 1911. 10. 31	—	東京帝国大学農科大学林学科	—	鹿児島高等農林学校教授	独仏 (1907-1911)	
川瀬善太郎	—	1895. 8. 6 - 1924. 10. 16	東京農林学校林学科	農商務省	—	独 (1892-1895)	林学第三
川瀬惣次郎	—	1924. 7. 28 - 1926. 8. 9 (兼) 1926. 8. 10 - 1939. 4. 13	東京帝国大学農科大学農芸化学科	上田蚕糸専門学校教授	—	—	生物化学
川田信一郎	1946. 9. 27 - 1960. 4. 30	—	東京帝国大学農学部農学科→大学院	—	東京大学農学部教授	—	
川内義左衛門	1924. 7. 28 - 1927. 1. 11	—	東京帝国大学農科大学林学科	—	—	—	
川原勘次郎	1911. 3. 25 - 1915. 8. 19	—	東京帝国大学農科大学林学科	—	—	—	
川村一水	1921. 11. 1 - 1926. 11. 12	—	東京帝国大学農科大学農芸化学科	東京帝国大学農科大学副手	宇都宮高等農林学校教授→九州帝国大学農学	独英米瑞典 (1924-1926)	
川村実平	—	1944. 9. 13 - 1950. 3. 31 (兼)	—	農林省技官	—	—	木材材料学第二
神田孝	1948. 2. 3 - 1953. 3. 31	—	—	—	—	—	
神立誠	1948. 6. 30 - 1953. 4. 30	—	東京帝国大学農学部農芸化学科	東北帝国大学講師	東京大学農学部教授	—	
岸上鎌吉	—	1908. 3. 27 - 1928. 3. 31	帝国大学理科大学動物学科	水産調査所第一部主任技師	—	—	水産学第一
北尾次郎	—	1890. 6. 20 - 1906. 10. 4	大学南校→ベルリン大学	東京農林学校教授	—	—	農林物理学气象学
吉川祐輝	1901. 5. 21 - 1911. 11. 27	1911. 11. 28 - 1929. 3. 30	帝国大学農科大学農学科第一部	農商務省農事試験場山陰支場長	東京農業大学学長	米瑞西奥 (1921-1923)	農学第二
衣川義雄	1921.11.14 - 1937. 6. 10	—	東京帝国大学農科大学農学科	東京帝国大学農学部助手	—	—	
木村和誠	—	1935. 9. 17 - 1941. 3. 31 (兼)	—	農林省畜産試験場技師	—	—	畜産学第一
草野俊助	1907. 1. 10 - 1925. 5. 29	1925. 5. 30 - 1934. 3. 31	東京帝国大学理科大学植物学科→大学院	東京帝国大学農科大学農学実科講師	東京文科大学教授	米伊独 (1923-1925)	植物病理学
国枝溥	1933. 11. 30 - 1948. 5. 7	1948. 5. 8 - 1949. 3. 31	—	東京帝国大学農学部助手	—	—	水産植物学
久保健磨	1906. 11. 8 - 1921. 9. 8	—	東京帝国大学農科大学農学科	東京帝国大学農科大学助手	九州帝国大学農学部教授	—	

氏名	助教授	教授	卒業大学	前職	後職	留学	講座
倉田悟	1948. 12. 21 - 1965. 6. 30	—	東京帝国大学農学部林学科→大学院	—	東京大学農学部教授	—	
鞍田純	1937. 5. 17 - 1939. 1. 21	—	東京帝国大学農学部農業経済学科	不明	—	—	
古在由直	1890. 6. 20 - 1908. 3. 18	1900. 7. 31 - 1903. 9. 8 1903. 9. 9 - 1920. 9. 26	駒場農学校農芸化学科	東京農林学校教授	—	独（1895-1900）	農産製造学
後藤格次	—	1944. 2. 23 - 1949. 3. 31	東京帝国大学農科大学農芸化学科	北里研究所部長	北里大学教授	—	農芸化学・化学第二
小南清	1924. 5. 22 - 1941. 7. 25	1941. 7. 26 - 1943. 3. 31	東京帝国大学理科大学植物学科	東京帝国大学農科大学講師	財団法人長尾研究所理事兼主任研究員	独伊米（1936-1937）	植物学
小柳達男	1942. 3. 31 - 1947. 12. 10	—	東京帝国大学農学部農芸化学科	農林省蚕糸試験場技師	岩手大学農学部教授	—	
近藤康男	1931. 6. 16 - 1941. 7. 22	1941. 7. 23 - 1943. 8. 6 1946. 3. 16 - 1959. 3. 31	東京帝国大学農学部農業経済学科	東京帝国大学農学部助手	武蔵大学教授	—	農政学第二
斎藤一馬	1890. 6. 20 - ?（兼）	—	—	農商務属	—	—	
坂口謹一郎	1927. 2. 21 - 1939. 6. 27	1939. 6. 28 - 1958. 3. 31	東京帝国大学農学部農芸化学科	東京帝国大学農学部講師	理化学研究所副理事長	—	農芸化学化学第五
酒匂常明	1890. 6. 11 - 1891. 4. 12	1891. 4. 13 - 1892. 12. 7	駒場農学校農学科	東京農林学校教授	北海道庁財務部長	—	
桜井莊三	1934. 4. 17 - 1939. 1. 13	—	東京帝国大学農学部林学科	—	—	—	
佐々木清綱	—	1941. 6. 4 - 1955. 3. 31	東京帝国大学農学部農学科	九州帝国大学農学部教授	日本大学農獣医学部教授	独伊米（1935-1937）	畜産学第一
佐々木喬	1920. 3. 30 - 1925. 1. 27	1929. 6. 21 - 1949. 3. 31	東京帝国大学農科大学農学科→大学院	京都帝国大学農学部教授（教授前職）	京都帝国大学農学部教授（助教授後職）、鳥取大学学長（教授後職）	独英米仏伊（1922-1924）	農学第二
佐々木忠次郎	1890. 6. 20 - 1891. 4. 12	1891. 4. 13 - 1921. 10. 8	東京大学理学部生物学科	東京農林学校教授	—	—	動物学昆虫学養蚕学第二
佐々木林治郎	1925. 8. 3 - 1942. 2. 20	1942. 2. 21 - 1959. 3. 31	東京帝国大学農学部農芸化学科	東京帝国大学農学部講師	—	—	畜産製造学
佐藤寛次	1907. 5. 14 - 1925. 11. 7	1925. 11. 8 - 1939. 3. 31	東京帝国大学農科大学農学科→大学院	東京帝国大学農科大学農業教員養成所講師	東京農業大学学長兼理事長	米英仏独瑞西（1918-1920）	農学第一
沢村真	1902. 3. 31 - 1911. 11. 27	1911. 4. 6 - 1926. 3. 31	東京農林学校農学科	東京帝国大学農科大学農業教員養成所講師	—	—	農芸化学化学第三
塩入松三郎	—	1942. 4. 6 - 1950. 3. 31	東京帝国大学農科大学農芸科学科	農商務省農事試験場農芸化学主任	滋賀県立農業短期大学長	—	地質学土壌学
志賀泰山	—	1890. 9. 13 - 1893. 9. 9	大学南校	東京大林区署長	—	—	林学第一
篠原泰三	1939. 3. 4 - 1959. 4. 30	—	東京帝国大学農学部農業経済学科	東京帝国大学農学部助手	東京大学農学部教授	—	
柴田栄吉	1891. 9. 28 - 1895. 3. 29	—	東京農林学校林学科	農商務省林務官補	農商務省営林技師？	—	
芝本武夫	1941. 6. 12 - 1946. 6. 24	1946. 6. 25 - 1966. 3. 31	東京帝国大学農学部林学科	東京高等農林学校教授	東京農業大学教授	—	森林化学
島田錦蔵	1935. 6. 27 - 1941. 4. 29	1941. 4. 30 - 1964. 3. 31	東京帝国大学農学部林学科	—	—	—	林学第三

氏名	助教授	教授	卒業大学	前職	後職	留学	講座
島村虎猪	1912. 8. 17 - 1922. 11. 7	1922. 11. 8 - 1943. 3. 31	東京帝国大学農科大学獣医学科	東京帝国大学農科大学農学実科講師	日本獣医畜産大学教授	英米仏独（1919-1921）	家畜生理学
清水幸重	1924. 12. 19 - 1938. 6. 14	—	—	東京帝国大学技師	東京帝国大学技師	—	
庄司英信	—	1948. 6. 30 - 1965. 3. 31	東京帝国大学農学部農学科農業土木学専修	九州大学農学部助教授	—	—	農業機械学
白井光太郎	1890. 6. 20 - 1907. 5. 19	1907. 5. 20 - 1925. 3. 31	帝国大学理科大学植物学科	東京農林学校教授	—	—	植物病理学
末松直次	1925. 2. 28 - 1936. 3. 30	—	東京帝国大学農科大学農学科	東京高等農林学校教授	—	—	
杉二郎	1947. 1. 30 - 1954. 4. 30	—	東京帝国大学農学部農業土木学科	日本専売公社中央研究所塩研究部長	東京大学農学部教授	—	
杉山直儀	1942. 12. 15 - 1954. 4. 30	—	東京帝国大学農学部農学科	東京帝国大学農学部助手	東京大学農学部教授	—	
鈴木梅太郎	1900. 6. 28 - 1906. 5. 2 1906. 9. 25 - 1907. 9. 20（兼）	1907. 9. 21 - 1934. 12. 5	東京帝国大学農科大学農芸化学科→大学院	—	満洲国大陸科学院顧問	瑞西独仏（1901-1905）	農芸化学化学第二
鈴木重礼	1903. 2. 3 - 1908. 10. 13	—	東京帝国大学農科大学農芸化学科→大学院	東京帝国大学農科大学農学実科講師	東北帝国大学農科大学教授	米仏独（1908-1911）	
鈴木竹麿	1915. 6. 7 - 1926. 6. 9	—	東京帝国大学農科大学獣医学科	陸軍一等獣医正	朝鮮総督府技師	米仏独（1922-1924）	
鈴木文助	—	1934. 12. 19 - 1946. 2. 15	東京帝国大学農科大学農芸化学科	京都帝国農学部大学教授	—	—	農芸化学化学第二
鈴木善祐	1948. 12. 21 - 1968. 4. 30	—	東京帝国大学農学部獣医学科	—	明治大学農学部教授	—	
須藤義衛門	1891. 7. 22 - 1893. 9. 10	1893. 9. 11 - 1924. 4. 2	駒場農学校獣医学科	札幌農学校教授	—	—	家畜内科学家畜外科学第二
住木諭介	1936. 8. 13 - 1946. 9. 10	1946. 12. 19 - 1951. 3. 31	東京帝国大学農学部農芸化学科→大学院	東京帝国大学農学部助手	理化学研究所副理事長	—	農産製造学
扇田正二	1947. 11. 28 - 1951. 4. 15	—	東京帝国大学農学部林学科	—	東京大学農学部教授	—	
宗正雄	1913. 9. 23 - 1923. 6. 19	1923. 6. 20 - 1944. 9. 30	東京帝国大学農科大学農学科	住友別子鋳業所	—	米英仏（1920-1922）	動物学昆虫学養蚕学第三
菌部一郎	1914. 1. 7 - 1924. 12. 18	1924. 12. 19 - 1941. 3. 31	東京帝国大学農科大学林学科	清国雲南省高等学堂講師	海軍司政長官マカッサル総合科学研究所長	—	林学第三
高石堯	1924. 2. 9 - 1927. 8. 11	—	東京帝国大学農科大学農芸化学科	農商務省農事試験場技師	公立実業学校教諭	—	
高島規孝	1917. 4. 6 - 1925. 8. 16	—	東京帝国大学農科大学林学科	—	岐阜高等農林学校教授	仏瑞西米（1923-1925）	
高橋偵造	1906. 5. 18 - 1922. 11. 7	1922. 11. 8 - 1936. 3. 31	東京帝国大学農科大学農芸化学科	大蔵省醸造試験所	—	米（1917-1920）	農産製造学→農芸化学化学第五
高橋延清	1943. 8. 27 - 1954. 6. 30	—	東京帝国大学農学部林学科	東京帝国大学農学部助手	東京大学農学部教授	—	

氏名	助教授	教授	卒業大学	前職	後職	留学	講座
高原末基	1922. 11. 2 - 1954. 3. 15	—	東京帝国大学農学部林学科	東京帝国大学農学部助手	名古屋大学農学部教授	—	
竹内良三郎	1927. 3. 26 - 1934. 4. 14	—	東京帝国大学法科大学政治学科	第五高等学校教授	東京帝国大学学生主事	—	
竹下武松	1920. 3. 30 - 1928. 1. 26	—	帝国大学理科大学動物学科選科	鹿児島県第一鹿児島中学校長	—	—	
田島一郎	1944. 8. 28 - 1947. 9. 3	—	—	—	—	—	
多々良恕平	1890. 6. 20 - 1893. 9. 9	—	—	東京農林学校教授	—	—	
田中丑雄	1925. 12. 4 - 1931. 2. 13	1931. 2. 14 - 1950. 3. 31	東京帝国大学農科大学獣医学科	東京帝国大学農学部助手	東京農工大学学長	英仏米 (1923-1925)	家畜衛生学家畜薬物学
田中宏	1890. 6. 20 - 1900. 6. 27	1900. 6. 28 - 1922. 11. 8	駒場農学校獣医学科	東京農林学校教授	—	—	家畜解剖学
田中節三郎	1892. 10. 3 - 1903. 11. 21	—	駒場農学校農学科	農商務省技手	—	独仏 (1901-1902)	
田中貞次	—	1925. 12. 5 - 1926. 4. 20 (兼) 1926. 4. 21 - 1951. 3. 31	東京帝国大学農科大学農学科	九州帝国大学農学部教授	茨城県立農科大学長	英仏瑞西 (1919-1921)	農業工学第一
田町与三郎	1890. 6. 20 - 1892. 4. 28	—	東京農林学校林学科	東京農林学校教授	—	—	
玉利喜造	1890. 6. 20 - 1891. 4. 12	1891. 4. 13 - 1903. 1. 14	駒場農学校農学科	東京農林学校教授	盛岡高等農林学校校長	—	畜産学→園芸学
玉利勤治郎	1947. 3. 8 - 1949. 6. 29	—	東京帝国大学農学部農芸化学科→大学院	東京帝国大学農学部助手	新潟大学農学部教授	—	
津郷友吉	1943. 5. 27 - 1969. 5. 31	—	東京帝国大学農学部農芸化学科	第七陸軍航空技術研究所嘱託	東京大学農学部教授	—	
辻行雄	1924. 9. 15 - 1925. 10. 18	—	東京帝国大学農科大学林学科	林業試験場技手兼農商務省技師	林業試験場技師	—	
津野慶太郎	1890. 6. 20 - 1905. 4. 24	1905. 4. 25 - 1925. 3. 31	東京農林学校獣医学科	東京農林学校教授	—	独 (1901-1904)	家畜衛生学家畜薬物学
東条健二	1935. 6. 27 - 1944. 3. 19	1944. 3. 20 - 1958. 3. 31	東京帝国大学農学部農学科	東京帝国大学農学部講師	—	—	
東畑精一	1924. 8. 21 - 1933. 11. 29	1933. 11. 30 - 1959. 3. 31	東京帝国大学農学部第二部	東京帝国大学農学部助手	東京農業大学教授	米 (1926-1927)、米独英 (1928-1930)	農政学経済学第二
遠山祐三	1929. 2. 20 - 1937. 10. 15	—	—	伝染病研究所技師	伝染病研究所技師	—	
時重初熊	1890. 6. 20 - 1902. 2. 3	1902. 2. 4 - 1913. 4. 19	駒場農学校獣医学科	東京農林学校教授	—	—	家畜内科学家畜外科学第三
苔名孝太郎	1923. 5. 30 - 1937. 8. 10	—	東京帝国大学農科大学林学科	三菱商事技師	朝鮮総督府林業試験場技師→京都帝国大学教授	—	
外山亀太郎	1902. 2. 7 - 1905. 2. 6 1908. 2. 6 - 1917. 12. 17	1917. 12. 18 - 1918. 3. 31	帝国大学農科大学農学科第一部→東京帝国大学農科大学大学院	東京帝国大農科大学講師 (1905 - 1908)	—	—	動物学昆虫学養蚕学第三
豊永真理	1893. 9. 11 - 1906. 5. 8	1906. 5. 9 - 1910. 9. 30	東京農林学校農学科	—	朝鮮総督府勸業模範場技師・朝鮮総督府農林学校教諭	—	
内藤元男	1947. 5. 30 - 1955. 5. 15	—	東京帝国大学農学部農学科	—	東京大学農学部教授	—	

氏名	助教授	教授	卒業大学	前職	後職	留学	講座
長岡宗好	1890. 6. 20 - 1893. 9. 9 1895. 4. 2 - 1906. 9. 24	1906. 9. 25 - 1907. 12. 29	東京農林学校農学科	東京農林学校教授	—	仏独白 (1903 - 1906)	農芸化学化学第三
中川柳次郎	1890. 6. 20 - 1891. 9. 29	—	—	東京農林学校教授	大林区署技師	—	
長倉義夫	1940. 7. 11 - 1940. 7. 12	—	東京帝国大学農学部獣医学科	東京帝国大学農学部助手	—	—	
永田竜之助	1940. 9. 13 - 1947. 11. 13	—	? → 東京帝国大学農学部大学院	東京帝国大学農学部助手	—	—	
中塚友一郎	1944. 10. 18 - 1954. 4. 30	—	東京帝国大学農学部林学科	東京農林専門学校教授	東京大学農学部教授	—	
長戸一雄	1944. 1. 27 - 1951. 3. 31	—	東京帝国大学農学部農芸化学科	東京農業教育専門学校教授	—	—	
中田覚五郎	—	1937. 7. 31 - 1939. 11. 14 (兼)	東京帝国大学農科大学農学科	九州帝国大学農学部教授	—	米英仏独 (1919 - 1921)	植物病理学
中野信二	1937. 5. 17 - 1950. 3. 31	—	東京帝国大学農学部林学科	皇室林野局技師	—	—	
中村賢太郎	1924. 8. 21 - 1925. 5. 18 1930. 6. 10 - 1933. 11. 29	1933. 11. 30 - 1956. 3. 31	東京帝国大学農学部林学科	—	—	—	林学第二
中村延生蔵	1946. 6. 21 - 1946. 6. 22	—	? → 東京帝国大学農学部大学院	—	—	—	
中山正章	1928. 4. 14 - 1945. 7. 27	—	東京帝国大学農学部林学科	東京帝国大学農学部助手	—	—	
那須皓	1917. 8. 27 - 1923. 6. 19	1923. 6. 20 - 1946. 6. 8	東京帝国大学農科大学農学科 → 大学院	なし	—	米英仏瑞西 (1920 - 1922)	農政学経済学第三
西松二郎	1890. 6. 20 - 1893. 5. 20	—	東京大学理学部地質学科	東京農林学校教授	—	—	
西川五郎	1944. 7. 27 - 1957. 4. 30	—	東京帝国大学農学部農学科	—	—	—	
錦織英夫	1932. 7. 15 - 1939. 1. 21	—	東京帝国大学農学部農業経済学科	東京帝国大学農学部助手	—	—	
西田司一	1947. 8. 30 - 1955. 5. 15	—	—	宇都宮農林専門学校教授	東京大学農学部教授	—	
仁田直	1900. 8. 24 - 1916. 12. 25	1916. 12. 26 - 1934. 3. 31	帝国大学農科大学獣医学科 → 大学院	東京帝国大学農科大学農学実科講師	—	米英仏獨 (1913 - 1916)	家畜内科学家畜外科学第三
日塔正俊	1946. 2. 12 - 1956. 10. 15	—	東京帝国大学農学部林学科	東京帝国大学農学部助手	東京大学農学部教授	—	
新渡戸稲造	—	1906. 9. 28 - 1909. 12. 17 (兼)	札幌農学校	第一高等学校校長	—	—	
丹羽鼎三	1929. 7. 8 - 1932. 7. 14	1932. 7. 15 - 1952. 3. 31	東京帝国大学農科大学農学科	三重高等農林学校教授	明治大学農学部教授	米英獨 (1922 - 1924)	園芸学第二
沼田大学	1921. 1. 21 - 1924. 4. 22	—	東京帝国大学農学部林学科	東京帝国大学農学部助手	京都帝国大学農学部教授	獨仏米 (1925 - 1927)	
野口正三	1948. 3. 31 - 1963. 3. 31	—	—	—	—	—	

氏名	助教授	教授	卒業大学	前職	後職	留学	講座
野口弥吉	1933. 7. 31 - 1937. 5. 25	—	東京帝国大学農学部農学科	東京帝国大学農学部助手	—	—	農学第三
野間海造	1929. 7. 8 - 1947. 12. 17	—	東京帝国大学農学部農学科	—	—	米 (1931 - 1932)	
幡谷正明	1948. 9. 22 - 1965. 4. 30	—	東京帝国大学農学部獣医学科	—	東京大学農学部教授	—	
馬場真一郎	1944. 6. 16 - 1946. 9. 20	—	東京帝国大学農学部農芸化学科	—	—	—	
浜崎信太郎	1944. 6. 17 - 1946. 3. 25	—	—	鳥取農林専門学校教授	—	—	
原敬造	1940. 6. 29 - 1943. 10. 20 1946. 7. 15 - 1949. 12. 30	—	東京帝国大学農学部林学科	東京帝国大学農学部助手	—	—	
原十太	—	1911. 11. 28 - 1933. 3. 31	帝国大学理科大学動物学科	東北帝国大学農科大学助教授	—	英仏独 (1909 - 1911)	水産海洋学
原瀬	1899. 5. 15 - 1911. 11. 27	1911. 11. 28 - 1929. 3. 30	帝国大学農科大学農学科	農商務省林務官	—	—	園芸学
日出平昇	1944. 12. 26 - 1946. 12. 12	—	—	—	—	—	
檜山義夫	1941. 7. 22 - 1949. 6. 29	—	東京帝国大学農学部水産学科	東京帝国大学農学部助手	東京大学農学部教授	—	
平井信二	1946. 12. 27 - 1951. 4. 30	—	—	—	東京大学農学部教授	—	
平塚英吉	—	1926. 6. 30 - 1948. 3. 27	東京帝国大学農科大学農芸化学科	農商務省蚕種製造所所長	農林省農業技術研究所所長	—	農芸化学化学第三
福田次郎	1938. 3. 16 - 1947. 6. 25	—	東京帝国大学農学部林学科→大学院	東京帝国大学農学部講師	京都大学農学部教授	—	
福田仁志	1941. 5. 29 - 1955. 9. 30	—	東京帝国大学農学部農学科農業土木学専修→大学院	—	東京大学農学部教授	—	
藤岡光長	—	1926. 8. 10 - 1927.12.27 (兼) 1927.12.28 - 1945. 10. 3	東京帝国大学農科大学林学科→大学院	九州帝国大学農学部教授	—	米英仏独瑞西 (1921 - 1923)	森林利用学
藤田利克	1923. 5. 14 - 1925. 10. 15	—	—	—	—	—	
藤林誠	1944. 8. 7 - 1946. 2. 11	1946. 2. 12 - 1958. 1. 10	東京帝国大学農学部林学科→大学院	農林省林業試験場技師	—	—	森林利用学
藤原彰夫	1940. 1. 27 - 1947. 8. 9	—	東京帝国大学農学部農芸化学科	東京帝国大学農学部助手	東北大学農学部教授	—	
古島敏雄	1948. 10. 7 - 1959. 4. 30	—	東京帝国大学農学部農業経済学科	東京帝国大学農学部講師	東京大学農学部教授	—	
星冬四郎	1937. 5. 17 - 1946. 12. 18	1941. 12. 19 - 1968. 3. 31	東京帝国大学農学部獣医学科	—	北里大学教授	—	家畜生理学
堀田正逸	1901. 10. 3 - 1925. 6. 16	—	東京帝国大学農科大学林学科→イエール大学大学院	東京帝国大学農科大学助手	九州帝国大学農学部教授	—	
本田幸介	1890. 6. 20 - 1896. 2. 3	1896. 2. 4 - 1906. 5. 11	駒場農学校農学科	東京農林学校教授	韓国統監府勸業模範場長など→九州帝国大学農学部教授	独 (1891 - 1895)	畜産学
本多静六	1892. 7. 28 - 1900. 6. 27	1900. 6. 28 - 1927. 3. 31	東京農林学校林学科	—	—	—	林学第二

氏名	助教授	教授	卒業大学	前職	後職	留学	講座
牧俊夫	1922. 10. 28 - 1936. 3. 31	—	東京帝国大学農科大学林学科	東京帝国大学助手	—	—	
増井清	1922. 11. 8 - 1935. 6. 26	1935. 6. 27 - 1948. 3. 31	東京帝国大学農科大学獣医学科→大学院	東京帝国大学農学部講師	名古屋大学農学部教授	—	家畜解剖学
町田咲吉	—	1910. 7. 16 - 1930. 3. 31	帝国大学農科大学第二部	韓国統監府技師	—	—	水産学第三
町田次郎	1924. 5. 22 - 1945. 3. 9	1945. 3. 10 - 1945. 10. 3	東京帝国大学農科大学農学科	東京帝国大学農学部講師	—	—	
松井直吉	—	1890. 6. 20 - 1911. 2. 1	大学南校、東京開成学校化学科	第三高等学校教頭	—	—	農芸化学化学第一
松江吉行	1940. 9. 13 - 1949. 6. 29	—	東京帝国大学農学部水産学科→大学院	東京帝国大学農学部助手	東京大学農学部教授	—	
松崎藏之助	1890. 9. 13 - 1896. 7. 24	1896. 7. 25 - 1898. 7. 18	帝国大学法科大学政治学科→大学院	—	東京帝国大学法科大学教授	—	農政学経済学
松野礪	—	1890. 6. 20 - 1893. 11. 9	エーベルヴァルデ官立山林学校	東京農林学校教授	農商務省林務官	—	
松葉重雄	1933. 3. 17 - 1939. 5. 7	1939. 5. 8 - 1948. 3. 31	東京帝国大学農科大学獣医学科	東京帝国大学農科大学講師	東京獣医畜産大学学長	—	家畜内科学家畜外科学第二
松原卓二	1945. 9. 20 - 1946. 2. 16	—	東京帝国大学農学部林学科	岐阜農林専門学校教授	—	—	
松山芳彦	1920. 11. 8 - 1944. 4. 21 1946. 9. 30 - 1949. 8. 30	—	東京帝国大学農科大学農芸化学科	—	東京大学農学部教授	—	
三浦伊八郎	1918. 6. 15 - 1926. 7. 7	1926. 7. 8 - 1946. 4. 2	東京帝国大学農科大学林学科	東京帝国大学農科大学講師	日本大学農学部教授	独英米瑞西瑞典 (1923 - 1925)	森林化学
右田伸彦	1938. 5. 21 - 1946. 6. 24	1946. 6. 25 - 1969. 3. 31	東京帝国大学農学部林学科→大学院、カリフォルニア大学	東京帝国大学農学部助手	岩手大学農学部教授	—	木材化学
右田半四郎	1895. 6. 3 - 1907. 5. 19	1907. 5. 20 - 1930. 3. 31	帝国大学農科大学林学科	農商務省林務官補	—	独墺洪 (1903 - 1906)	林学第一
水野武夫	1935. 12. 4 - 1937. 3. 31	—	東京帝国大学農学部農学科	東京帝国大学農学部講師	東京農業教育専門学校教授	仏 (1927 - 1930)	
三井進午	1947. 11. 19 - 1952. 4. 30	—	東京帝国大学農学部農芸化学科	農林省農業試験場土壌肥料部長	東京大学農学部教授	—	
南享二	1947. 3. 8 - 1966. 5. 15	—	東京帝国大学農学部農芸化学科	—	東京大学農学部教授	—	
嶺一三	1935. 6. 27 - 1947. 3. 23	—	東京帝国大学農学部林学科	東京帝国大学農学部講師	—	—	
三村鐘三郎	1899. 5. 31 - 1911. 3. 31	—	帝国大学農科大学林業科	東京帝国大学農科大学助手	農商務省林務技師	—	
三宅驥一	1911. 11. 21 - 1932. 7. 14	1932. 7. 15 - 1937. 3. 31	東京帝国大学理科大学植物学科選科	東京帝国大学農科大学講師	—	—	植物学
三好東一	—	1944. 5. 6 - 1951. 3. 31	東京帝国大学農科大学林学科	宮内省帝室林野局技師	—	—	木材材料学第一
望月峯	1928. 4. 14 - 1935. 3. 31	—	—	—	東京高等農林学校教授	独伊米 (1936 - 1938)	

氏名	助教授	教授	卒業大学	前職	後職	留学	講座
森高次郎	1936. 4. 18 - 1939. 6. 27	1939. 6. 28 - 1958. 3. 31	東京帝国大学農学部農芸化学科	東京帝国大学農学部講師	日本大学農獣医学部教授	—	水産学第三
森要太郎	1890. 6. 20 - 1896. 7. 3	—	東京農林学校農学科	東京農林学校教授	農商務省農事試験場技師	—	
守屋物四郎	1890. 6. 20 - 1896. 4. 1 1896. 4. 2 - 1902. 1. 24 (兼)	—	東京大学理学部化学科	東京農林学校教授	東京工業学校教授	—	
諸戸北郎	1899. 8. 31 - 1912. 6. 18	1912. 6. 18 - 1934. 3. 31	東京帝国大学農科大学林学科→大学院	—	東京農林専門学校講師	独塊洪英仏 (1910 - 1912)	林学第四
八鍬儀七郎	1903. 10. 22 - 1911. 10. 31	—	東京帝国大学農科大学農学科	—	盛岡高等農林学校教授	独英米 (1906 - 1910)	
安田与七郎	1948. 6. 19 - 1965. 4. 30	—	東京大学農学部農業土木学科	—	東京大学農学部教授	—	
矢作栄蔵		1907. 5. 20 - 1921. 2. 17 1921. 2. 18 - 1931. 3. 31 (兼)	東京帝国大学法科大学政治学科→大学院	東京帝国大学農学部農学実科講師	東京帝国大学経済学部教授	—	農政学経済学第二
藪田貞治郎	1921. 6. 4 - 1924. 12. 26	1924. 12. 27 - 1949. 3. 31	東京帝国大学農科大学農芸化学科→大学院	東京帝国大学農学部講師	化学研究所主任研究員	英仏独米 (1922 - 1924)	農産製造学
山県宇之吉	1909. 1. 25 - 1924. 4. 13 1928. 5. 5 - 1929. 10. 15	—	東京帝国大学農科大学農芸化学科	農商務省農事試験場技師 (~1909) 宇都宮高等農林学校教授 (1924~1928)	宇都宮高等農林学校校長	米英独 (1921 - 1923)	
山川洵	—	1923. 12. 28 - 1943. 3. 21 (兼)	東京帝国大学農科大学農芸化学科	水産講習所教授	—	—	水産化学
山崎輝男	1947. 9. 11 - 1964. 11. 30	—	—	農林技官	東京大学農学部教授	—	
山崎不二夫	1948. 4. 15 - 1951. 4. 30	—	東京帝国大学農学部農学科	東京農林専門学校教授	東京大学農学部教授	—	
山田浩一	1944. 7. 1 - 1958. 3. 31	—	東京帝国大学農学部農芸化学科	京都大学化学研究所研究員	東京大学農学部教授	—	
山本脩太郎	1940. 4. 4 - 1946. 12. 18	1946. 12. 19 - 1970. 3. 31	東京帝国大学農学部獣医学科	東京帝国大学農学部助手	東京農工大学教授	—	家畜内科学家畜外科学第三
湯川又夫	1909. 10. 1 - 1922. 8. 9	—	東京帝国大学農科大学農芸化学科	—	九州帝国大学農学部教授	米英瑞西独 (1920 - 1922)	
与倉東隆	1890. 6. 20 - 1894. 3. 30	—	駒場農学校獣医学科	東京農林学校教授	麻生獣医学校	—	
横井時敬	—	1894. 7. 21 - 1922. 11. 8	駒場農学校農学科	農学会幹事長	東京農業大学学長	—	農学第一
吉田正男	1922. 10. 28 - 1933. 7. 31	1933. 8. 1 - 1954. 3. 31	東京帝国大学農科大学林学科	東京帝国大学農学部助手	東京農工大学学長	独伊米 (1930 - 1932)	林学第一
脇水鉄五郎	1896. 7. 25 - 1917. 12. 17	1917. 12. 18 - 1928. 3. 31	帝国大学理科大学地質学科	東京帝国大学農科大学講師	—	独米 (1912 - 1924)	地質学土壌学
和田国次郎	1890. 6. 20 - 1891. 9. 27	—	東京農林学校林学科	東京農林学校教授	農商務省秋田大林区署技師	—	

氏名	助教授	教授	卒業大学	前職	後職	留学	講座
輪田潔	1942. 2. 21 - 1943. 10. 10	—	東京帝国大学農学部農学科	東京帝国大学農学部助手	海軍技師・マカッサル研究所所員	—	
和田垣謙三	—	1898. 7. 19 - 1919. 7. 19	東京大学文学部	東京帝国大学法科大学教授	—	—	農政学経済学→農政学経済学第一
渡辺勘次	—	1936. 4. 15 - 1947. 9. 30	東京帝国大学農科大学農学科	蚕糸試験場生理部長	蚕糸試験場嘱託	—	動物学昆虫学養蚕学第二
渡辺資仲	1943. 10. 25 - 1955. 10. 31	—	東京帝国大学農学部林学科	東京帝国大学農学部助手	東京大学農学部教授	—	
渡辺庸一郎	1927. 2. 12 - 1932. 5. 23	—	東京帝国大学農学部→大学院	東京大学農学部助手	京都帝国大学農学部助教授	独米（1936 - 1938）	

北海道帝国大学

氏名	助教授	教授	出身大学等	前職	後職	留学	講座
相澤保	1940.12.28-1944.3.14 (兼)	—	北海道帝国大学農学部林学科	南洋庁熱帯産業研究所技師	南洋庁熱帯産業研究所技師	—	
明峰正夫	1907.9.1-1918.8.9	1918.8.10-1938.4.30	札幌農学校	熊本県立熊本農業学校教諭	—	米英伊瑞西独 (1920-1921)	農学第三
足立仁	1922.3.28-1926.5.3	—	北海道帝国大学農学部農芸化学科	北海道帝国大学農学部助手	台湾総督府高等農林学校教授	—	
荒又操	1937.11.9-1947.1.?	1947.1.?	北海道帝国大学農学部農業経済学科	北海道帝国大学農学部助手	—	—	
井口賢三	1913.8.9-1924.12.26	1924.12.27-1946.3.20	東北帝国大学農科大学農学科	東北帝国大学農科大学助手	日本獣医畜産専門学校長	英米独瑞西 (1922-1924)	畜産学第三
井澤英二	1926.8.12-1926.8.25	—	北海道帝国大学農学部農芸化学科選科	北海道帝国大学農学部助手	—	—	
池田福海	1923.3.31-1927.12.24 (兼)	—	京都帝国大学理学部化学科	公立実業学校教諭	—	—	
石塚喜明	1940.5.17-1945.10.19	1945.10.20-1970	北海道帝国大学農学部農芸化学科→大学院	北海道帝国大学農学部助手	—	—	農芸化学第一
市川厚一	1920.1.8-1925.8.2	1925.8.3-1946.3.31	東北帝国大学農科大学畜産学科→大学院	北海道帝国大学農学部講師	—	—	比較病理学
逸見文雄	1918.9.21-1923.12.27	1923.12.28-1948.3.31	東北帝国大学農科大学農芸化学科	—	—	—	農芸化学第三→農産製造学
伊藤誠哉	1909.9.23-1918.8.9	1918.8.10-1950.10.25	東北帝国大学農科大学農学科	東北帝国大学農科大学助手	北海道大学総長	英米独仏 (1921-1923)	植物学第二→植物学第三
伊藤信夫	1943.8.9-1954.?	—	北海道帝国大学農学部農芸化学科→大学院	北海道帝国大学農学部助手	北海道大学農学部教授	—	
伊藤光治	1923.4.21-1958.?	—	北海道帝国大学農学部農芸化学科	北海道帝国大学農学部助手	北海道大学農学部教授	—	
犬飼哲夫 (哲男)	1923.5.14-1930.3.31	1930.4.1-1961.4	北海道帝国大学農学部農業生物学科	北海道帝国大学農学部助手	酪農学園大学教授	米 (1926-1927)	動物学昆虫学養蚕学第一
今田敬一	1926.7.22-1948.4.21	1948.4.22-1960	北海道帝国大学農学部林学科	北海道帝国大学農学部助手	—	—	林学第四
上田半二郎	1924.8.21-1924.8.22	—	—	北海道帝国大学農学部助手	—	—	
上原徹三郎	1914.10.12-1931.3.19	1931.3.20-1946.3.20	東北帝国大学農科大学農学科	東北帝国大学農科大学助手	—	英仏独 (1924-1927)	殖民法学
内田登一	1930.5.1-1939.8.30	1939.8.31-1961.4	北海道帝国大学農学部農業生物学科	北海道帝国大学農学部助手	—	独伊米 (1937-1939)	動物学昆虫学養蚕学第二

氏名	助教授	教授	出身大学等	前職	後職	留学	講座
内山幸三	1910.8.31-1914.2.13	—	東京帝国大学農科大学林学科	東北帝国大学農科大学 林学科教授	—	—	
宇留野祐寿	1937.3.25-1946.8.31	—	北海道帝国大学農学部林学科	北海道帝国大学農学部 実科講師	北海道帝国大学附属農 林専門部教授	—	
大井上義近	1918.4.1-1921.10.7 (兼)	—	東京帝国大学理科大学地質学科	鉾山監督署技師	農商務技師	米 (1915-1917)	
大沢正之	1922.7.26-1933.11.13	1933.11.14-1958.3.31	北海道帝国大学農学部林学科	北海道帝国大学農学部 助手	—	独伊米 (1931-1933)	林学第三
大島金太郎	—	1907.9.1-1920.5.17 1920.5.18-1928.3.15 (兼)	札幌農学校	札幌農学校教授	台湾總督府中央研究所 技師兼台湾總督府技師 兼台北帝国大学理農学 部教授	米独 (1898-1903)	農芸化学第二
大島幸吉	1922.3.13-1924.? (兼) 1926.3.13-1935.3.30 (兼)	—	北海道帝国大学農科大学農芸化学科	—	北海道帝国大学附属水 産専門部教授	英独 (1930-1931)	
大竹多気	—	1910.6.30-1911.8.1	工部大学校機械工学科	千住製絨所技師	米沢高等工業学校長	—	
大野直枝	—	1910.11.10-1913.10.19	東京帝国大学理科大学植物学科→大 学院	広島高等師範学校教授	—	—	植物学第二
岡村精次	1924.10.22-1927.8.13	—	東北帝国大学農科大学農学科第二部	—	岐阜高等農林学校教授	—	
小川敬次郎	—	1926.4.5-1927.8.13 (兼)	東京帝国大学工科大学土木工学科	北海道帝国大学工学部 教授	北海道帝国大学工学部 教授	—	森林工学
奥田彥	1919.7.31-1925.11.25	—	東北帝国大学農科大学農学科第二部	内務属	岐阜高等農林学校教授	英独米丁 (1923-1925)	
小熊捍	1913.10.3-1929.5.14	1929.5.15-1930.3.31 1930.4.1-1940.3.22 (兼)	東北帝国大学農科大学農学科	東北帝国大学農科大学 助手	北海道帝国大学理学部 教授	英独米白 (1923-1925)	
小倉鉦太郎	1909.6.16-1911.7.21	1911.7.22-1930.4.30	帝国大学農科大学獣医学科	東京帝国大学農科大学 助教授	—	独仏 (1909-1911)	獣医学第二
尾崎卓郎	1928.10.30-1942.7.21 (兼)	—	東北帝国大学農科大学農芸化学科	松山高等学校教授	陸軍司政官	—	
影山純介	1912.8.31-1927.8.12	1927.8.13-1936.7.11	東京帝国大学農科大学林学科	—	—	独仏米喫 (1925-1927)	森林工学
葛西勝弥	1917.1.30-1924.2.1	1924.2.2-1933.11.11	東京帝国大学農科大学獣医学科→大 学院	東北帝国大学農科大学 実科講師	—	米仏英 (1917-1920)	家畜衛生学
加藤静夫	1941.7.10-1941.12.17	—	北海道帝国大学農学部農業生物学科 昆虫学学科	北海道庁技手	北京大学理学院副教授	—	
加藤泰治	1907.9.11-1913.8.11	1913.8.12-1923.3.29	札幌農学校→ミネソタ大学→マギ ール大学 (カナダ)	札幌農学校講師	—	—	獣医学第一
亀井専次	1926.4.7-1953.5?	—	北海道帝国大学農学部林学科	北海道帝国大学農学部 講師	北海道学芸大学教授	—	

氏名	助教授	教授	出身大学等	前職	後職	留学	講座
川口栄作	1933.4.20-1933.11.13	1933.11.14-1948.8.30 1948.8.31-? (兼)	北海道帝国大学農学部農学科第一部	九州帝国大学農学部助 教授	宇都宮農林専門学校長	—	動物学昆虫学養蚕学第 三
神田八郎	1935.7.2-1935.8.31	—	北海道帝国大学農学部畜産学科第一 部	北海道帝国大学農学部 助手	—	—	
菊池武直夫	1923.1.23-1923.5.1 1925.6.6-1939.3.24	1939.3.25-1952.3.31	北海道帝国大学農学部農学科第一部	北海道帝国大学農学部 助手	宮城県立農業試験場長	米独 (1929-1931)	農学第四
北村義重	1931.9.18-1936.8.13	—	北海道帝国大学農学部林学科→大学 院	—	北海道庁技師	—	
木下栄次郎	1919.10.22-1945.6.22	—	東北帝国大学農科大学林学科	北海道帝国大学農学部 林学実家講師	北海道帝国大学附属農 林専門部教授	—	
工藤祐舜	1917.12.3-1926.2.19	—	東京帝国大学理学部植物学科	—	台湾總督府高等農林学 校教授	—	
黒沢亮助	1923.4.21-1932.4.22	1932.4.23-1955.3	東北帝国大学農科大学畜産学科第二 部	—	—	—	比較病理学→獣医学第 一→獣医学第二
小出房吉	—	1909.6.30-1910.8.30 (兼) 1910.8.31-1926.10.20	東北帝国大学農科大学林学科→大学 院	盛岡高等農林学校教授	—	独奥 (1900-1903)	林学第一
郡場寛	—	1915.8.9-1920.8.20	東京帝国大学理科大学植物学科→大 学院	東北帝国大学農科大学 講師	京都帝国大学理学部教 授	米英瑞西伊仏 (1918- 1920)	植物学第二
小華和忠士	1922.6.16-1928.10.14	1928.10.15-1952.3.31	東北帝国大学農科大学畜産学科第二 部	北海道帝国大学農学部 助手	帯広畜産大学教授	独米伊 (1926-1928)	獣医学第一
小林巳智次	1923.4.21-1939.3.29	1939.3.30-1952.10.31	東京帝国大学法科大学政治学科	北海道帝国大学農学部 講師	北海道大学法経学部教 授	仏独米 (1927-1929)	農林法律学
金俊三	1936.9.10-1941.7.30	1941.7.31-1947.9.30	北海道帝国大学農学部林学科	—	—	—	森林工学
近藤金助	1918.9.21-1924.7.28	—	東北帝国大学農科大学農芸化学科	北海道帝国大学農科大 学助手	京都帝国大学農学部教 授	独英米 (1922-1924)	
権平昌司	1934.4.30-1935.5.5 (兼) 1935.5.6-1947.6.29	1947.6.30-1963	北海道帝国大学農学部農学科、東京 帝国大学工学部土木工学科	北海道帝国大学工学部 助教授	—	—	農芸物理学
斎藤三郎	1941.5.29-1943.5.11	1943.5.12-1949.5.30	北海道帝国大学農学部農業生物学科	北海道帝国大学農学部 講師	北海道大学水産学部教 授	—	水産生物学第二
斎藤良秀	1927.6.13-1934.8.31	—	東北帝国大学農科大学林学科	陸軍二等主計	—	—	附属演習林
坂村徹	1918.11.5-1921.12.8	1921.12.9-1930.3.31 1930.4.1-1940.7.15 (兼)	東北帝国大学農科大学農学科	—	北海道帝国大学理学部 教授	米英瑞西丁瑞典 (1919- 1921)	植物学第二
桜井精兵	1924.6.28-1928.7.22	—	北海道帝国大学農学部林学科	北海道庁技手	—	—	
佐々木準長	1944.7.22-1962.4.?	—	—	帝室林野局技師	—	—	(演習林)
佐々木西二	1939.9.2-1945.10.19	1945.10.20-1972	北海道帝国大学農学部農芸化学科	北海道帝国大学農学部 講師	札幌静修短期大学教授	—	応用菌学

氏名	助教授	教授	出身大学等	前職	後職	留学	講座
佐々三郎	1941.9.3-1947.12.10	—	北海道帝国大学農学部農芸化学科	北海道帝国大学農学部 副手	—	—	
佐藤昌介	—	1907.9.1-1918.3.31	札幌農学校	札幌農学校校長	北海道帝国大学総長	—	農学第二
佐藤昌彦	1928.9.28-1939.4.12 (兼) 1939.4.13-1947.12.15	—	東京帝国大学法学部法律学科	北海道帝国大学農学部 講師	—	—	
佐藤義夫	1920? -1937.6.29	1937.6.30-?	東北帝国大学農科大学林学科	北海道帝国大学農学部 助手	—	独伊米 (1935-1937)	林学第二
里正義	1910.8.13-1921.3.10	1921.3.11-1945.3.31	東北帝国大学農科大学農学科	東北帝国大学農科大学 助手	—	米英瑞西 (1918-1920) 伊 (1934)	皮革製造学
沢田英吉	1939.4.13-1951.3?	—	北海道帝国大学農学部農業生物学科	北海道帝国大学農学部 助手	北海道大学農学部農学 科教授	—	
沢山智	1930.5.1-1937.5.31	—	東北帝国大学農科大学林学科	北海道帝国大学農学部 講師	—	—	
穴戸乙熊	1907.9.1-1910.8.30 (兼) 1910.8.31-1913.8.12	1913.8.12-1938.3.31	東京帝国大学農科大学林学科	札幌農学校教授	—	独米 (1909-1912)	林政学及森林管理学
柴田桂太	—	1908.9.8-1910.4.11	東京帝国大学理科大学植物学科→大 学院	第一高等学校教授	東京帝国大学理科大学 助教授	—	植物学第二
島倉亨次郎	1934.5.15-1941.5.2	—	北海道帝国大学農学部農業生物学科	北海道帝国大学農学部 助手	帯広高等獣医学校教授	—	
島善鄰	1927.6.14-1939.3.24	1939.3.25-1950?	東北帝国大学農科大学農学科第一部	地方農林技師 (青森 県)	—	—	園芸学第一
清水誠	1926.9.11 - 1926.9.30	—	北海道帝国大学農学部畜産学科第一 部	北海道帝国大学農学部 助手	東京高等工業学校教授	—	
東海林力蔵	1907.9.1-1918.8.9	1918.8.10-1923.12.11	札幌農学校	札幌農学校助教授	岐阜高等農林学校校長	英米独 (1913-1915)	農学第四
白浜潔	1933.7.31-1942.4.10	1942.4.11-1945.5.26	北海道帝国大学農学部農芸化学科	北海道帝国大学農学部 助手	—	—	水産化学第一
新郷高一	1926.6.12-1935.3.30 (兼)	—	東京帝国大学工学部土木工学科	北海道帝国大学工学部 助教授	北海道帝国大学工学部 教授	—	
新庄巍	1920.3.22-1923.4.30 1923.4.30-1926.5.3 (兼)	—	東京帝国大学理科大学動物学科	—	北海道帝国大学予科教 授	—	
鈴木重禮	1908.10.14-1911.6.29	1911.6.30-1913.3.1	東京帝国大学農科大学農芸化学科→ 大学院	東京帝国大学農科大学 助教授	—	米仏独 (1908-1911)	
須田金之助	1907.9.1-1911.4.26	1911.4.26-1933.4.20	札幌農学校	札幌農学校助教授	—	—	動物学昆虫学養蚕学第 三
高岡熊雄	—	1907.9.1-1933.12.9	札幌農学校農学科	札幌農学校教授	北海道帝国大学総長	独 (1901-1904)	農政学殖民学→農政学

氏名	助教授	教授	出身大学等	前職	後職	留学	講座
高岡道夫	1941.4.15-1945.10.19	1945.10.20-1950.10.3	東北帝国大学理学部化学科	北海道帝国大学予科教授	—	—	水産化学第二
高倉新一郎	1936.5.1-1946.9.17	1946.9.18-1953.7.31	北海道帝国大学農学部農業経済学科	北海道帝国大学農学部助手	北海道大学経済学部教授	—	殖民学
高田栄五郎	1941.4.14-1941.4.15	—	—	北海道帝国大学農学部附属農場書記兼助手	農場事務（嘱託）	—	
高田幸二	1937.3.25-1939.5.19	—	北海道帝国大学農学部畜産学科第二部	北海道帝国大学農学部講師	—	—	
高橋栄治	—	1924.3.25-1946.3.20	札幌農学校	北海道帝国大学附属水産専門部教授	—	英独米（1922-1924）	農芸化学第二
高畑倉彦	1931.8.28-1938.4.30	1946.12.27-1964.3.31	北海道帝国大学農学部畜産学科第二部	北海道帝国大学農学部講師（助教授前職） 台北帝国大学理農学部教授（教授前職）	奉天農業大学教授（助教授後職）	—	家畜解剖学
高松正信	1909.6.1-1915.8.8	1915.8.9-1947.4.11?	札幌農学校	東北帝国大学農科大学助手	—	独英米（1910-1913）	畜産学第二
高山節繁	1907.9.1-1912.5.17（兼）	—	—	札幌農学校教授	台湾総督府阿里山作業所技師	—	
高山保二	1927.11.26-1929.10.11	—	北海道帝国大学農学部畜産学科第一部	北海道帝国大学農学部助手	樺太庁中央試験所技師	—	附属農場
田川隆	1940.7.15-1943.5.11	1943.5.12-?	北海道帝国大学農学部農業生物学科	北海道帝国大学農学部講師	—	—	植物学第二
田上政敏	1933.3.31-1935.3.31（兼）	—	—	北海道帝国大学予科教授	北海道帝国大学予科教授	—	
武野毅二郎	1939.3.31-?	—	—	北海道帝国大学農学部講師	—	—	
武原熊吉	?-1920.4.21（兼）	—	東京帝国大学理科大学化学科	東北帝国大学農科大学予科教授	東京高等師範学校教授	—	
田添元	1936.9.10-1936.11.12	—	北海道帝国大学農学部林学科	北海道帝国大学農学部助手	台北帝国大学附属農林専門部教授	—	
館脇操	1935.6.27-1952.3.15	1952.3.16-1963	北海道帝国大学農学部農業生物学科	—	酪農学園大学教授	—	
田所哲太郎	1911.8.18-1921.3.10	1921.3.11-1930.3.31 1930.4.1-1933.?（兼）	東北帝国大学農科大学農芸化学科	東北帝国大学農科大学助手	北海道帝国大学理学部教授	—	農芸化学第三
田中義麿	1911.8.5-1921.6.24	—	東北帝国大学農科大学農学科	東北帝国大学農科大学助手	九州帝国大学農学部助教授	英米仏伊独（1920-1922）	

氏名	助教授	教授	出身大学等	前職	後職	留学	講座
田中館(下斗米)秀三	1909.9.23-1918.3.31(兼)	—	東京帝国大学理科大学地質学科	東北帝国大学農科大学講師	北海道帝国大学農科大学講師	独米(1910-1914)	
田町以信男	1926.4.7-1945.10.19	—	北海道帝国大学農学部農芸化学科	北海道帝国大学農学部助手	北海道帝国大学附属農林専門部教授	—	
多和田寛	1926.4.5-1936?(兼)	—	東京帝国大学工学部応用化学科	北海道帝国大学工学部助教授	北海道帝国大学工学部助教授	—	
谷井増甫	1922.6.19-1925.1.28(兼)	—	京都帝国大学理科大学化学科	—	—	—	
谷本勇造	1934.9.6-1939.3.31	—	東北帝国大学農科大学林学科	北海道帝国大学農学部助手	—	—	附属演習林
土屋(鈴木)四郎	1924.10.22-1928.10.30 1928.10.30-1930.3.22(兼) 1930.3.22-1950.4.?	—	東京帝国大学法学部法律学科仏蘭西法専修	北海道帝国大学農学部講師	帯広畜産大学教授	仏独(1930-1932)	
常松栄	1937.11.9-1950.2.12	—	北海道帝国大学農学部農学科	北海道帝国大学農学部農学実科授業囑託	北海道大学農学部教授	—	
手島寅雄	1929.9.26-1932.11.9	1932.11.10-1954	東北帝国大学農科大学農学科第一部	鳥取高等農業学校教授	北星学園女子短期大学教授	英米独(1923-1925)	農学第一
時田郁	1940.5.17-1945	1945-1967?	—	函館高等水産学校教授	—	—	水産植物学→水産生物学第一
時任一彦	1907.9.1-1911.4.25	1911.4.26-1934.4.24	札幌農学校	札幌農学校助教授	—	独(1901-1904)	農芸物理学
柄内吉彦	1921.5.23-1930.4.30	1930.5.1-1957.3.31	北海道帝国大学農科大学農学科第三部	北海道帝国大学農学部助手	—	米英独(1928-1930)	植物学第一
鳥山嶺男	1908.6.4-1908.10.13 1908.10.14-1935.3.28(兼)	—	東京帝国大学工科大学機械工学科船用機関学専修	—	東北帝国大学農科大学水産学科教授	—	
中尾清蔵	1922.10.28-1946.3.28	1946.3.29-1946.3.30	東京帝国大学理科大学地質学科	—	—	英独米(1933-1935)	
長尾正人	1935.12.9-1939.8.30	1939.8.31-1965.?	北海道帝国大学農学部農学科	京都府立盲学校教諭	北海道武蔵女子短期大学教養科教授	独(1941-1943)	農学第三
中島九郎	1912.8.31-1922.11.12	1922.11.13-1948.3.31	東北帝国大学農科大学農学科	東北帝国大学農科大学助手	札幌文科専門学院教授	米英仏(1920-1922)	農学第二→農政学
中島広吉	1914.10.12-1929.1.20	1929.1.21-1952	東北帝国大学農科大学林学科	—	—	独(1927-1930)	林学第一
中村幸彦	1926.4.7-1942.4.10	1942.4.11-1962	北海道帝国大学農学部農芸化学科	北海道帝国大学農学部助手	北海学園大学教授	独米(1936-1938)	農芸化学第三
新島善直	—	1910.8.31-1934.4.24	東京帝国大学農科大学林学科	東北帝国大学農科大学林学科教授	—	独(1906-1907)	林学第二
西尾新六	1942?-?	—	北海道帝国大学農学部農業生物学科	—	—	—	

氏名	助教授	教授	出身大学等	前職	後職	留学	講座
西田辰三郎	1912.4.2-1918.3.31 (兼) 1918.4.1-1921.8.15 (兼) 1923.1.18-1929.3.30 (兼)	—	京都帝国大学工科大学土木工学科	東北帝国大学農科大学 土木工学科教授	北海道帝国大学附属土 木専門部教授	—	
根来簡二	1917.11.19-1918.8.5 1918.8.5-1925.6.20 (兼)	—	東京帝国大学農科大学土木工学科	東北帝国大学農科大学 土木工学科教授	北海道帝国大学農科大 学附属土木専門部教授	英仏米独 (1923- 1925)	
根本通美	1928.9.28-1930.6.28 1930.6.28-1934.6.13 (兼)	—	東京帝国大学法学部法律学科仏蘭西 法専修	北海道帝国大学予科教 授	—	—	
橋本左五郎	—	1907.9.1-1919.12.9 1919.12.10-1923.3.15 (兼)	札幌農学校	札幌農学校教授	朝鮮総督府勸業模範場 技師	独仏 (1895-1900)	畜産学第一
橋本吉雄	1937.11.9-1946.8.30 1946.8.31-1955? (兼)	—	北海道帝国大学農学部畜産学科第一 部	陸軍工兵少尉	北海道帝国大学附属農 林専門部教授	—	
蓮見道太郎	1921.3.5-1924.5.7	—	東北帝国大学農科大学林学科	朝鮮総督府技師	九州帝国大学農学部助 教授	—	
八谷正義	—	1938.5.4-1949.8.20?	東北帝国大学農科大学林学科	台北帝国大学附属農林 専門部教授	—	—	林政学及森林管理学
八田三郎	1907.9.1-1908.4.25	1908.4.26-1929.5.15	東京帝国大学理科大学動物学科選科	札幌農学校教授	—	英仏独 (1913-1915)	動物学昆虫学養蚕学第 一
羽田良禾	1940.5.17-1944.?	—	北海道帝国大学農学部農業生物学科	北海道帝国大学理学部 附属臨海実験所助手	—	—	
浜田輔一	1946.3.12-1952.3.31	—	北海道帝国大学農学部畜産学科第二 部	北海道帝国大学農学部 講師	北海道大学獣医学部教 授	—	
早川三代治	1934.2.15-1936.3.31	—	北海道帝国大学農学部農学科第一部	—	—	—	経済学財政学
林禎二郎	1930.5.1-1934.1.20	—	北海道帝国大学農学部農業生物学科	北海道帝国大学農学部 助手	九州帝国大学農学部助 教授	—	
林文平	1947.9.3-?	—	—	北海道帝国大学農学部 附属農場助手?	—	—	
半沢洵	1907.9.1-1916.6.28	1916.6.29-1941.4.5	札幌農学校	札幌農学校助教授	—	—	応用菌学
半沢道郎	1939.6.16-1957.6.30	—	北海道帝国大学理学部化学科→大学 院	北海道帝国大学農学部 助手	北海道大学農学部教授	—	
平戸勝七	1937.3.25-1946.10.14	1946.10.15-1952.3.31	北海道帝国大学農学部畜産学科第二 部→大学院	北海道帝国大学農学部 講師	北海道大学獣医学部教 授	—	家畜衛生学
富士貞吉	1929.4.20-1946.3.29	1946.3.30-1958.3.31	北海道帝国大学農学部農学科第三部	鳥取高等農業学校教授	—	英独米 (1925-1927)	植物学第三
福山伍郎	1922.3.2-1947.6.29	1947.6.30-1955.3.31	東北帝国大学農科大学林学科→大学 院	—	—	米 (1940-192)	森林工学

氏名	助教授	教授	出身大学等	前職	後職	留学	講座
藤原正	1927.5.14-1935.3.31 (兼)	—	東京帝国大学文科大学哲学学科哲学及哲学史	北海道帝国大学予科教授	北海道帝国大学予科教授	—	
星野勇三	1907.9.1-1911.4.25	1911.4.26-1938.4.7	札幌農学校	札幌農学校助教授	—	英米独仏 (1903-1907)	園芸学→園芸学第一
堀観次郎	1910.8.31-1912.6.25	—	東京帝国大学農科大学林学科	東北帝国大学農科大学林学科教授	帝室林野管理局技師	—	
堀義路	—	1925? -1926.4.5 (兼)	東京帝国大学工学部応用化学科	北海道帝国大学工学部教授	北海道帝国大学工学部教授	—	
前川十郎	1922.10.28-1946.5.?	—	東北帝国大学農科大学農学科	香川県立木田農林学校長	—	—	
前川徳次郎	1919.6.12-1936.12.11	1936.12.12-1947.10.?	東北帝国大学農科大学農学科	北海道帝国大学農学部助手	—	—	園芸学第二
前野正久	1943.6.21-1947.3.30	1947.3.31-1955.?	北海道帝国大学農学部畜産学科第一部	北海道帝国大学農学部講師	森永乳業中央研究所所長	—	畜産学第一
眞崎健夫	—	1934.5.9-1942.?(兼)	東京帝国大学医学部医学科	北海道帝国大学医学部教授	北海道帝国大学医学部教授	—	
松田武雄	1924.10.22-1943.5.11	1943.5.12-1962.3.31	北海道帝国大学農学部農業経済学科	北海道帝国大学農学部助手	—	米英独 (1926-1929)	経済学財政学
松野貞	1920.6.12-1923.3.31 (兼)	—	—	—	浜松高等工業学校教授	—	
松村松年	—	1907.9.1-1934.4.24	札幌農学校	札幌農学校教授	—	独墺 (1899-1902)	動物学昆虫学養蚕学第二
松本久喜	1941.12.17-1947.7.28	1947.7.29-1962.?	北海道帝国大学農学部畜産学科第一部	北海道帝国大学農学部助手	北海道帝国大学農学部助手	—	
三浦慶太郎	1912.8.31-1913.8.11	—	札幌農学校	—	—	—	
御園生義一	1923.4.21-1952.3.31	—	北海道帝国大学農学部農学科第一部	北海道帝国大学農学部助手	北海道大学農学部教授	—	
三田村健太郎	1930.5.27-1946.?	1946.?-1962.?	北海道帝国大学農学部畜産学科第一部	北海道帝国大学農学部助手	—	—	畜産学第二
三田村孝吉	1910.8.31-1929.3.30 (兼)	—	帝国大学理科大学数学科	東北帝国大学農科大学予科教授	東北帝国大学農科大学予科教授	—	
南鷹次郎	—	1907.4.1-1927.4.28	札幌農学校	札幌農学校教授	北海道農会会長	—	農学第一
宮井健吉	1910.8.31-1915.8.8	1915.8.9-1929.8.5	東京帝国大学農科大学林学科	東北帝国大学農科大学林学科教授	—	独 (1910-1913)	林学第三
三宅康次	1908.9.17-1918.8.9	1918.8.10-1930.10.14 1930.10.15-1932.2.25 (兼) 1932.2.26-1944.3.31	札幌農学校	秋田県立秋田農業学校教諭	—	米 (1914-1917)	農芸化学第一

氏名	助教授	教授	出身大学等	前職	後職	留学	講座
三宅捷	1920.6.14-1926.2.24	—	東北帝国大学農科大学農芸化学科	北海道帝国大学農学部助手	台湾総督府高等農林学校教授	—	
宮部金吾	—	1907.4.1-1927.4.28	札幌農学校	札幌農学校教授	—	—	植物学第一
宮脇恒	1938.11.26-?	?-?	北海道帝国大学農学部林学実科	—	—	—	
宮脇富	1918.115.-1924.12.26	1924.12.27-1941.4.1	札幌農学校・カンザス州立大学農科大学酪農学科	カンザス州立大学農科大学助教授	帯広高等獣医学学校長	英米独(1923-1924)	畜産学第一
村井延雄	1947.7.22-?	—	北海道帝国大学農学部林学科	北海道大学農学部講師	—	—	
村山大記	1946.3.12-1950.2.6	—	北海道帝国大学農学部農業生物学科	北海道帝国大学農学部助手	北海道大学農学部教授	—	
元田茂	1942-1950.3.31	—	北海道帝国大学農学部農業生物学科	北海道帝国大学農学部講師	北海道大学水産学部教授	—	
森岡勇	1912.8.31-1925.6.15	—	東北帝国大学農科大学農芸化学科	—	浜松高等工業学校教授	—	
森本厚吉	1908.6.4-1918.8.9	1918.8.10-1932.3.31	札幌農学校→ジョンズ・ホプキンス大学大学院	東北帝国大学農科大学予科教授	—	—	経済学財政学
矢島武	1947.3-1950.4.29	—	北海道帝国大学農学部農業経済学科	北海道帝国大学農学部助手	北海道大学農学部教授	—	
山根甚信	1918.12.28-1931.5.7	—	東北帝国大学農科大学畜産学科	北海道帝国大学農学部助手	台北帝国大学離農学部教授	独(1926-1928)	畜産学第三
山内源登	1923.3.2-1925.6.24	—	北海道帝国大学農学部農学科第一部→大学院	北海道帝国大学農学部講師	—	—	
山極三郎	—	1945.7.16-1947.3.9(兼) 1947.3.10-1952.3.31	北海道帝国大学農学部畜産学科	東京帝国大学伝染病研究所技師	北海道大学獣医学部教授	—	家畜解剖学→比較病理学
吉井豊造	—	1907.9.1-1919.6.10	駒場農学校	札幌農学校教授	—	独英米(1906-1908)	農産製造学
吉川藤左衛門	1908.9.17-1912.2.5	—	札幌農学校	東北帝国大学農科大学助手	台湾総督府技師	—	
吉川元民	1913.8.9-1927.6.12	1927.6.13-1945.5.?	東京帝国大学農科大学林学科	—	—	仏瑞西澳(1921-1923)	林学第四
吉田武郎	1917.12.3-1920.5.5	—	東北帝国大学農科大学農芸化学科	東北帝国大学農科大学助手	秋田県技師	—	
吉町太郎一	—	1923.5.28-1924.9.26(兼)	東京帝国大学工科大学土木工学科	九州帝国大学工学部教授	北海道帝国大学工学部教授	—	
芳村五左衛門	1925.7.11-1942.2.28(兼)	—	京都帝国大学理学部化学科	北海道帝国大学予科教授	北海道帝国大学予科教授	—	
鷲尾弘円	1922.7.26-1922.9.23	—	北海道帝国大学農学部農学科第一部	北海道帝国大学書記兼農学部助手	—	—	
渡辺侃	1927.10.4-1943.5.11	1943.5.12-1953.7.31	北海道帝国大学農学部農学科第二部	北海道庁技師	北海道大学経済学部教授	—	農学第二→農業経済学第二→農業経済学第四

九州帝国大学

氏名	助教授	教授	卒業大学等	前職	後職	留学	講座
相川広秋	—	1942.9.30-1959.9.30	東京帝国大学農学部水産学科→大学院	農林技師兼水産試験場技師	—	—	水産学第一
青峰重範	1946.4.1-1950.8.14	—	九州帝国大学農学部農芸化学科	東北帝国大学助教授	九州大学農学部教授	—	
安藤広太郎	—	1921.2.4-1926.3.17 (兼)	東京帝国大学農科大学農学科	農事試験場技師兼臨時産業調査局技師	—	—	
池田隼人	1941.4.16-1942.9.22	—	九州帝国大学農学部農学科→大学院	—	—	—	
伊藤兆司	1922.5.17-1940.3.31	1940.4.1-1946.1.31	東京帝国大学農学部農学科→大学院	東京帝国大学助手	—	独米亜爾然丁 (1928-1930)	経済学農政学第一
伊藤寿刀	1921.12.5-1928.6.7	1928.6.8-1958.3.31	東京帝国大学農学部農学科→大学院	東京帝国大学農学部附属農業教員養成所講師	—	米仏独英 (1923-1927)	園芸学
稲岡恵	1949.5.30-1951.12.31	—	九州帝国大学農学部農芸化学科→大学院	—	—	—	
井上由扶	—	1946.3.27-1974.4.1	九州帝国大学農学部林学科	帝室林野局技師	—	—	林学第一
岩片磯雄	—	1947.12.20-1972.3.31	東京帝国大学農学部農業経済学科	宇都宮農林専門学校教授	—	—	農学第三
岩田久敬	—	1948.6.30-1962.3.31	九州帝国大学農学部農芸化学科	京都繊維専門学校教授	—	—	農芸化学第三
卯尾田秀隆	1942.3.23-1945.12.26	—	富山薬学専門学校	九州帝国大学農学部講師	—	—	
上野盛道	1939.3.20-1939.3.20	—	九州帝国大学農学部農学科	—	—	—	
植村恒三郎	—	1922.7.15-1942.3.31	東京帝国大学農科大学林学科	盛岡高等農林学校教授	—	独 (1912-1914)	林学第四
内田恵太郎	—	1942.8.10-1942.12.9(兼) 1942.12.10-1960.3.31	東京帝国大学農学部水産学科→大学院	朝鮮総督府水産試験場技師兼朝鮮総督府技師	—	—	水産学第二
江崎悌三	1923.5.28-1930.3.31	1930.4.1-1957.12.14	東京帝国大学理学部動物学科	—	—	英独米仏伊 (1923-1928)	動物学第二
江藤徳	1947.9.1-1947.9.1	—	東京農業大学肥料分析講習部	九州帝国大学助手	—	—	
榎本中衛	—	1934.10.14-1936.4.15 (兼)	東京帝国大学農科大学農学科	京都帝国大学教授	京都帝国大学教授	米独伊(1930-1932)	農学第二
江原薫	1944.4.11-1959.5.31	—	東京帝国大学農学部農学科	長野県立農事試験場技師	九州大学農学部教授	—	
大岡叢	1926.5.31-1928.10.30	—	—	—	—	英独米 (1923-1925)	
大島広	1920.10.11-1922.2.21	1922.2.22-1946.9.30	東京帝国大学理科大学動植物学科→大学院	第五高等学校教授	—	英米 (1919-1921)	動物学第一
大島康義	—	1947.2.27-1967.3.31	東京帝国大学農学部農芸化学科	台北帝国大学教授 (中華民国国立台湾大学留用)	—	—	生物化学

氏名	助教授	教授	卒業大学等	前職	後職	留学	講座
太田基	1947. 9.30 - 1959.11.30	—	九州帝国大学農学部林学科	九州帝国大学農学部講師	九州大学農学部教授	—	
大野俊一	1944. 3.20 - 1951. 2.28	—	九州帝国大学農学部林学科	九州帝国大学助手	九州大学農学部教授	—	
岡島銀次	—	1921. 2.16 - 1922. 6. 3 (兼)	東京帝国大学農科大学農学科	鹿児島高等農林学校教授	鹿児島高等農林学校教授	米英独 (1914-1916)	
奥田讓	1921. 6.24 - 1922. 2.21	1922. 2.22 - 1943. 9.30	東京帝国大学農科大学農芸化学科→大学院	東京帝国大学農科大学助教授	—	米英瑞西瑞典 (1919-1921)	生物化学
小山内懋	1943. 1.30 - 1949. 7. 9	—	九州帝国大学農学部農学科	満州国開拓研究所副研究官	—	—	
片山茂樹	1925.12.14 - 1929. 6.21	1929. 6.22 - 1945. 2. 3	東京帝国大学農科大学林学科	山林技師兼営林局技師	鐘ヶ淵工業株式会社	独米瑞西 (1927-1929)	林学第一
片山佃	1936. 4.15 - 1939. 3.28	1939. 3.29 - 1963. 3.31	東京帝国大学農学部農学科第一部	農林技師兼農事試験場技師	—	—	農学第二
片山外美雄	—	1923. 3.17 - 1931.12.17	東京帝国大学農科大学農芸化学科→大学院	農事試験場技師兼農商務省技師	—	—	農芸化学第二
加藤茂苞	—	1921. 2. 4 - 1926. 3.18 1926.3.19-1928.6.7 (兼)	東京帝国大学農科大学農学科	農事試験場技師	朝鮮総督府勸業模範場長	—	農学第二
加藤退介	1948.12.27 - 1974.12.31	—	九州帝国大学農学部林学科→大学院	—	九州大学農学部教授	—	
加藤嘉太郎	1946.10. 5 - 1948. 3.30	1948. 3.31 - 1969. 3.31	東京帝国大学農学部獣医学科	東京帝国大学農学部助教授	—	—	畜産学第二
金平亮三	—	1928. 3.28 - 1942. 3.31	東京帝国大学農科大学林学科	台湾総督府中央研究所技師兼台湾総督府技師	—	和英独南北米(1926-1927)	林学第二
川口栄作	1923. 5.28 - 1933. 4.19	—	北海道帝国大学農学部農学科	北海道帝国大学助手	北海道帝国大学助教授	—	
川島祿郎	1923. 1.11 - 1944. 2.26	—	東京帝国大学農科大学農芸化学科	長野県農事試験場技師	—	独羅米 (1930-1932)	
川村一水	—	1932.10.21 - 1949.10.25	東京帝国大学農科大学農芸化学科	宇都宮高等農林学校教授	松山農科大学学長	独英米瑞典 (1924-1926)	農芸化学第一
北川松之助	1924. 9.30 - 1940. 4. 9	1940. 4.10 - 1944.12. 9	東京帝国大学農学部農芸化学科	九州帝国大学助手	—	—	農芸化学第三
木梨謙吉	1947.11.28 - 1966. 5.31	—	九州帝国大学農学部林学科	河津営林署長	九州大学農学部教授	—	
木村修三	—	1926. 3. 1 - 1946. 7. 3	東京帝国大学農科大学農学科	宇都宮高等農林学校教授	福岡農業専門学校長	独瑞西英米仏 (1922-1924)	農学第三
日下部兼道	1944. 1.29 - 1948. 1.22	—	九州帝国大学農学部林学科	福岡県林業試験場長地方技師	—	—	
久保健麿	1921. 9. 9 - 1922. 4.25	1922. 4.26 - 1940. 3.16	東京帝国大学農科大学農学科	東京帝国大学農科大学助教授	—	—	畜産学→畜産学第一
久保田藤麿	1936.11. 2 - 1939. 6.26	—	—	—	—	—	

氏名	助教授	教授	卒業大学等	前職	後職	留学	講座
熊谷才蔵	1944.6.27-1945.7.15	1945.7.16-1967.3.31	九州帝国大学農学部林学科、東京帝国大学理学部天文学科	九州帝国大学工学部助教授	—	—	林学第六
小出満二	—	1928.1.10-1936.9.15 1936.9.16-1938.4.15(兼)	東京帝国大学農科大学農学科	文部省督学官	鹿児島高等農林学校校長	独英(1910-1913)	経済学農政学第一
額綱理一郎	—	1921.5.13-1946.9.30	東京帝国大学理科大学植物学科→大学院	九州帝国大学医学部助手	—	英米丁伊(1919-1921)	植物学
高山卓爾	1923.10.5-1928.5.15	1928.5.16-1933.6.2	東京帝国大学農科大学農学科	茶業試験場技師兼農商務省技師	—	米独伊(1926-1928)	農学第二
小坂博	1926.5.31-1935.7.9	—	東京帝国大学農学部農学科	九州帝国大学助手	盛岡高等農林学校教授	—	
木場三朗	1946.3.30-1968.6.30	—	九州帝国大学農学部農学科	朝鮮総督府農業試験場技師	九州大学農学部教授	—	
小島均	1923.3.20-1947.9.29	1947.9.30-1958.3.31	東京帝国大学理科大学植物学科→大学院→退学→九州帝国大学大学院	福岡高等学校教授	—	独伊米(1933-1935)	植物学
小山準二	1922.6.26-1949.8.31	—	東京帝国大学理科大学動物学科	第六高等学校教授	—	米英伊(1931-1933)	
佐々木清綱	1923.6.7-1940.10.28	1940.10.29-1941.6.3	東京帝国大学農学部農学科→大学院	東京帝国大学助手	東京帝国大学農学部教授	独伊米(1935-1937)	畜産学第二講座
佐々木周郁	1940.7.1-1949.5.19	1949.5.20-1956.6.13	九州帝国大学農学部農芸化学科→大学院	九州帝国大学農学部講師	—	—	蚕糸化学
佐藤敬二	1942.10.8-1943.6.4	1943.6.5-1967.3.31	東京帝国大学農学部林学科→大学院	林業試験場技師	—	—	林学第三
沢村康	1921.9.9-1924.2.4	1924.2.5-1951.5.12	東京帝国大学農科大学農学科、東京帝国大学法学部政治科	農商務省	—	英米独(1921-1923)	経済学農政学第二
塩谷勉	—	1942.12.7-1974.4.1	東京帝国大学農学部林学科	宇都宮高等農林学校教授	—	—	林学第四
庄司英信	1942.3.23-1948.6.30	—	東京帝国大学農学部農学科→大学院	東京帝国大学農学部講師	東京大学農学部教授	—	
杉宏三	1949.2.23-1957.12.15	—	九州帝国大学農学部農業工学科→大学院	福岡農業専門学校講師	—	—	
鈴木清太郎	1922.6.30-1925.9.25	1925.9.26-1946.9.30	東京帝国大学理科大学理論物理学科	松山高等学校教授	—	独英仏米(1923-1925)	気象学統計学
瀬川宗吉	1942.7.11-1960.10.31	—	北海道帝国大学理学部植物学科	三井海洋生物学研究所所員	九州大学農学部教授	—	
大工原銀太郎	—	1921.2.4-1926.3.18(兼)	東京帝国大学農科大学農芸化学科	農事試験場技師・特許局技師・特許局審査官	—	英独仏米(1911-1913)	農芸化学第一
高田雄之	1939.7.26-1953.2.28	—	九州帝国大学農学部農学科	—	九州大学農学部教授	—	

氏名	助教授	教授	卒業大学等	前職	後職	留学	講座
滝元清透	1943.10.14 - 1943.10.15	—	石川県立農学校	九州帝国大学助手	日本特殊農薬製造株式会社農事試験場長	—	
竹内謙二	1923. 5.28 - 1925. 8.28	—	東京帝国大学経済学部経済学科	—	九州帝国大学法文学部助教授	—	
立野新光	1943. 6. 8 - 1953.10.26	—	九州帝国大学農学部農芸化学科	東洋ビタミン製造株式会社試験課長	—	—	
田中於菟彦	1948. 3.31 - 1961. 5.31	—	東京帝国大学農学部水産学科	三井海洋生物学研究所員	九州大学農学部教授	—	
田中貞次	1921. 6.24 - 1922. 7.14	1922. 7.15 - 1926. 4.20	東京帝国大学農科大学農学科	—	東京帝国大学農学部教授	仏英米瑞西 (1919-1921)	農業工学
田中祐一	1938.11.26 - 1944. 4.23	—	盛岡高等農林学校林学科	九州帝国大学助手	福岡県林業試験場長	—	
田中義麿	1921. 6.24 - 1922. 9. 5	1924.11. 6 - 1945. 9.29	東北帝国大学農科大学農学科	北海道帝国大学農科大学助教授	—	英米仏伊独(1919-1921)	養蚕学
田町正誉	1926. 3. 1 - 1930. 6.17	1930. 6.18 - 1956. 3.31	東京帝国大学農科大学農学科	農商務技師・東京帝国大学農学部講師	—	米伊知恵古 (1928-1930)	農業工学
丹下正治	1922. 4.25 - 1927. 5.23	1927. 5.24 - 1956. 3.31	東京帝国大学農科大学農学科	盛岡高等農林学校教授	—	英独米仏 (1925-1927)	畜産学第二→畜産学第一
筑紫春生	1949. 4. 6 - 1965. 7.31	—	九州帝国大学農学部農学科	九州大学農学部副手	九州大学農学部教授	—	
寺田一彦	—	1948.3.31 - 1952.4 (兼)	東京帝国大学理学部物理学科	中央气象台気象研究所応用気象研究室長	—	—	気象学統計学
土屋靖彦	1941. 4.16 - 1948.11.30	—	—	—	—	—	
土井藤平	1921. 8. 2 - 1924. 1.11	1924. 1.12 - 1943. 3.31	東京帝国大学農科大学林学科、東京帝国大学理科大学植物学科	東京帝国大学農学部講師	—	米仏独 (1921-1923)	林学第三
富安行雄	1939.11. 7 - 1942.11.25	1942.11.26 - 1964. 3.31	九州帝国大学農学部農芸化学科→大学院	九州帝国大学農学部講師	—	—	水産化学第二
富山哲夫	1941. 4.16 - 1942. 3.22	1942. 3.23 - 1967.11.16	九州帝国大学農学部農芸化学科→東京帝国大学大学院	—	—	米独 (1934-1935)	水産化学第一
長沢武雄	1926. 3.25 - 1944. 6.20	—	東京帝国大学農科大学林学実科、京都帝国大学理学部地球物理学専攻	京都帝国大学助手	九州帝国大学木材研究所教授	—	
中田覚五郎	1921. 1.10 - 1921.11.13	1921.11.14 - 1937.7.30 1937.7.31-1939.11.14 (兼)	東京帝国大学農科大学農学科	朝鮮総督府勸業模範場技師兼水原農林専門学校教授	—	米英仏独 (1919-1921)	植物病理学
永松土巳	1938. 1.27 - 1955.10.15	—	九州帝国大学農学部農学科	農事試験場技師	九州大学農学部教授	—	
永見健一	1926. 3. 1 - 1943. 8.31	—	東京帝国大学農学部林学科→大学院	東京帝国大学講師・東京高等造園学校講師	東京農業大学教授	—	

氏名	助教授	教授	卒業大学等	前職	後職	留学	講座
西田屹二	1922. 6.28 - 1925. 7.10	1925. 7.11 - 1958. 3.31	東京帝国大学農科大学林学科→大学院	退職東京帝国大学助手・東京帝国大学農学部講師		米仏独瑞西瑞典 (1923-1925)	林学第五
橋本重郎	—	1942. 5. 2 - 1947.11.14	東京帝国大学農学部農学科	宮崎高等農林学校教授	東北大学農学部教授	英独米 (1926-1928)	畜産学第二
蓮見道太郎	1924. 5. 7 - 1942. 8.21	1942. 8.22 - 1943.10.13	東北帝国大学農科大学林学科	北海道帝国大学助教授	—	澳米伊(1927-1929)	林学第六
初島住彦	1942.10.31 - 1942.11.27	—	九州帝国大学農学部林学科	—	陸軍司政官	—	
浜田松吉郎	1922. 5.15 - 1941. 2. 7	1941. 2. 8 - 1948. 1.19	東京帝国大学農学部農芸化学科	—	—	—	農芸化学第二
林禎二郎	1934. 1.20 - 1946. 3.15	1946. 3.16 - 1965. 3.31	北海道帝国大学農学部農業生物学科	北海道帝国大学助教授	—	—	養蚕学
原田盛重	1944. 9.13 - 1962. 1.31	—	九州帝国大学農学部林学科	和歌山県林業試験場長	九州大学農学部教授	—	
樋田豊太郎	1925.6.15 - 1937.3.6 (兼)	—	東京帝国大学法科大学法律学科→大学院	九州帝国大学講師	文部省図書監修官	—	
平井敬蔵	1924. 9.30 - 1944.10.24	1944.10.25 - 1956. 9.21	東京帝国大学農学部農芸化学科	九州帝国大学助手	—	—	農芸化学第二
平岩馨邦	—	1947. 9.20 - 1961. 3.31	東京帝国大学理学部動物学科	広島文理科大学教授	—	—	動物学第一
平尾経信	1942. 3.23 - 1945. 3.17	—	九州帝国大学農学部林学科	九州帝国大学助手	—	—	
平山定克	1941. 2. 8 - 1951. 7. 7	—	九州帝国大学農学部林学科	—	—	—	
福島栄二	1932. 7.25 - 1958. 5.31	—	東京帝国大学農学部農学科第一部	九州帝国大学助手	九州大学農学部教授	—	
藤井義典	1945. 7.16 - 1946. 8.12	—	九州帝国大学農学部農学科	九州帝国大学助手	九州帝国大学農学部副手	—	
藤岡光長	1920.11. 8 - 1923.12.27	1923.12.28 - 1927.12.27	東京帝国大学農科大学林学科→大学院	山林技師	東京帝国大学教授	米英仏独瑞西 (1921-1923)	林学第二
船津勝	1945. 1.29 - 1959. 1.31	—	九州帝国大学農学部農芸化学科→大学院	—	九州大学農学部教授	—	
堀田正逸	—	1921. 6.17 - 1925. 7. 4	東京帝国大学農科大学林学科、エール大学 (修士)	東京帝国大学助教授	—	米 (1916-1919)	林学第一
本江元吉	1943. 6.11 - 1958. 9.30	—	東京帝国大学農学部農芸化学科	東京帝国大学助手	九州大学農学部教授	—	
本田幸介	—	1921. 1.25 - 1922. 7.11 1922. 7.12 - ? (兼)	駒場農学校農学科	—	帝室林野管理局長官	独 (1891-1895)	農学第一
松平近義	1944.11.29 - 1947. 9.19	—	東京帝国大学農学部水産学科	九州帝国大学農学部講師	東北帝国大学助教授	—	
満田隆一	1921. 6.24 - 1924. 2. 1	1924. 2. 2 - 1940. 1.27	東京帝国大学農科大学農芸化学科	農事試験場畿内支場長	満洲国公主嶺農事試験場長	英独米 (1921-1923)	農芸化学第三
三村一	1941. 2. 8 - 1947.10.10	—	—	—	宮崎農林専門学校教授	—	
三好政寿	1936.10.30 - 1936.10.31	—	九州帝国大学農学部農芸化学科	九州帝国大学助手	北平綜合科学研究所	—	
森周六	1924. 7.28 - 1941.12.19	1941.12.20 - 1961. 2. 4	東京帝国大学農学部農学科	—	—	—	農業機械学
森順治郎	1921. 6.24 - 1926.10.25	—	東京帝国大学法科大学経済学科	東京帝国大学助手	—	—	

氏名	助教授	教授	卒業大学等	前職	後職	留学	講座
森川均一	1931. 3.26 - 1936.12.18	—	九州帝国大学農学部林学科→大学院	九州帝国大学助手	—	—	
盛永俊太郎	1921.12. 5 - 1926. 8.25	1926. 8.26 - 1946. 6.25 1946.6.26 - ? (兼)	東京帝国大学農学部農学科→大学院	—	農林省農事試験場長	米英独 (1922-1925)	農学第一
安松京三	1942. 1.28 - 1958. 4.30	—	九州帝国大学農学部農学科	九州帝国大学助手	九州大学農学部教授	—	
山崎何恵	1923. 2.23 - 1939. 5.28	1939. 5.29 - 1958. 3.31	東京帝国大学農科大学農芸化学科	台湾台中帝国製糖株式会社技師	—	独伊米 (1929-1931)	農産製造学→農芸化学 第四
山田竜雄	1941.10.16 - 1960. 7.31	—	—	—	九州大学農学部教授	—	
山田芳雄	1948. 7.16 - 1974. 6.30	—	東京帝国大学農学部農芸化学科→大学院	東京大学農学部	九州大学農学部教授	—	
山藤一雄	1941. 9.27 - 1946. 1.27	1946. 1.28 - 1970. 3.31	九州帝国大学農学部農芸化学科→大学院	台湾総督府糖業試験所技師	—	—	農産製造学
湯川又夫	—	1922. 8.10 - 1932. 1.28 1932. 2. 6 - 1938.11.30 (兼)	東京帝国大学農科大学農芸化学科	東京帝国大学農科大学助教授	朝鮮総督府農事試験場技師	米英瑞西独 (1920-1922)	農産製造学
吉井甫	1928. 3.16 - 1941.10.20	1941.10.21 - 1963. 3.31	東京帝国大学農学部農学科第一部	朝鮮総督府勸業模範場技手	—	—	植物病理学
渡辺治人	1939. 5.31 - 1942. 6.12	1942. 6.13 - 1967. 3.31	九州帝国大学農学部林学科→大学院	—	—	—	林学第二
渡部常樹	1947.11.28 - 1961.10.15	—	九州帝国大学農学部農芸化学科	九州大学農学部講師	—	—	

京都帝国大学

氏名	助教授	教授	出身大学等	前職	後職	留学	講座
安部卓爾	1933. 5. 27 - 1944. 3. 31	—	京都帝国大学農学部	京都帝国大学農学部講師	京都高等農林学校教授	—	
青木茂一	1941. 7. 17 - 1946. 2. 4	—	京都帝国大学農学部農林化学科	京都帝国大学農学部講師	—	—	
足立晃太郎	1939. 5. 26 - 1944. 4. 28	—	京都帝国大学農学部農林生物学科	京都帝国大学農学部助手	—	—	
井上吉之	1935. 3. 30 - 1940. 11. 13	1940. 11. 14 - 1960.1.4.	京都帝国大学農学部農林化学科	京都高等蚕糸学校教授	東京農工大学学長	—	農芸化学第二
今村駿一郎	1943. 7. 22 - 1943. 12. 21	1943. 12. 22 - 1967. 3. 31	京都帝国大学理学部植物学科→大学院(理学部)	京都帝国大学理学部講師	—	—	応用植物学
今木喬	1941. 10. 15 - 1943. 3. 31	—	京都帝国大学農学部農林化学科→大学院	京都帝国大学農学部講師	台湾総督府糖業試験所技師	—	
市河三祿	—	1923. 12. 8 - 1938. 4. 18	東京帝国大学農科大学→大学院	—	—	米独仏伊(1922-1923)	林学第一
上坂章次	1940. 6. 20 - 1950. 6. 19	—	東京帝国大学農学部畜産学科	農林省畜産試験場技師	京都大学農学部教授	—	
上田弘一郎	1930. 6. 25 - 1949. 10. 30	—	京都帝国大学農学部林学科	京都帝国大学農学部助手	京都大学農学部教授	—	
上田静男	1944. 2. 5 - 1969. 4. 1	—	—	—	—	—	
榎本中衛	1929. 1. 21 - 1932. 4. 10	1932. 4. 11 - 1955. 10. 12	東京帝国大学農科大学農学科	農商務省農事試験場技師	近畿大学教授	米独(1930-1932)	作物学
奥田東	1940. 8. 31 - 1947. 9. 29	1947. 9. 30 - 1963. 12. 14	京都帝国大学農学部農林化学科	農林省農事試験場技師	—	—	農芸化学第三
押田幹夫	1942. 3. 31 - 1944. 3. 31	—	京都帝国大学農学部農学科	静岡県農林技師	—	—	
岡崎文彬	1943. 7. 22 - 1944. 1. 23 1946. 12. 27 - 1950. 6. 29	—	京都帝国大学農学部林学科	京都帝国大学農学部助手	京都大学農学部教授	—	林学第二
小野寺幸之進	1944. 5. 13 - 1960. 8. 15	—	京都帝国大学農学部農林化学科	京都帝国大学農学部助手	京都大学農学部教授	—	
太田宣孝	1928. 2. 29 - 1942. 9. 17	—	東京帝国大学農科大学	営林署技手	—	—	
大杉繁	—	1923. 12. 7 - 1946. 1. 31	東京帝国大学農科大学	財団法人大原奨農会農業研究所化学部長	岡山農業専門学校校長	米(1916-1918)	農林化学第一→農芸化学第一
大槻正男	1925. 1. 16 - 1932. 6. 5	1932. 6. 6 - 1958. 3. 12	東京帝国大学農学部農学科→大学院	東京帝国大学農学部助手	—	独伊米(1927-1929)	農業計算学→農業経営学
尾中文彦	1937. 6. 10 - 1945. 5. 6	—	京都帝国大学農学部林学科	京都帝国大学農学部講師	京都帝国大学木材研究所教授	—	
可知貫一	—	1936. 7. 18 - 1945. 3. 2	東京帝国大学農科大学農学科	巨椋池開墾国営工事事務所長	—	—	農業工学第一
梶田茂	1927. 4. 25 - 1934. 11. 29	1934. 11. 30 - 1960. 8. 1	東京帝国大学農学部林学科	京都帝国大学農学部助手	—	独米伊(1927-1930)	林業工学第二

氏名	助教授	教授	出身大学等	前職	後職	留学	講座
香川冬夫	—	1943. 4. 30 - 1955. 2. 4	東京帝国大学農科大学	宇都宮高等農林学校校長	愛媛大学学長	—	育種学
狩野徳太郎	1932. 5. 31 - 1937. 8. 17	—	東京帝国大学農学部	京都帝国大学農学部講師	—	—	
神崎博愛	1944. 10. 18 - 1953. 3. 31	—	京都帝国大学農学部農林経済学科	京都帝国大学農学部助手	滋賀県立農業短期大学教授	—	
川口桂三郎	1945. 12. 12 - 1947. 9. 29	1947. 9. 30 - 1977. 4. 1	京都帝国大学農学部農林化学科	財団法人大原農業研究所	—	—	農芸化学第一
川上太左英	1947. 7. 14 - 1953. 10. 31	—	農林省水産講習所専攻科	水産講習所助教授	京都大学農学部教授	—	
片桐英郎	1924. 10. 9 - 1929. 10. 30	1929. 10. 31 - 1960. 9. 30	東京帝国大学農学部農芸化学科	京都帝国大学農学部助手	—	英独米丁 (1925-1927)	発酵生理及醸造学
貴島恒夫	1945. 10. 31 - 1945. 12. 23	—	京都帝国大学農学部	京都帝国大学木材研究所助教授	京都帝国大学木材研究所助教授	—	
菊池秋雄	—	1926. 7. 17 - 1943. 3. 24	東京帝国大学農科大学農学科	鳥取高校農林学校教授	京都府立高等農林学校校長	英米仏 (1920-1921)	園芸学第二
吉良竜夫	1948. 8. 12 - 1949. 6. 30	—	京都帝国大学農学部農学科	京都帝国大学農学部助手	大阪市立大学理学部教授	—	
北原覚雄	1937. 5. 17 - 1947. 11. 9	—	京都帝国大学農学部農林化学科	京都帝国大学農学部講師	京都大学食糧科学研究所教授	—	
木原均	1924. 4. 1 - 1927. 6. 30	1927. 7. 1 - 1955. 9. 30	北海道帝国大学農科大学農学科第三部→大学院	京都帝国大学農学部助手	国立遺伝学研究所長	独英米瑞 (1925-1927)	実験遺伝学
木俣正夫	—	1947. 7. 14 - 1971. 3. 31	農林省水産講習所製造科	水産試験場農林技官	—	—	水産学第三
桑原正信	1940. 10. 15 - 1948. 4. 29	1948. 4. 30 - 1968. 3. 31	京都帝国大学農学部農林経済学科→大学院	京都帝国大学農学部講師	滋賀大学長	—	農業計算学
近藤金助	—	1924. 7. 28 - 1955. 1. 23	東北帝国大学農科大学農芸化学科	北海道帝国大学農学部助教授	京都府立大学長	独英米 (1922-1924)	農林化学第四→栄養化学
古賀正巳	1924. 9. 29 - 1925. 6. 5	1925. 6. 6 - 1936. 9. 19	東京帝国大学農科大学	東京帝国大学農学部助手	—	米仏独英 (1922 - 1924)	農業工学第二
黒正巖	1925. 6. 6 - 1926. 5. 13	1926. 5. 14 - 1949. 2. 10	京都帝国大学経済学部→大学院	京都帝国大学農学部講師	岡山大学教授	英独米仏 (1923 - 1925)	農史
小西亀太郎	1924. 2. 9 - 1939. 3. 2	1939. 3. 3 - 1945. 5. 23	東京帝国大学農科大学	京都帝国大学農学部講師	—	米露独 (1929 - 1931)	農芸化学第三
小林章	1943. 7. 9 - 1948. 5. 19	1948. 5. 20 - 1973. 4. 1	京都帝国大学農学部農学科	京都帝国大学農学部助手	石川県農業短期大学教授	—	園芸学第二
佐々木喬	—	1925. 1. 28 - 1929. 6. 20	東京帝国大学農科大学農学科	東京帝国大学農学部助教授	東京帝国大学農学部教授	独英米仏伊 (1922 - 1925)	農作園芸学第一→作物学

氏名	助教授	教授	出身大学等	前職	後職	留学	講座
佐藤弥太郎	—	1924. 2. 9 - 1949. 12. 31	東京帝国大学農科大学林学科	京都帝国大学農学部講師	—	米仏独伊 (1921 - 1923)	林学第二
左田本亘	1927. 4. 25 - 1940. 6. 29	—	東京帝国大学農学部	京都帝国大学農学部講師	—	—	
志方益三	1924. 11. 15 - 1925. 12. 3	1925. 12. 4 - 1942. 1. 6	東京帝国大学農学部農芸化学科	京都帝国大学農学部講師	満洲国大陸科学院副院長	独英米チェコ (1921 - 1924)	林産化学
重松愿	1925. 3. 12 - 1950. 5. 14	—	京都帝国大学工学部	京都帝国大学工学部講師	熊本大学教授	—	
清水亘	—	1947. 5. 7 - 1963. 8. 20	京都帝国大学農学部	京都大学食糧科学研究所教授	日本大学農獣医学部教授	—	水産学第一
赤藤克己	1944. 7. 22 - 1955. 2. 28	—	京都帝国大学農学部農学科	京都帝国大学農学部助手	京都大学農学部教授	—	
杉本肇	1941. 2. 14 - 1946. 2. 5	—	京都帝国大学農学部林学科	京都帝国大学農学部助手	—	—	
杉野忠夫	1933. 5. 27 - 1935. 3. 5	—	東京帝国大学法学部→京都帝国大学大学院	京都帝国大学農学部講師	—	—	
鈴木文助	—	1923. 12. 7 - 1934. 12. 18	東京帝国大学農科大学農学科	京都帝国大学農学部講師	東京帝国大学農学部教授	米英仏独瑞 (1917 - 1920)	農林化学第二→農芸化学第二
関口鏝太郎	1925. 4. 7 - 1936. 3. 13	1936. 3. 14 - 1959. 10. 30	東京帝国大学農学部→大学院	京都帝国大学農学部講師	—	米独 (1927 - 1929)	造園学
瀬戸房太郎	1936. 10. 30 - 1936. 10. 31	—	京都帝国大学農学部農林生物学科→大学院	京都帝国大学農学部助手	華北産業科学研究所?	—	
館勇	1929. 6. 11 - 1942. 3. 24	1942. 3. 25 - 1962. 11. 3	東京帝国大学農学部農芸化学科	京都帝国大学農学部助手	—	—	林業化学
高橋一郎	1941. 4. 12 - 1958. 7. 31	—	京都帝国大学農学部農林工学科	京都帝国大学農学部講師	—	—	
高月豊一	1937. 8. 18 - 1939. 6. 16	1939. 6. 17 - 1959. 7. 18	東京帝国大学農学部農学科	農林省農林技師	—	—	農業工学第一
棚橋初太郎	1925. 10. 8 - 1956. 2. 15	—	東京帝国大学農科大学	京都帝国大学農学部講師	—	—	
竹崎嘉徳	1925. 1. 28 - 1928. 5. 10	1928. 5. 11 - 1942. 8. 15	東京帝国大学農科大学	農商務省農事試験場技師	—	英瑞米 (1926-1928)	育種学
田村豊	1925. 4. 8 - 1928. 5. 10	1928. 5. 11 - 1960. 2. 15	京都帝国大学工学部機械工学科	京都帝国大学工学部機械工学科	—	米瑞独 (1925-1928)	農業機械学
武居三吉	1925. 6. 6 - 1928. 7. 19	1928. 7. 20 - 1959. 10. 26	東京帝国大学農学部農芸化学科→大学院	理化学研究所研究生	—	独米 (1926-1928)	農産製造学→農薬化学
寺見広雄	1941. 10. 11 - 1944. 5. 2	1944. 5. 3 - 1946. 8. 2	京都帝国大学農学部農学科→大学院	京都帝国大学農学部講師	—	カリフォルニア州立大学大学院	園芸学第二

氏名	助教授	教授	出身大学等	前職	後職	留学	講座
時岡隆	1947. 9. 11 - 1948. 11. 30	—	京都帝国大学理学部動物学科	京都帝国大学助手	京都帝国大学理学部助教授	—	
鳥潟博高	1948. 8. 12 - 1954. 5. 9	—	—	—	—	—	
鳥居菅生	1938. 3. 31 - 1939. 6. 27	—	東京帝国大学農学部農学科	京都帝国大学農学部講師	—	—	
徳永雅明	1933. 9. 30 - 1944. 2. 1	—	京都帝国大学農学部→大学院	京都帝国大学農学部助手	海軍技師	—	
苦名孝太郎	—	1941. 3. 17 - 1949. 5. 30	東京帝国大学農科大学林学科→大学院	東京帝国大学農学部助教授→朝鮮総督府林業試験場技師	高知大学学長	—	林業工学第二
富樫浩吾	1925. 3. 12 - 1926. 3. 10	—	北海道帝国大学農学部農業生物学科→大学院	京都帝国大学農学部講師	盛岡高等農林学校教授	—	
永友繁雄	1935. 4. 11 - 1936. 4. 8	—	京都帝国大学農学部農林経済学科	京都帝国大学農学部助手	—	—	
中島稔	1947. 11. 28 - 1958. 12. 31	—	京都帝国大学農学部農林化学科	京都帝国大学農学部農林学科助手	京都大学農学部教授	—	
長井保	1946. 12. 27 - 1971. 3. 31	—	—	—	—	—	
並河功	—	1924. 7. 15 - 1954. 2. 19	東北帝国大学農科大学農学科	北海道帝国大学予科教授	大阪府立大学学長	米英伊 (1922 - 1924)	農作園芸学第二→園芸学第一
西井三郎	1944. 12. 26 - 1950. 10. 6	—	京都帝国大学農学部林学科	京都帝国大学農学部助手	—	—	
西山市三	1937. 5. 17 - 1946. 11. 30	—	京都帝国大学農学部農林生物学科	京都帝国大学農学部講師	京都大学食糧科学研究所教授	—	
沼田大学	1924. 4. 23 - 1927. 6. 22	1927. 6. 23 - 1943. 3. 24 1946. 12. 26 - 1954. 3. 9	東京帝国大学農学部林学科	東京帝国大学農学部助教授	陸軍司政長官・ジャワ栽培企業試験所長 (1943-1946)	独仏米 (1925 - 1927)	林学第三
羽部義孝	—	1938. 6. 9 - 1949. 12. 31	東京帝国大学農科大学農学科	畜産試験場技師中国支場長	—	—	畜産学
橋本伝左衛門	—	1924. 7. 28 - 1947. 9. 3	東京帝国大学農科大学	京都帝国大学農学部講師	滋賀県立農業短期大学学長	独英米仏 (1922-1924)	農林経済学→農業経営学
春川忠吉	—	1936. 6. 3 - 1947. 6. 6	東京帝国大学農科大学農学科→大学院	大原農業研究所昆虫部長	岡山農業専門学校校長	米英独 (1920-1923)	昆虫学
浜田稔	1947. 1. 18 - 1974. 4. 1	—	京都帝国大学理学部植物学科→大学院 (理学部)	京都帝国大学理学部・農学部研究嘱託	—	—	
服部希信	1939. 1. 28 - 1939. 1. 28	—	京都帝国大学農学部農林経済学科	京都帝国大学農学部講師	—	—	

氏名	助教授	教授	出身大学等	前職	後職	留学	講座
平吉功	1947. 7. 21 - 1950. 2. 14	—	京都帝国大学農学部農林生物学科	京都帝国大学農学部助手	岐阜大学岐阜農林専門学校教授	—	
平田憲夫	1925. 12. 10 - 1926. 5. 13	1926. 5. 14 - 1949. 12. 31	東京帝国大学農科大学 京都帝国大学経済学部	京都帝国大学農学部講師	松山農科大学教授	独仏米（1922-1925）	林政学
福田照	1949. 2. 28 - 1965. 3. 31	—	—	—	京都大学農学部教授	—	農学部附属農場
藤村吉之助	1941. 3. 31 - 1946. 11. 30	—	京都帝国大学農学部	京都府立女子専門学校教授	京都大学食糧科学研究 所教授	—	
藤田博	1949. 3. 10 - 1961. 3. 31	—	—	—	—	—	
福地喬	1931. 3. 31 - 1934. 5. 4	—	東京帝国大学農学部	京都帝国大学農学部	—	—	
福田次郎	1947. 6. 26 - 1948. 9. 18	—	東京帝国大学農学部林学科→大学院	東京大学農学部助教授	—	—	
逸見武雄	—	1924. 2. 9 - 1949. 10. 17	東北帝国大学農科大学農学科→大学院	—	浪速大学教授	米英独（1921-）	農林生物学→農林生物学第一⇒植物学病理学
松原喜代松	—	1947. 7. 14 - 1968. 12. 12	農林省水産講習所養殖科	水産講習所教授	—	—	水産学第一
松田清勝	1936. 6. 5 - 1940. 3. 29	—	京都帝国大学農学部農学科	京都帝国大学農学部助手	—	—	
松島良雄	1946. 3. 8 - 1952. 9. 30	—	京都帝国大学農学部林学科	農林技師	農林省林業試験場経営部	—	
松本熊市	1932. 11. 10 - 1946. 12. 25	—	カリフォルニア大学農科大学	京都帝国大学農学部講師	京都大学食糧科学研究 所教授	—	
増田正三	1945. 9. 28 - 1960. 6. 30	—	京都帝国大学農学部農林工学科	京都帝国大学農学部講師	京都大学農学部教授	—	
三井哲夫	1944. 11. 29 - 1950. 9. 14	—	京都帝国大学農学部農林化学科→大学院	京都帝国大学農学部講師	京都大学農学部教授	—	
三橋時雄	1944. 12. 26 - 1952. 6. 15	—	京都帝国大学農学部農林経済学科	京都帝国大学農学部助手	京都大学農学部教授	—	
村上恵二	—	1925. 7. 27 - 1954. 12. 20	東京帝国大学農科大学林学科	京都帝国大学農学部講師	信州大学農学部教授	瑞米独伊（1923-1925）	林業工学第一
麦林檜太郎	1948. 3. 31 - 1950. 11. 30	—	京都帝国大学農学部農林化学科	京都大学農学部副手	—	—	
武藤甲二	1942. 11. 10 - 1945. 10. 11	1945. 10. 12 - 1945. 10. 12	京都帝国大学農学部	華中棉産改進黨技術員	—	—	
本岡武	1949. 2. 23 - 1965. 5. 31	—	京都帝国大学農学部→大学院	京都帝国大学農学部助手	京都大学東南アジア研究センター教授	—	
山崎直樹	1926. 11. 19 - 1939. 5. 18	—	東北帝国大学理学部	京都帝国大学農学部講師	興亜院技師（興亜院華北連絡部在勤）	独伊米（1932-1934）	
山田勝次郎	1925. 4. 28 - 1930. 10. 2	—	東京帝国大学農学部→大学院	京都帝国大学農学部講師	—	英（1926-1928）	

氏名	助教授	教授	出身大学等	前職	後職	留学	講座
八木誠政	1924. 12. 27 - 1929. 4. 16	—	東京帝国大学理学部動物学科選科	財団法人大原奨農会農業研究所研究員	農林省農事試験場昆虫部嘱託	—	
湯浅八郎	—	1924. 7. 15 - 1935. 3. 30	カンザス州立農科大学→イリノイ大学大学院	京都帝国大学農学部講師	同志社総長	米独伊 (1922-1924)	農林生物学第二→昆虫学
米田勇一	1947. 7. 21 - 1970. 3. 31	—	京都帝国大学理学部植物学科	京都帝国大学理学部助手	奈良女子大学理学部教授	—	
渡辺庸一郎	1932. 5. 24 - 1939. 7. 14	1939. 7. 15 - 1961. 8. 26	東京帝国大学農学部→大学院	東京帝国大学農学部助教授	—	独米	農政学